

長野県埋蔵文化財センター一年報 8

1991

財団法人

長野県埋蔵文化財センター



1 北平Ⅰ号墳の主体部



2 塩崎城見山砦の主郭



3 塩崎城見山岩の遠景



4 松原1号古墳の石室



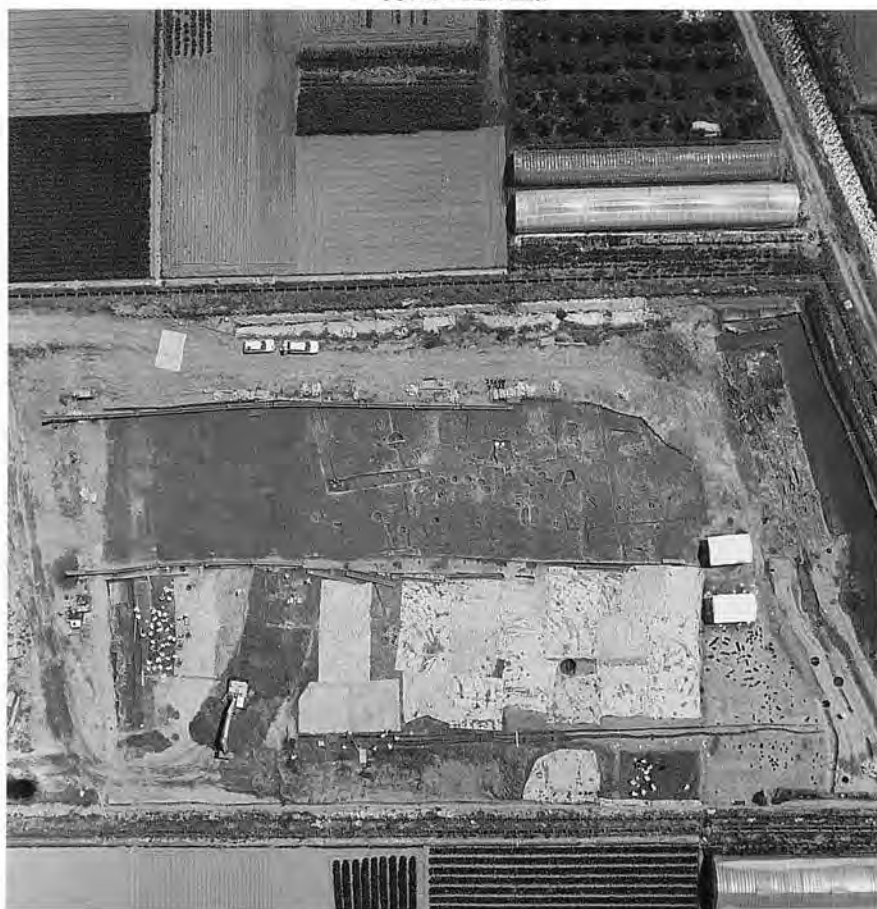
5 北平1号墳遺物出土状況



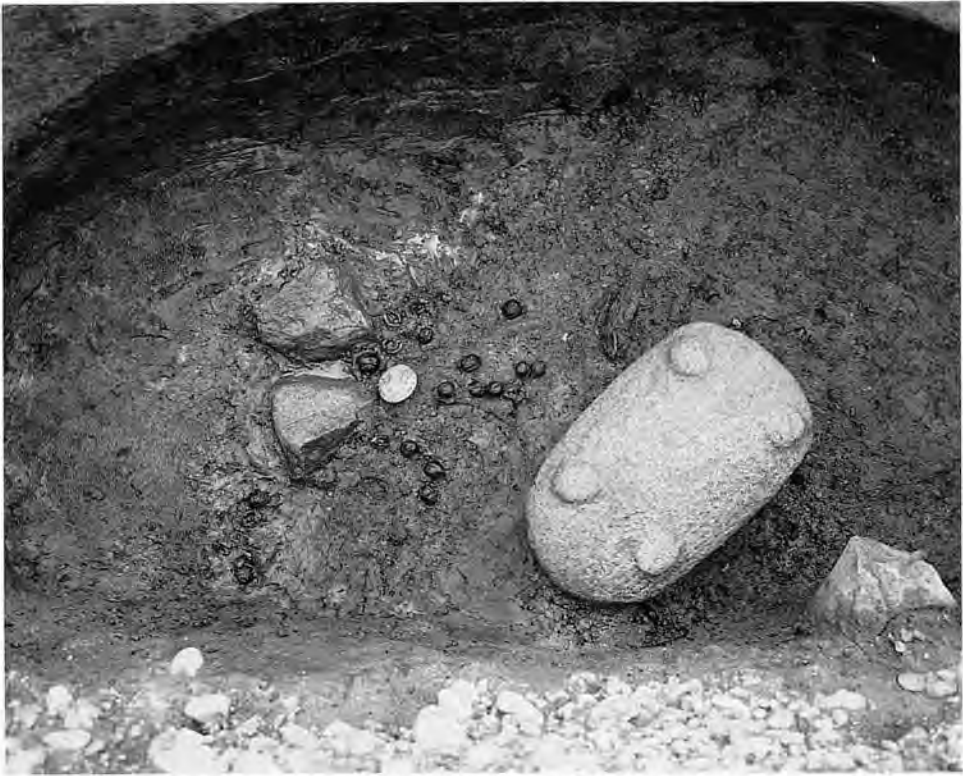
6 沢田鍋土遺跡窯跡



7 更埴条理遺跡全景



8 屋代遺跡群中世遺構分布状況



9 栗林遺跡縄文時代後期土坑遺物出土状況



10 七瀬遺跡全景

序

財団法人長野県埋蔵文化財センターは、財団発足以来10周年を迎え、2月8日記念式典を行うことができました。

「県内の埋蔵文化財の調査及び研究、保護思想の普及・啓発、その他必要な事業を行い本県文化の向上に寄与すること。」を目的に昭和57年設立され、今日に至っておりますが、この間県民の皆様を始め関係機関の御指導、御支援により、長野県の古代史を大きく書き変えるような成果を上げたものと自負しております。

「いま、信濃の歴史はよみがえる」と題して行われました、10周年記念特別展は、長野自動車道と上信越自動車道関連の各遺跡から出土した代表的な遺物を時代ごとのテーマを設定して展示しました。2月という厳冬期にもかかわらず、またわずか13日間の短期間に4,300人を越える大勢の方々の御来場をいただき、一同感激したところであります。また10年の成果と歩みをまとめ、記念誌として発刊いたしました。

さて、本年度の調査については、本文中に細かくふれておりますが、前年度と同様長野調査事務所と佐久調査事務所の2所体制で進めてまいりました。

長野調査事務所では、長野市内6遺跡、更埴市内4遺跡、中野市内4遺跡を、また佐久調査事務所では小諸市内の4遺跡の発掘調査を実施しました。

整理作業は、北村遺跡、石川条里遺跡等の整理作業、佐久市下茂内遺跡、長野市大室古墳群の報告書刊行を行い、発掘調査の成果を公表することができました。

長い間、その設置が待たれておりました木器等の保存処理施設が完成し、処理が開始されました。発掘調査の現場にも保存処理の技術が応用され、この点でも節目の年となりました。

発掘調査の成果では、前年度に引き続いて実施した松原遺跡は、9層にわたる文化層が検出され、縄文時代前期まで遡ることが確認されました。榎田遺跡は、古墳時代後期を中心とした大集落となり、700基を越える住居跡が検出されました。更埴条里遺跡、屋代遺跡群は、学史上著名で今後の調査が注目されますが、今年度は水田域と集落の境界が確認されました。

このほかには、弥生時代末の墳丘墓が発見された北平1号墳、小規模城郭の全体が調査された塩崎城見山砦、土坑群と集落域の関係がとらえられた栗林遺跡等がありました。

本年度は比較的順調に調査日程を終了することができました。これは日本道路公団を始めとする関係各位、地元の皆様方の御協力の賜であり深く感謝いたします。また発掘調査に従事された多くの皆様と調査研究員に敬意を表します。

刊行にあたり、御協力いただいた関係各位に対し、深く感謝し今後の御指導を御支援をお願いいたします次第です。

平成4年3月25日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 宮崎和順

目次

口絵

序

目次

I 発掘調査及び整理作業の概要

1	長野調査事務所関係	1
(1)	発掘調査の概要	1
(2)	整理作業の概要	3
2	佐久調査事務所関係	5
(1)	発掘調査の概要	5
(2)	整理作業の概要	5
3	発掘調査遺跡	10
	〈長野調査事務所関係〉	
	～長野自動車道関連～	
(1)	篠ノ井遺跡群	10
(2)	石川条里遺跡	11
(3)	塩崎城見山砦	12
(4)	地之目・一丁田遺跡	18
	～上信越自動車道関連～	
(5)	松原遺跡	19
(6)	北平1号墳	26
(7)	榎田遺跡	29
(8)	がまん淵遺跡	33
(9)	沢田鍋土遺跡	35
(10)	更埴条里遺跡	38
(11)	屋代遺跡群	44
	～志賀中野有料道路関連～	
(12)	栗林遺跡	47
(13)	七瀬遺跡	54
	〈佐久調査事務所関係〉	
	～上信越自動車道関連～	
(14)	石神遺跡群	58
(15)	東丸山遺跡	61
(16)	西丸山遺跡	63
(17)	三子塚遺跡群	64

4 試掘調査遺跡

～上信越自動車道関連～

(1)	赤沼遺跡	66
(2)	大星合遺跡	67
(3)	鈴ノ免遺跡	68
(4)	初海道遺跡	68
(5)	西原地遺跡	70
(6)	原遺跡	71
(7)	鞍掛遺跡	72
(8)	下平遺跡群	73
(9)	釜村田遺跡	74
(10)	野行田遺跡	75
(11)	中原遺跡	76
(12)	上の山三遺跡	77
(13)	下樋口遺跡	78
(14)	石坪遺跡	79
(15)	上原古墳群	80
(16)	山崎・山崎北遺跡	81
(17)	清水製鉄址	82
(18)	清水山・池田端古窯跡	83

II 普及・研究活動の概要

1	現地説明会	84
2	展示会	88
3	指導・研究会・学習会	91
4	刊行物	92

III 機構・事業の概要

1	機構	93
2	事業	93
	平成3年度役員及び職員	97

I 発掘調査および整理作業の概要

平成3年度は、前年度に引き続き長野自動車道と上越自動車道関係及び、県道バイパス（志賀中野有料道路）関係の発掘調査と整理作業を、長野調査事務所（同中野支所）と、佐久調査事務所で実施した。

1. 長野調査事務所

(1) 発掘調査の概要

調査区域	長野市，更埴市，中野市
調査遺跡数	14遺跡（長野市石川条里，篠ノ井，塩崎城見山砦，更埴市地之目，一丁田，（以上長野自動車道）長野市松原遺跡，北平1号墳，榎田，中野市がまん淵，沢田鍋土，更埴市更埴条里，屋代遺跡群（以上上信越自動車道），中野市栗林，七瀬遺跡（以上志賀中野有料道路関係）
調査総表面積 （総延面積）	石川条里170㎡（680㎡），篠ノ井630㎡（1260㎡），塩崎城見山砦14,000㎡，地之目200㎡，一丁田1,800㎡，松原6,000㎡（11,400㎡），北平1号墳3,000㎡，榎田11,400㎡（22,800㎡），がまん淵3,000㎡，沢田鍋土20,000㎡，更埴条里46,100㎡（276,600㎡）屋代9,250㎡（37,000㎡），七瀬4,000㎡（6,500㎡），栗林23,850㎡（31,400㎡）
調査期間	平成3年4月4日～12月27日

平成3年度の調査の特色は、従来の高速道路中心の調査から県道バイパス関連の調査や、市町村への長期派遣等多様化したことである。第2は、整理課が発足し、通年的に整理解体制が組めるようになったことで、この一環として木器、金属器等の保存処理が開始されたことである。

本年度の発掘調査は、前年度と同様、善光寺平の沖積地に展開する集落跡、水田跡の調査が中心となったが、弥生時代末期の墳丘墓が検出された長野市北平1号墳の調査、中世の小規模城郭のほぼ全容が調査された長野市塩崎跡見山砦跡、縄文時代後期の貯蔵穴群と、集落跡の関係がとらえられた中野市栗林遺跡等新しい分野の調査例が追加できた。

個々の遺跡では、石川条里遺跡は、昭和63年以来発掘調査を継続してきたが、今年度の170㎡分の調査をもって、70,000㎡の調査対象の全ての調査を終了した。

篠ノ井遺跡群も今年度で対象面積の全てを終了したが、集落跡と水田跡の境界が検出され、平安時代～弥生時代後期にかけての集落構造全体が把握される等大きな成果を上げた。

塩崎城見山砦は、塩崎城に関係する砦的な小規模城郭で、城郭の構造や出土遺物から16世紀後半期と推定された。長野県下では、部分的な調査は行われたことはあったが、小規模ながらも城郭の全体が発掘された例はなかった。土塁の構築状況、その外側の柵列状の施設、段郭の構造、堀の構築状況等県下の小規模城郭の調査上の新しい知見を得た。

地之目・一丁田遺跡は、一連の自然堤防上の遺跡群の西端が明らかにされ、古墳時代後期から平安時代前半期の集落立地がとらえられた。

松原遺跡は、前年度に引き続き、⑦地区と遺跡の東端、⑧-3地区の調査を実施した。平安時代（一部中世）から縄文時代前期に至る9層の包含層の層位的な発掘調査を行い、この遺跡

も、46,000㎡の全ての対象面積の調査を完了した。また東端の大室トンネル側の急斜面部から、6世紀代と思われる横穴式石室を内部主体とする、直径13mの円墳が検出され、一般的に見られる県下の古墳立地からすると特異な例であり、墳丘の構築技法面からも注目される。

平成2年度では、縄文時代前期末が最も古い時期の集落跡と把握されたが、⑧-3a地区では縄文時代前期初頭まで遡ることが確認された。現地表面からは、推測されない自然堤防の形成過程が、縄文時代を通して認められた。

北平1号墳は、眼下に松原遺跡を始めとする自然堤防上の集落跡や後背湿地をのぞむ、山頂部に位置する。岩盤を削り出し、若干の盛土を行った墳丘墓で、直列する2基の棺を内部主体とし、御屋敷式土器と東海系土器、ガラス小玉を副葬品とする墳丘墓で善光寺平の弥生時代末期から古墳の発生を考える上で貴重な資料を提供した。

榎田遺跡は、古墳時代後期を中心とした集落跡で、弥生時代中期～平安時代にかけての住居跡は700基をこえ、平成4年度調査分を含めると1,200基と予想される。千曲川の自然堤防上には、従来から調査が進み、著名な大集落が連続しているが、榎田遺跡はおそらくこれらをしのぐ屈指の大集落と思われる。川田条里遺跡等の生産遺跡、大星山古墳群を始めとする古墳群との関係等、検討が急がれる。

中野市沢田鍋土遺跡は、古墳時代前期の粘土採掘坑が発掘され、良好な粘土採掘地であることが証明された。また、奈良時代の須恵器の窯跡が3基調査された。

がまん淵遺跡は、急斜面に弥生時代後期の住居跡が検出され、集落立地を考える上で、今までの常識を越える新しい知見を得た。

更埴市更埴条里遺跡は、近世から古墳時代にかけての水田跡で、水田跡の下層からは、縄文時代の後晩期の土坑が検出されている。平安時代後期の条里制水田の評価は今後の検討をまたなければならないが、水田の形成も各時代により変化し、低地から高地へと移動したものと推定される。

石川条里・川田条里遺跡の調査結果や、地理学等関連諸科学の分析結果と合わせ多くの課題については、次年度の調査をまちたい。

屋代遺跡群も近世から弥生時代までの集落跡と把握されるが、平安時代の一時期水田跡に変化し、また、集落跡に戻るなど更埴条里遺跡の変遷と合わせて検討が必要である。今年度の調査で、水田域と集落域の境界が明確となったのは大きな成果のひとつである。

中野市栗林遺跡は、弥生時代中期の標式遺跡として著名であるが、今年度の調査では、縄文時代後期の貯蔵穴と敷石住居跡を中心とする集落跡との組み合わせから、集落景観が復元される資料が得られた。

七瀬遺跡は、狭いテラスに形成された弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡で、越後や北陸系土器の流入や、祭祀遺物の出土など注目された。

今年度は、天候にも恵まれて比較的順調に調査計画を消化した。松原遺跡を始めとして沖積地内での調査は、技術的にも困難な部分が多く、今後調査法の検討が必要である。また保存科学の導入は、発掘調査の方法にも大きな変化をもたらした一年でもあった。

(2) 整理作業の概要

内容は、発掘調査終了後の延長として記録類の整備及び応急処置の必要な遺物（木製品）の保存処理などを行う整理作業と、報告書刊行を目的とした整理作業に分けることができる。後者については、整理課が発足し今年度から本格的に整理作業を始めており、その概要を述べる。

ア 整理の対象とした遺跡

明科町北村遺跡	麻績村古司遺跡	長野市鶴萩七尋岩陰遺跡	長野市石川条里遺跡
坂北村向六工遺跡	〃 子尾入遺跡	〃 赤沢城跡	〃 篠ノ井遺跡
〃 十二遺跡	更埴市鳥林遺跡	〃 塩崎城見山砦跡	〃 松原遺跡
麻績村野口遺跡	〃 小坂西遺跡	〃 鶴前遺跡	〃 川田条里遺跡

イ 整理作業の内容

大きく、報告書を前提にした整理作業(ア)と、その前段階の基礎的整理作業(イ)に分けることができる。また、保存処理についても施設等が充実し、本格的に開始された。

(ア) 報告書を前提とした整理作業

対象遺跡を次のように地域ごとに分けて、平成4年度報告書刊行を予定し整理作業を行った。

a 北村遺跡の整理

整理作業も3年目を迎え、遺物の実測の大半が終わり、具体的な報告書の掲載内容についての検討にはいつている。外部に依頼している縄文人骨の分析・鑑定もすすみ、さまざまな情報が得られており、遺物等の分析成果と突き合わせるべく、明治大学戸沢充則教授、東京大学赤沢威助教授、独協医大茂原信生講師を迎え検討会を実施した。

b 筑北地区（坂北村向六工・十二遺跡、麻績村野口・古司・子尾入遺跡）の整理

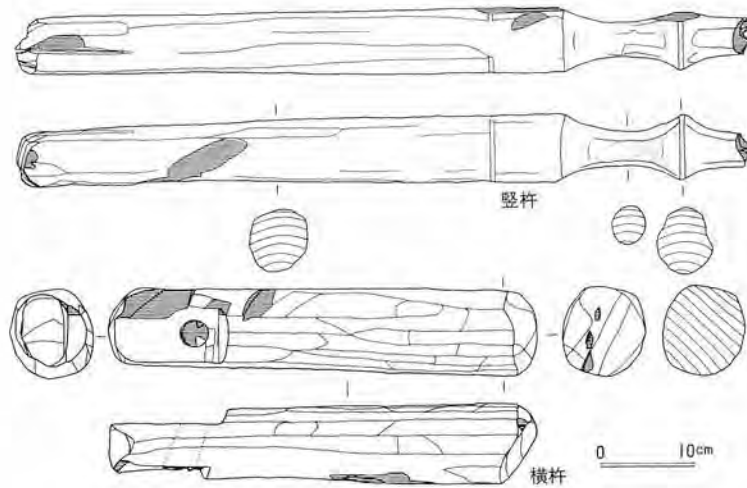
対象としている遺跡は比較的小規模で遺構や遺物も少ないが、多時期にわたっているのが特徴である。遺物の実測、遺構図の整理もすすみ、報告書の具体的な内容の検討に入っている。

c 更埴市（鳥林・小坂西遺跡）、長野市西南部（鶴萩七尋岩陰・赤沢城・塩崎城見山砦遺跡）の整理

聖山西南麓の小規模な遺跡を対象としている。遺物の実測、遺構図の整理等もすすみ、報告書の内容の検討に入っている。遺跡の中に2ヶ所の城跡があり、センターとしては調査並びに



第1図 向六工遺跡出土の絡条体圧痕文土器 (1:5)



第2図 石川条里遺跡出土木製品 (1:8)

整理ともにはじめてであり、奈良女子大学村田修三教授を迎え指導を受けた。

d 鶴前遺跡の整理

石川条里・篠ノ井遺跡群を望む篠山山系の東向き斜面に位置しており、弥生後期から古墳前期、奈良・平安期の集落遺跡である。遺物の実測・遺構図の整理もすすみ、報告書の内容の具体的な検討に入っている。弥生後期から古墳前期の北陸系の土器の資料の多さは注目される。

(i) 基礎的整理作業

比較的規模の大きな遺跡が多く、次のように分けて整理作業を行った。

a 石川条里遺跡集落域の整理

多量の土器は脆弱なため洗浄後バインダー処理と、注記作業を実施。並行し土坑の遺構図の整理を行う。古墳時代前期の遺物整理の過程で、多数の土製ミニチュア品がみつきり注目される。

b 篠ノ井遺跡の整理

遺構図の整理とともに、土器の洗浄・注記を行う。

c 石川条里遺跡水田域、川田条里遺跡の整理

両遺跡とも多量の木製品が出土しており、農具や建築部材の実測作業を進める。並行して樹種鑑定を外部に委託して実施する。

d 松原遺跡の整理

本年は、調査も実施しており、遺物の洗浄を実施する。テン箱にして5,600箱あり、全体のほぼ40%が終了。

(ウ) 保存処理

作業の内容は、昨年度まで調査を行った遺跡より出土した木製品や金属製品等の保存処理と、各調査現場で脆弱遺物の実際の取り上げ等の二つに分かれる。とくに本年より、PEG処理槽が導入され木製品の処理を本格的に開始した。



第3図 PEG処理槽

2 佐久調査事務所関係

(1) 発掘調査の概要

調査区域：小諸市平原地区・八満地区・大里菱平地区

調査遺跡数：4遺跡（三子塚・石神・東丸山・西丸山遺跡）

調査総表面積：19,700㎡。（三子塚8,900㎡，石神2,800㎡，東丸山4,100㎡，西丸山3,900㎡）

調査期間：平成3年4月15日～同年11月16日

試掘調査遺跡数：2遺跡（赤沼・三子塚遺跡）

対象面積：15,800㎡（赤沼11,000㎡，三子塚4,800㎡）

調査期間：平成3年12月12日～同年12月20日

今年度より佐久インターチェンジから小諸インターチェンジ間の発掘調査を本格的に開始した。調査は当初三子塚・石神・東丸山・西丸山遺跡のほか、赤沼遺跡を含め5遺跡が予定されていたが、用地買収の遅れから赤沼遺跡は調査対象からはずした。また、年度途中に翌年度以降の予備調査として試掘調査を実施することとなり、赤沼・三子塚遺跡の2遺跡を実施した。

遺跡は浅間山から高峰山の南麓部にあたる標高780m～830mに所在する遺跡が中心であった。石神遺跡は以前より縄文時代の大規模遺跡として知られ、調査の難航が予想されたが、遺跡の南端部であったことから、遺構数はさほど多くはなかったものの、縄文時代前期の墓塚的性格をもつ土坑群のほか、新たに古墳時代初頭の竪穴住居跡が発見された。当地方では標高800m付近には該期の遺構は皆無とされていただけに貴重な新資料を提供することとなった。

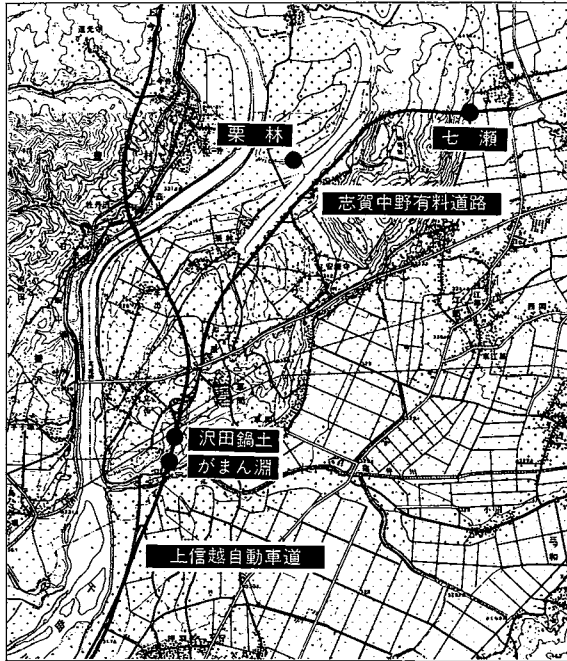
東丸山・西丸山遺跡は尾根を挟みその両側に所在する遺跡で、前段のトレンチ調査段階で相手ともに遺跡範囲が拡大した。東丸山遺跡では縄文時代中期の集落域と墓域を検出した。

三子塚遺跡群では高原野菜の畑作地帯にあたることもあって、調査範囲の周囲に防砂ネットを張り廻らして実施し、平安時代の小規模集落が検出された。

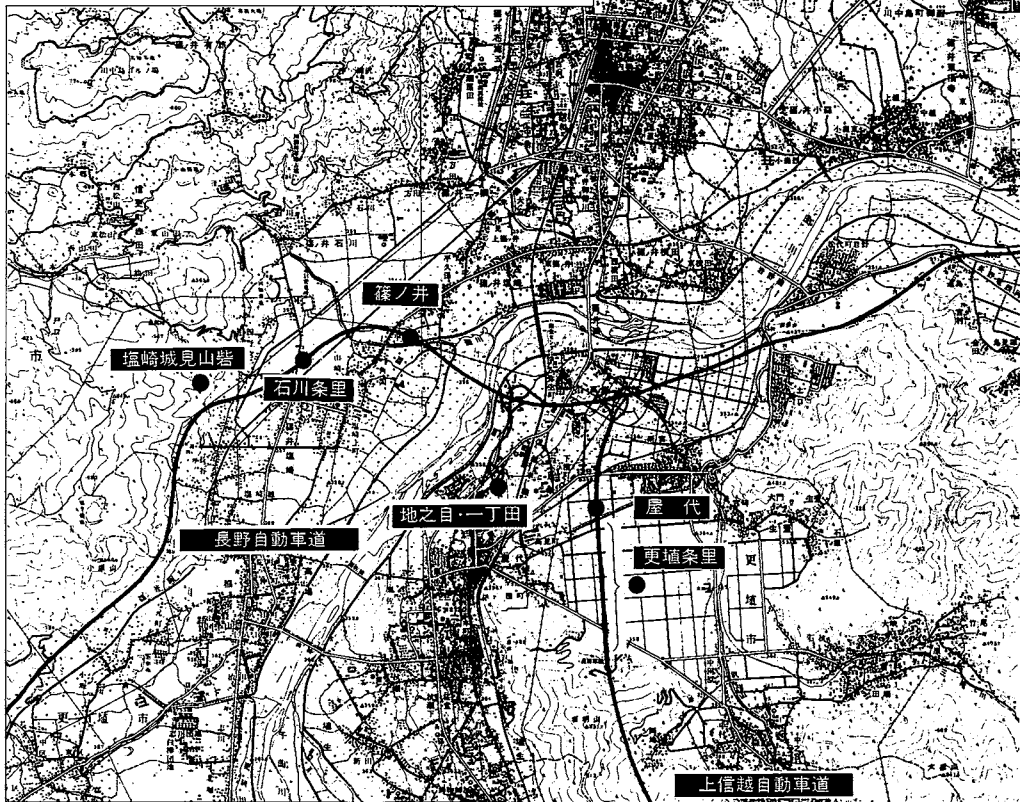
試掘調査は12月前半に赤沼・三子塚の2遺跡を実施した。双方ともに踏査では遺物の採集が少なく、遺跡として疑問視されていた範囲がその対象となった。試掘の結果、赤沼遺跡は若干の遺物が採集されたものの、遺構は検出されなかったことから試掘調査区域については今後の調査対象からはずすこととなった。三子塚遺跡群は調査対象範囲内では、遺構密度の高い部分であることが判明した。

(2) 整理作業の概要

下茂内遺跡は平成元年4月から3年間の整理作業を行い、関係諸機関の御理解と御協力を得て『佐久市内その1 下茂内遺跡』として報告書を刊行するに至った。内容は槍先形尖頭器製作跡についてが中心で、分析の中核を担った石器および剥片の接合作業については、過密スケジュールの中、時間的な制約もあり未だ不十分な点を残した。今後同様な作業を必要とする遺跡の場合は土器とは異なり、慎重に作業量の算出をする必要がある。しかし、発掘調査時から目標としてきた製作工程の復元・製作跡としての分布の在り方について、現時点での成果をまとめることができた。今後の石器製作の一資料として広く活用していただければ幸いである。



地図1 発掘調査遺跡分布図（中野市）



地図2 発掘調査遺跡分布図（更埴市・長野市）



中野市

- がまん淵遺跡
- 沢田鍋土遺跡
- 栗林遺跡
- 七瀬遺跡

更埴市

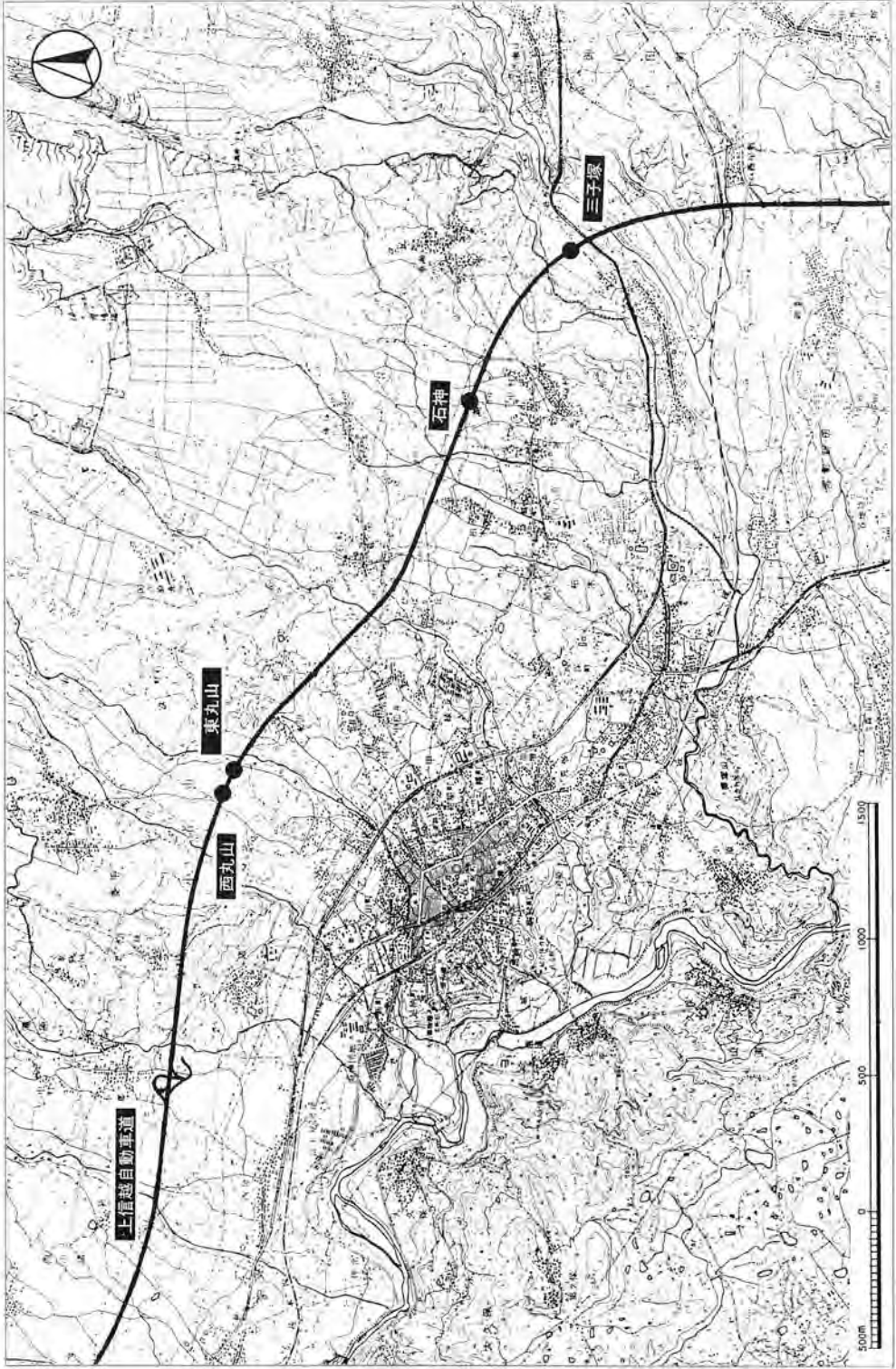
- 地之目・一丁田遺跡
- 更埴条里遺跡
- 屋代遺跡群

長野市

- 篠ノ井遺跡群
- 石川条里遺跡
- 塩崎城見山砦
- 松原遺跡
- 北平1号遺跡
- 榎田遺跡

小諸市

- 石神遺跡群
- 東丸山遺跡
- 西丸山遺跡
- 三子塚遺跡群



地図3 発掘調査遺跡分布図(小諸市)

第1表 平成3年度長野自動車道および上信越自動車道等関連発掘調査事業一覽

(1) 発掘調査

所在地	遺跡名	発掘調査面積		調査期間	調査日数	作業人数	発掘調査の状況	備考
		調査対象面積	調査実施面積					
長野市	石川条里	70,000	170	4. 8~5. 10	36	203	近世、平安、古墳、弥生時代各水田跡	長野調査事務所
"	篠ノ井	18,600	630	4. 8~6. 27	26	603	平安時代後期～弥生時代後期集落跡 竪穴住居跡17、溝跡14、墓跡5、土坑54、水田跡1、方 形周溝跡1	"
"	埴崎城見山岩	14,000	1~(2)	6. 12~10. 19	108	3,081	〔小規模城郭〕主郭、副郭、付属郭、段郭、堀(16世紀 後半と推定)先土器～縄文時代創製期石器出土地点	"
更埴市	地之目 丁田	2,000	2,000	4. 8~5. 31	38	242	弥生時代前期中葉土坑11、焼土跡34、縄文時代前期末～ 中期初頭住居跡15、土坑150、縄文時代中期後半土坑22 0、弥生時代中期後半住居跡1、奈良・平安時代住居跡 6、土坑62、溝19	"
長野市	松原	46,000	6,000	4. 8~10. 11	128	8,803	縄文時代前期中葉土坑11、焼土跡34、縄文時代前期末～ 中期初頭住居跡15、土坑150、縄文時代中期後半土坑22 0、弥生時代中期後半住居跡1、奈良・平安時代住居跡 6、土坑62、溝19	"
"	北平1号墳	3,000	3,000	4. 8~7. 31	80	734	弥生時代の墳丘墓、内部主体(櫛木棺墓) 2	"
"	櫻田	41,800	11,400	4. 4~12. 26	138	13,634	弥生時代中期、後期住居跡36、古墳時代住居跡341、溝61、 土坑(時代未整理2490)	"
中野市	がまん淵	3,000	3,000	4. 8~11. 30	184	3,531	弥生時代住居跡5、溝跡、ピット列	中野支所
"	沢田鍋土	20,000	20,000	4. 8~11. 30	184	3,531	先土器時代石器製作跡	"
更埴市	屋代	46,000	9,250	4. 8~12. 26	162	9,679	弥生時代水田跡、畑跡、溝跡、河川跡、住居跡、竪立柱 柵列、井戸跡、礎石建物跡	長野調査事務所
"	更埴条里	70,000	46,100	4. 8~12. 26	184	19,735	近世～古墳時代水田跡、平安時代後期～中世の住居跡28、 土坑、溝等多数	"
小諸市	石神	2,500	2,500	4. 15~5. 24	27	542	縄文時代中期土坑70	佐久調査事務所
"	東丸山	2,100	3,900	5. 25~8. 12	34	479	古墳時代前期住居跡3	"
"	西丸山	2,800	3,900	5. 25~8. 1	22	424	縄文時代中期中葉住居跡3、土坑45、溝1(時期不明)	"
"	三子塚	30,000	8,900	9. 17~11. 16	40	147	平安時代末住居跡3、畑跡1、土坑3	"
中野市	七瀬	4,000	4,000	8. 1~12. 27	110	2,237	弥生時代中期住居跡2、後期住居跡23、弥生時代土坑1 5、平安時代土坑2	中野支所
"	栗林	50,000	23,850	4. 8~12. 28	202	5,612	縄文時代後期住居跡4、土坑47、墓石22 弥生時代中期、後期住居跡4、円形周溝1、土坑3 古墳時代前期住居跡3	"
合計		425,800	162,600					

(2) 整理作業

所在地	遺跡名	調査面積		作業内容	状況	備考
		調査面積	原簿執筆、図版作成			
佐久市	下茂内	28,200		報告書刊行	報告書12	
長野市	大室古墳群	600		報告書刊行	報告書13 明治大学へ委託	
明科町	北村	21,530		土器の復元、遺構の検討、実測等	平成4年度報告書刊行予定	
坂北村	向六工、子	19,280				
更埴市	尾入、古前、島林 ほか 鶴萩七母岩陰ほか	11,300				
長野市	鶴前	11,300				
"	篠ノ井	18,600				
"	松原	46,000				
"	石川条里	70,000		木器の整理、実測、保存処理		
"	川田条里	104,960				

3 発掘調査遺跡

〈長野調査事務所関係〉

(1) 篠ノ井遺跡群

所在地：長野市篠ノ井塩崎字宗旨坊ほか

調査担当者：西山克己 三上徹也

調査期間：平成3年4月4日～同年6月26日

調査面積：630㎡

遺跡の立地：千曲川の自然堤防上

時代と時期：弥生時代後期，古墳時代前期，平安時代

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居	土坑	墓	溝	水田	不明
弥生後期～古墳前期		1	54	1 (方形周溝墓) (木棺墓)	1		
奈良・平安		16		4	13	1	1

土器・陶器：弥生時代後期土器，土師器，須恵器，
灰釉陶器

その他：皇朝十二銭（承和昌宝）

はじめに

篠ノ井遺跡群における長野自動車道地点の調査は昨年度中にはほぼ終了したが、わずかに残る工事用道路の付け替え部分（③-E区・400㎡）と揚水機場部分（④区・約230㎡）の630㎡の調査であった。しかし、実際は工事工程の都合や安全面での配慮で、③-E区の調査面積がわずかに50㎡となったため、実質280㎡の調査となった。

弥生時代後期から古墳時代前期

この時期の遺構は竪穴住居跡1・溝跡1・方形周溝墓（SM7031）1・木棺墓（SM7028）1が検出された。この中で木棺墓以外は切り合いを示し、古い順に竪穴住居跡～方形周溝墓～溝跡となっていた。溝跡や方形周溝墓については平成元年度に調査されたものの続き部分であった。SM7028については平安時代の住居跡に切られており、遺物もスカイブルーのガラス小玉のみの出土であったが、人骨がわずかに残っていた。このSM7028の時期や性格については、これまでに調査された木棺墓（土壙墓）SM7006やSM7016と同様のものであろうと考えられる。

平安時代

③-E区では50㎡の中に住居跡が13軒、溝跡が2本、それぞれが切り合って検出された。相当な密集度である。この中でSM7404の床面直上からは皇朝十二銭（承和昌宝）が出土している。またこの住居跡を墳砂跡が切っており、この調査結果や昨年度までの噴砂に係る調査結果と地震関連の文献記載から、この噴砂跡を残した地震発生の時期をある程度特定できるかも知れない。

また④区では思いもよらぬ水田跡が検出された。昨年度までの調査結果では当地点は住居や溝を中心とする集落のみの地域であると考えられていたが、自然堤防上のしかも集落内あるいは集落に隣接するように水田が営まれていた状況には驚かされた。

おわりに

今年度の調査をもって当地点の発掘調査は完了し、7月より整理作業に入った。調査された遺構総数は、総調査面積18,600㎡で、竪穴住居跡816・土坑（井戸を含む）2,366・溝跡150・掘立柱建物跡79以上・杭列跡16・畑跡3・水田跡1・墓33・その他18である。

(2) 石川条里遺跡 (12区)

所在地：長野市篠ノ井塩崎3857-1番地

調査担当者：綿田弘実 白居直之

調査期間：平成3年4月4日～同年5月30日

調査面積：170㎡

遺跡の立地：千曲川左岸 自然堤防西側の後背湿地

遺跡の特徴：更級郡旧塩崎村の西南部に広がる水田地帯で、篠山山系鶴前遺跡と自然堤防上の篠ノ井遺跡群の間に位置し、生活域と水田域よりなる。

主な検出遺構

遺構 時期	畦畔	杭列	溝	土器 集中	その他
弥生		2			
古墳		1	2	3	
平安	2				足跡
近世					足跡

主な出土遺物

土器・陶器：弥生後期，土師器，須恵器，中・近世陶器

木製品：鋤，建築材，杭

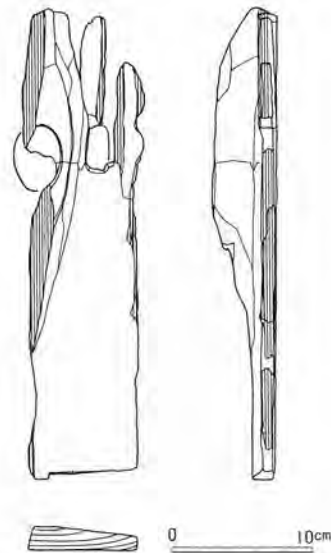
自然遺物：種子，モモの実

本年度の調査は極めて小範囲であったため、下層水田検出に及ぶほど調査面積が狭められ、過去3年間の調査面を確認するにとどまった。近世・平安・古墳・弥生の水田の調査を行い各水田面を検出した。近世水田においては良好な残存状況であったが、足跡状の凹凸が検出されたにすぎず畦畔は確認されなかった。平安水田では、当初予想されていたとおり畦畔が確認され、古墳・弥生水田においても杭列が検出された。古墳時代の杭列には土器集中が3か所に見られ、ほぼ完形の器台と炭化物が付着した甕が出土した。また弥生時代の杭列の中から泥除け穴の残る平鋤（第5図）が出土した。

各時代の遺構の性格については、1988年からの調査成果をもとに現在整理中である。



第4図 古墳水田面 発掘状況



第5図 弥生水田面出土 平鋤

しおぎさじょうみやまとりで
(3) 塩崎城見山砦

所在地：長野市篠ノ井塩崎字金山4, 381番地ほか

調査担当者：河西克造 大久保邦彦

調査期間：平成3年6月12日～同年10月30日

松岡昭彦 松岡忠一郎

調査面積：14,000㎡

宮脇正実 柳澤 亮

遺跡の立地：篠山山系から東行する尾根の先端部

時代と時期：先土器時代（終末期）、弥生時代、古墳時代、中世（戦国期）

遺跡の特徴：16世紀の中世山城（小規模城郭）、先土器時代終末期の石器出土地、弥生時代・古墳時代の土坑

主な検出遺構

遺構 時期	孤立柱 建物跡	土坑	溝	堀	集石	柵列	溝状遺構	土器集中	その他
縄文		7		2					
弥生		2							
古墳		3						4	
中世	2	54	2		2	2	6	1	櫓門1, 櫓1
不明		3							

主な出土遺物

土器：弥生時代後期、古墳時代前期の土器、土師器、須恵器、中世の土器
石器：先土器時代（終末期）の石槍・剥片・削器、石鏃、砥石

金属製品：靱尻金具、銭貨、鉄砲玉、鉄釘、鉄製品

その他：獣骨

遺跡の概要と調査の経過

本遺跡は、善光寺平南部の長野市篠ノ井塩崎地域に所在し、千曲川左岸の篠山山系からのびる尾根先端部に立地する中世城郭（山城）である。

本城郭に関しては、唯一『塩崎村誌』に“見山砦”という名が確認できるのみで、遺跡の存在は知られておらず、長野・上信越自動車道建設に伴い採土場に選定されたことで確認された新発見の遺跡である。文献史料は皆無であるが、隣接する塩崎城（本城）・赤沢城とともに周辺地域で展開した大塔合戦・川中島合戦などとの関連性があると推定される。

調査前の地表面観察では、全体的に尾根筋を中心に施設が確認されたため、調査の主体を郭の遺構検出に置いたが、埋没した施設が存在する可能性を考え中世山城の全面発掘を実施した。その結果、中世山城に関係した遺構とともに尾根上より中世以前の遺構・遺物が確認された。



第6図 塩崎地域周辺の全景（左上 塩崎城見山砦）

中世城郭（山城）

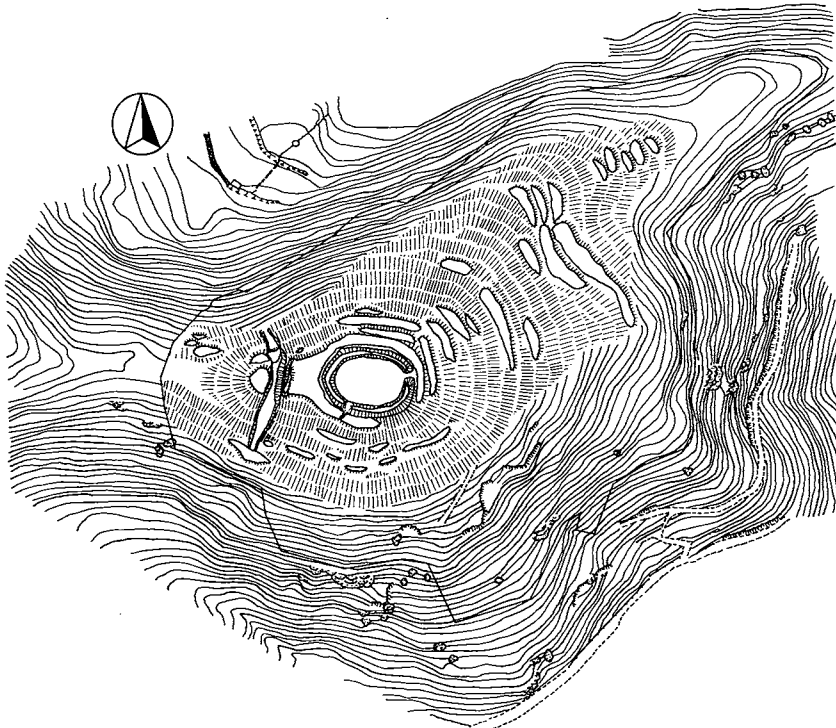
① 立地

尾根頂部にある主郭の標高は471mで、塩崎周辺の集落との比高差は110mを測る程度でさほど要害性がない。集落とは比較的近く、周辺地域から容易に仰視できることから、両者の密接な関係を想定できよう。また主郭からの眺望は良好で、眼下に四野宮の集落が見てとれ、石川・篠ノ井などの千曲川左岸に展開する集落を一望できるのみならず、南は上田市、北は須坂市まで遠望できる。

② 縄張り

尾根頂部には22×16mの規模を有する主郭が存在し、外周には土塁がめぐり（口絵）、東・南側の2ヶ所で土塁が切れていた。主郭背後には、堀切側に土塁を持つ副郭が確認された。この主郭部の周囲には段状の帯郭が数段にわたって配置され、なかでも比較的北側で顕著に認められたことは、本城郭の防御の要点がこの方面にあることを示している。副郭背後には、主郭部と続きの尾根とを遮断する堀切が存在し、尾根筋を切りながら斜面部にのびる形状を呈す。南側斜面部には堀が終息する箇所には郭（堀底郭）が構築され、北側では堀の内部に郭（堀内郭）が見られた。尾根鞍部では、北側斜面で三日月状の比較的小規模な郭が近接して配される以外には、特に城郭施設は確認されない。

城郭前面の東側では、主郭から北東にのびるやせ尾根に三日月状を呈す段状の郭が集中する。虎口が主郭前面に位置する帯郭の北東縁辺部で確認されたことを考えると、本城郭は北東尾根



第7図 塩崎城見山砦・縄張り図（1：2500）

を道（通路）として利用し、この部分を中心に防御的機能を有する郭を配置した状況がうかがえる。東側斜面で特に注視される点は、中腹で主郭部の帯郭とは様相を異にする郭（帯郭）が3段確認されたことである。斜面の裾を取り巻く形で展開する様子から、ある程度の兵力を駐屯する空間で、主郭部とは性格を異にする

施設であったと想定される。また、斜面には豎堀・畝状空堀群などの阻塞的性格を有す施設は確認されなかった点も本城郭の特徴である。

③ 確認された施設・遺構

城郭施設での遺構検出は、表土下の中世面で主体的に実施し、整地層の下層で再度行った。確認された遺構は、基本的に中世山城に帰属する。

遺構が比較的集中した主郭の様相は、幅（基部）約4m、高さ（最高部）約1.5mを測る土塁が全周し、規模は相対的に北側が大きい。土層断面で版築土塁と叩き締め土塁の異なる2者が確認でき、2時期にわたる構築状況が把握できた。土塁が切れている2ヶ所の出入口部では、城郭前面にあたる東側で櫓門と思われる4基のピット（第10図）が、南側では土橋が確認された。主郭内では遺構が中央部に集中する傾向があり、主な遺構は2間×2間の規模を有し、母屋的性格と推定される掘立柱建物跡のほか、1間×1間の櫓的性格の建物跡と付随的な建物跡1棟に加え、投石と推定される集石（第8図）・土坑などが検出された。建物跡周辺で広範囲にわたり散点していた炭は、建物跡との密接な関係を指摘できる。



第8図 塩崎城見山砦の集石（主郭）

また櫓的建物跡に付属するピットではノミ痕と推定される跡（第9図）が確認された。



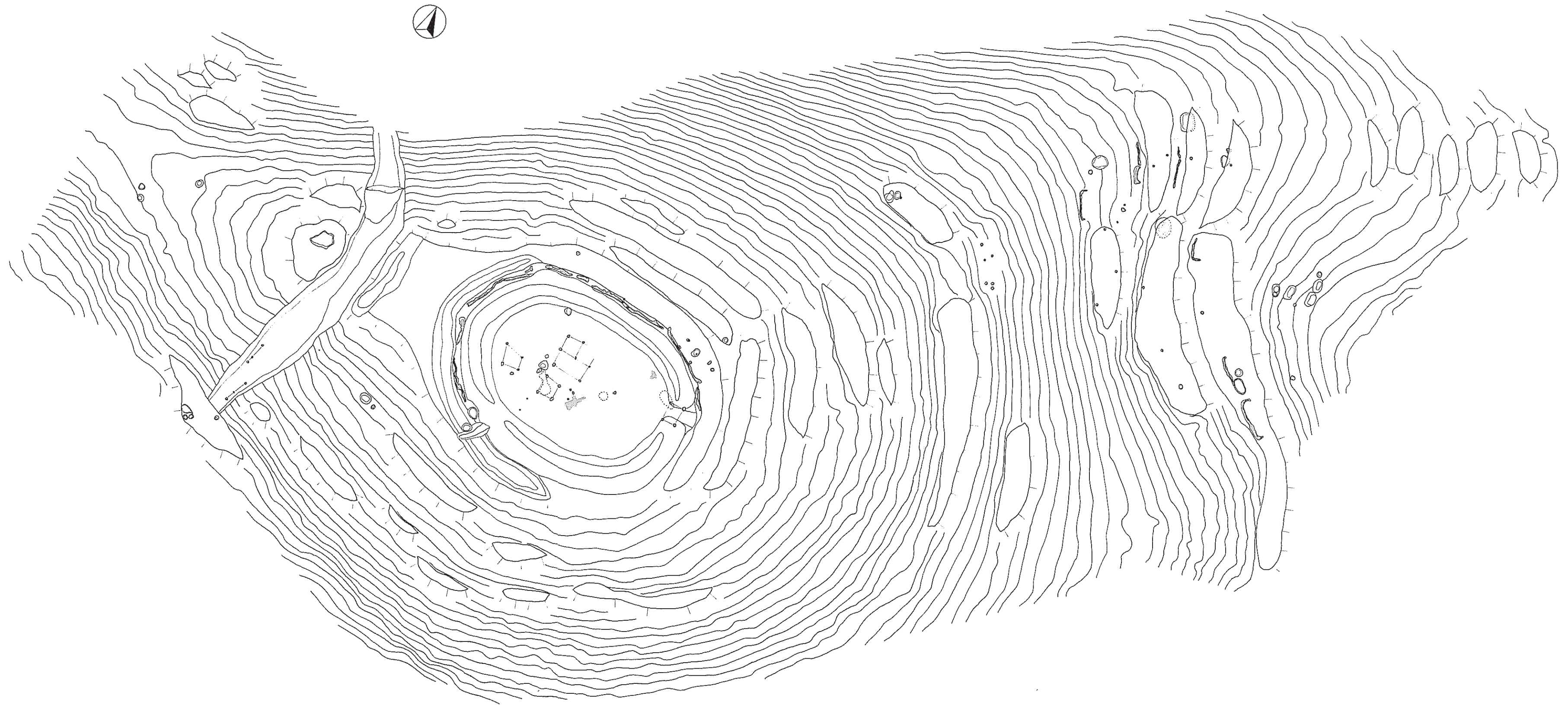
第9図 塩崎城見山砦のノミ痕残存状況（主郭）

主郭中央部で建物跡が集中する傾向は、最も広い空間を確保できる中央部を住空間として設定し、中核をなす施設・遺構がつくられた結果であろうが、この住空間と対照的に、主たる遺構の存在しない空間が存在した。そのほかでは、主郭土塁の外周に沿って溝状の遺構が注視され、炭層の覆土から炭化した角材が出土した。遺構の性格は土塁の崩落防ぎ防衛的機能を持つ施設に関係した遺構と現時点では想定している。



第10図 塩崎城見山砦の櫓門（主郭東側出入口部）

主郭周辺の帯郭では、縁辺部に土塁・柵列等は確認されず、検出遺構では土坑が数基確認された程度である。また主郭以外で遺構が集中した東側の帯郭からは、土坑のほか、コの字状の



第11図 塩崎城見山砦・施設遺構全体図(1:4007≒部分集石)

溝(6基)などが検出されたが、特に居住を示す遺構は見られなかった。

塩崎城見山砦では掘立柱建物跡が主郭に限られるため、郭ごとの機能分化が明確化されず、本城郭の機能は主郭が大部分を担っていたといえる。

中世の遺物では鉄釘が約250本、城郭全域で出土したことが特徴的である。現在遺構との関連性を検討しているが、中世山城で多量の鉄釘を出土した調査例が皆無なため、今後の課題となろう。土器では、15世紀～16世紀初頭のかかわりけと15世紀中頃の播鉢がほぼ一個体土坑から出土した。

中世以前

先土器時代 出土した約200点の石器は、主郭の北側斜面を中心に確認され、主郭周辺の城郭施設を構築した土の中から出土した。石質は頁岩が比較的多く、製品ではポイント・スクレイパーなどがあり、その形態から先土器時代終末期に位置づけられる。原位置をとどめていないが、分布状況から屋根頂部の比較的北側にブロックが存在していたと推定される。

縄文時代 東側斜面の地形が凹地状を呈す中腹付近で、陥し穴と思われる遺構が検出された。形状は楕円形が基本で、炭が底部一面に広がるものがあつたが、逆茂木の跡は確認されなかった。

弥生時代 副郭の南斜面の土坑から弥生時代後期に位置づく甕と壺が出土した。

古墳時代 該期の土器は主郭の中世面(整地層)下層から出土し、山城構築での削平で大部分が失われたが、3基の土坑と土器集中が確認された。詳細は現在検討中であるが、少なくともこの時期に、尾根頂部を利用した形跡が認められる。

まとめと今後の課題(本城郭の性格)

この城郭は、眺望の良さと縄張りがいよゆる「小規模城郭」の様相を呈し、建物跡が普遍的に見られない状況から、遺跡名が示すように、居城的性格の城というより情報伝達を主目的とした非日常的な城郭施設(烽火台)であると推定される。地表面観察で確認できる縄張りは16世紀中頃の様相を示すが、今回の調査では、城郭の最終段階より先行する施設が確認された。出土遺物から城郭の初源を15世紀中頃に比定すると、15・16世紀において少なくとも3段階の変遷が想定でき、砦的性格の城郭が戦国期に軍事的要素を強化する発展過程を把握できたが、城郭の築城主体者については、隣接する城郭はもとより、善光寺平南部に分布する中世城郭と関連づけて解明すべきであろう。

近年、中世城郭の調査例が増加し、考古学的に城郭の実態を把握できつつある。しかし、山城の全面調査は稀であるなかで、見山砦の調査と成果については、砦・烽火の実態を解明する上で重要視されると考えられるため、本報告では城郭施設・遺構について終始した。今回の調査では、先土器時代終末期の石器と弥生・古墳時代の土器が出土したことで、中世以前における尾根先端部の様相(利用)について指摘できるものの、このような地形での調査例が皆無のなかで、遺構・遺物の解釈については今後の課題となろう。



第12図 塩崎城見山砦の調査風景

(4) 地之目遺跡・一丁田遺跡

所在地：更埴市大字更埴字一丁田1559番地ほか

調査担当者：大竹憲昭 伊藤友久

調査期間：平成3年4月4日～同年5月31日

調査面積：地之目遺跡200㎡，一丁田遺跡1,800㎡

遺跡の立地：千曲川旧氾濫原～右岸自然堤防端部

時代と時期：古墳時代後期～奈良・平安時代，中・近世

遺跡の特徴：古墳時代以降の集落の端部，氾濫原との境には溝が複数はしる。

主な検出遺構

時期	遺構 堅穴住居	土坑	溝
古墳 奈良・平安	3		2
中世以降		7	3

主な出土遺物

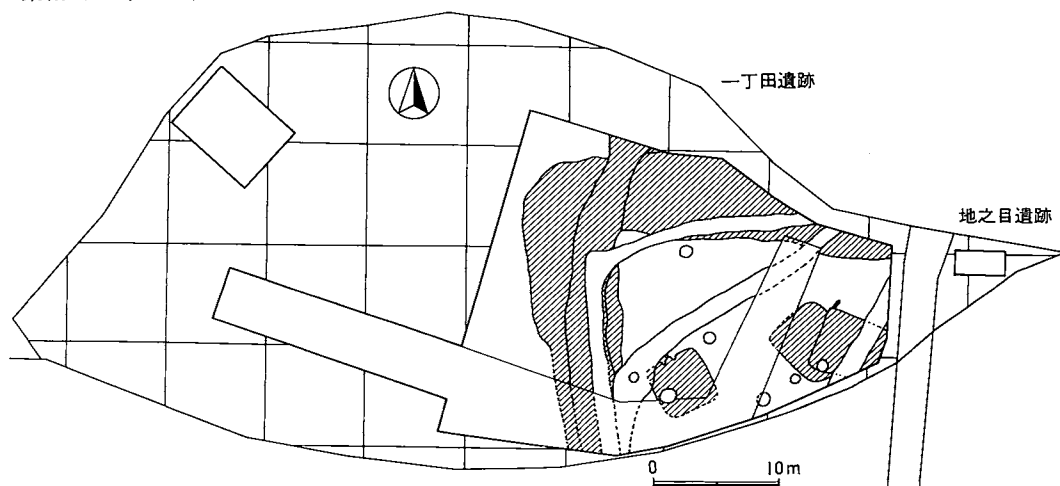
土器・陶磁器：土師器・須恵器・陶磁器
石器・石製品：管玉・硯
金属器：銭貨

地之目遺跡は，奈良～平安時代の集落跡，一丁田遺跡は，古墳時代～平安時代の散在地として周知の遺跡になっている。両遺跡とも屋代遺跡群の西端に属し，お互いに接している。今回の調査範囲は，両遺跡の北端部分にあたる。

地之目遺跡の調査は，調査範囲内の攪乱が多く，調査可能範囲の掘削を行ったが，遺物・遺構は検出されなかった。

一丁田遺跡は，遺構存在は調査区東半部に限られ，西半部は，旧千曲川氾濫原にあたりと考えられ，砂礫層が厚く堆積しているためトレンチ調査で終了した。

検出された遺構は上記の通りである。微高地と氾濫原との境には溝が各時期にわたってみられ，古墳時代～古代においては住居跡が，中世以降には井戸状の土坑が検出された。おそらく集落跡の中心は，南東部に広がると思われる。



第13図 地之目遺跡・一丁田遺跡全体図

(5) まつばら 松原遺跡

所在地：長野市松代東寺尾字北堀3626-1番地ほか 調査担当者：原 明芳 伊藤克己 出河裕典

調査期間：平成3年4月4日～同年10月11日

上田典男 岡沢康夫 大和龍一

小林清人 田中貴美子

調査面積：6,000㎡

田中正治郎 夏目大助

遺跡の立地：千曲川の自然堤防上

西 香子 百瀬忠幸

時代と時期：縄文時代前期前葉～後期初頭、弥生時代中期後半～後期、古墳時代後期、古代、中世

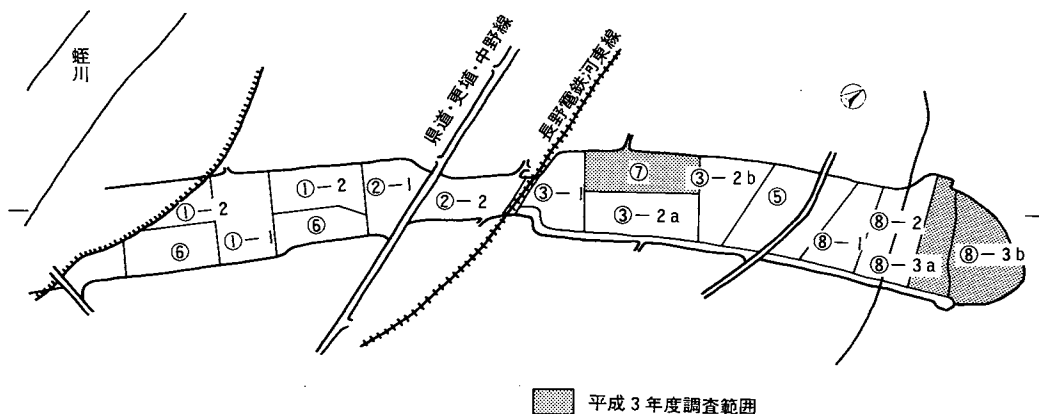
遺跡の特徴：縄文時代前期～中世まで一貫した集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡	土坑	墓	溝	遺物集中	焼土跡	その他
縄文 前期 前葉							2	
縄文 前期 中葉			11			4	34	
縄文前期末～中期初頭		15	150		1	16	67	
縄文中期後半～後期初頭			220					
弥生 中期 後半		1	32		5			
弥生 後期			1					
古墳時代								円墳1
古代		6	62		19			
中世			9	24				火葬施設5

主な出土遺物

縄文 前期 前葉	石器（石錐、石匙）
縄文 前期 中葉	土器（有尾式） 石器（石鏃、石匙、磨製石斧、磨石、剥片、碎片） 滑石製裝飾品
縄文前期末～中期初頭	土器（諸磯b・c式、十三菩提式、五領ケ台式） 石器（石鏃、石錐、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、剥片、碎片） 滑石製裝飾品 自然遺物（クルミ、獣骨）
縄文中期後半～後期初頭	土器（加曾利E式） 石器（碎片）
弥生 中期 後半	土器（栗林式） 骨角器（鏃） 木製品（鏃、部材、杭） 自然遺物（トチ、ドングリ、クルミ、栗、人骨）
弥生 後期	土器（箱清水式）
古墳時代	土器（6～7世紀、土師器、須恵器） 木製品（膝柄鏃、竪杵） 玉類（勾玉、管玉、ガラス小玉） 金属製品（馬具、直刀、鉄鏃、金環、銀環） 自然遺物（人骨、獣骨）
古代	土器（8～10世紀、土師器、須恵器、灰釉陶器） 木製品（曲物、人形、 <small>ひとがた えぼり</small> 杵、部材、杭） 自然遺物（トチ、ドングリ、クルミ、獣骨）
中世	石製品（五輪塔） 金属製品（銭貨、釘） 自然遺物（人骨）



第14図 松原遺跡の調査範囲図

遺跡は、善光寺平の南東部、北側を金井山、南側を通称愛宕山によって限られた、千曲川右岸の三角形の自然堤防上に位置する。西側を蛭川によって削られているこの一帯は、標高350mほどの、平坦な地形である。

今年度の調査は、⑦区1面（縄文前期末～中期初頭）、⑧-3a区5面（中世・古代・弥生中期後半・縄文前期末～中期初頭・縄文前期中葉）、⑧-3b区1面（中世）の計7面の予定で開始した。ところが、調査の進展にともない、5月には⑧-3b区で古墳の石室が、6月には⑧-3a区で縄文時代前期前葉及び中期後半の遺物包含層が、それぞれ検出された。なお、6月より、松原遺跡出土の遺物洗浄・土壌サンプルのウォーターセパレーションを、発掘調査に併行して実施した。

上信越自動車道建設にともない、3年間にわたって実施してきた松原遺跡の発掘調査も、平成3年10月11日をもって、そのすべてを終了した。調査終了後、本格的な整理作業が進められていない状況の中で、詳細について述べることはできないが、今年度調査分の成果を時代をおいて、その内容を概観していきたい。

縄文時代前期前葉

⑧-3a区、北寄りに遺物包含層が分布する。遺構は、焼土跡が2箇所確認されたのみである。遺物としては、少量の土器と石器が出土している。

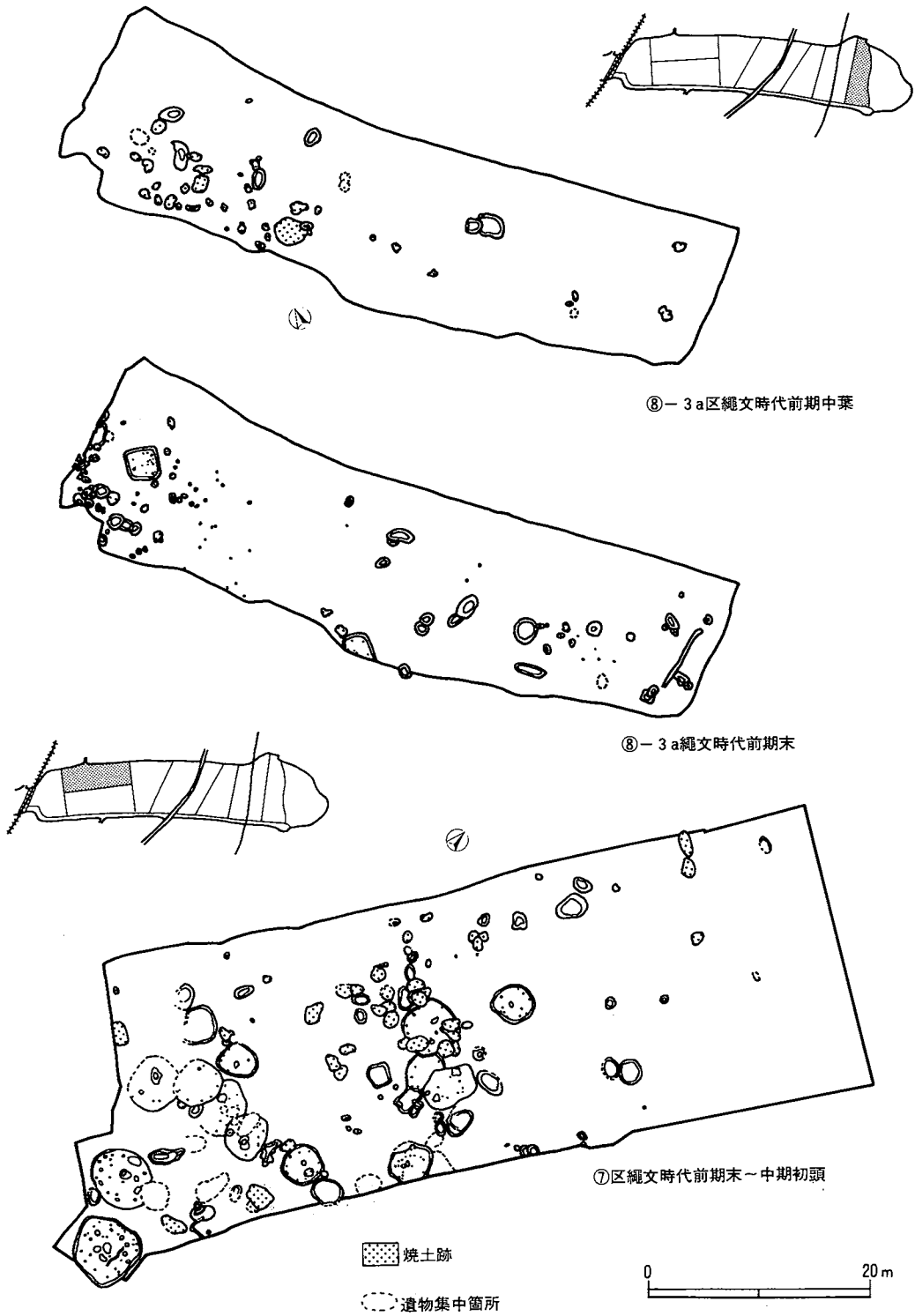
縄文時代前期中葉

遺物包含層は、⑧-3a区全面に広がる。遺構も調査区全体で確認されたが、やや北西側にかたよる傾向が窺える。遺構は、土坑と、多数の焼土跡によって構成されている。

遺物としては、土器・石器などが多数出土している。土器は、有尾式期のものが多量に出土しており、該期の資料に乏しい善光寺平において、これからの研究を進めていく上で重要な資料となろう。石器の特徴としては、石匙や磨石が多く出土している。また、滑石製装飾品も出土している。

縄文時代前期末～中期初頭

前年度の調査に引き続き、⑦区の小規模な自然堤防上に展開する遺構の調査と、新たに金井

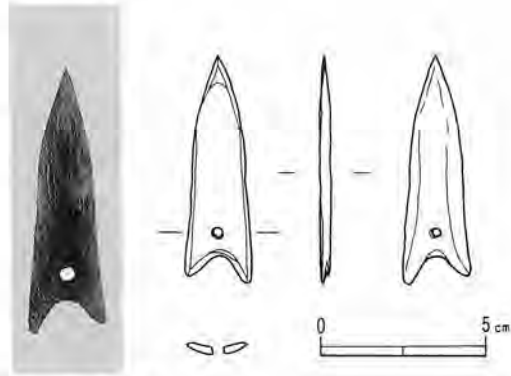


第15図 縄文時代の全体図 (1:600)

山直下の⑧-3 a 区の調査を行った。

⑦区の遺構としては、昨年同様、竪穴住居跡、土坑、多数の焼土跡や遺物集中が確認された。中でも遺物集中には、黒曜石製の石核や剥片・碎片が集中するものもあり、石器製作跡の可能性も考えられる。

⑧-3 a 区では、竪穴住居跡は、2軒と少ないものの、多数の土坑と焼土跡が確認されている。



第16図 木製の鋏

遺物は、土器・石器が多量に出土している。中でも注目されるのは、さまざまな形をした滑石製の垂飾がある。

縄文時代中期後半～後期初頭

前年度の調査工程上残すこととなった、⑦区の一部と、⑧-3 a 区で調査を行った。

まず、⑦区の遺構としては、昨年度検出された柱穴列に関わると考えられる土坑が、多数確認された。遺物としては、土器・石器とも、少量が出土している。

⑧-3 a 区では、調査区北西側の一部で遺物包含層が確認されたが、遺構は、土坑が1基検出されたのみである。遺物は、土器（加曽利E式）と石器が少量出土している。

弥生時代

⑧-3 a 区は、河川跡が山まで迫り、調査区の半分近くを占めており、その他の遺構は、あまり確認されなかった。内容は、竪穴住居跡、土坑、溝によって構成され、そのほとんどが、中期後半に属する。調査区北端の土坑1基のみが、底面から箱清水式の壺を出土しており、後期に属すると思われる。

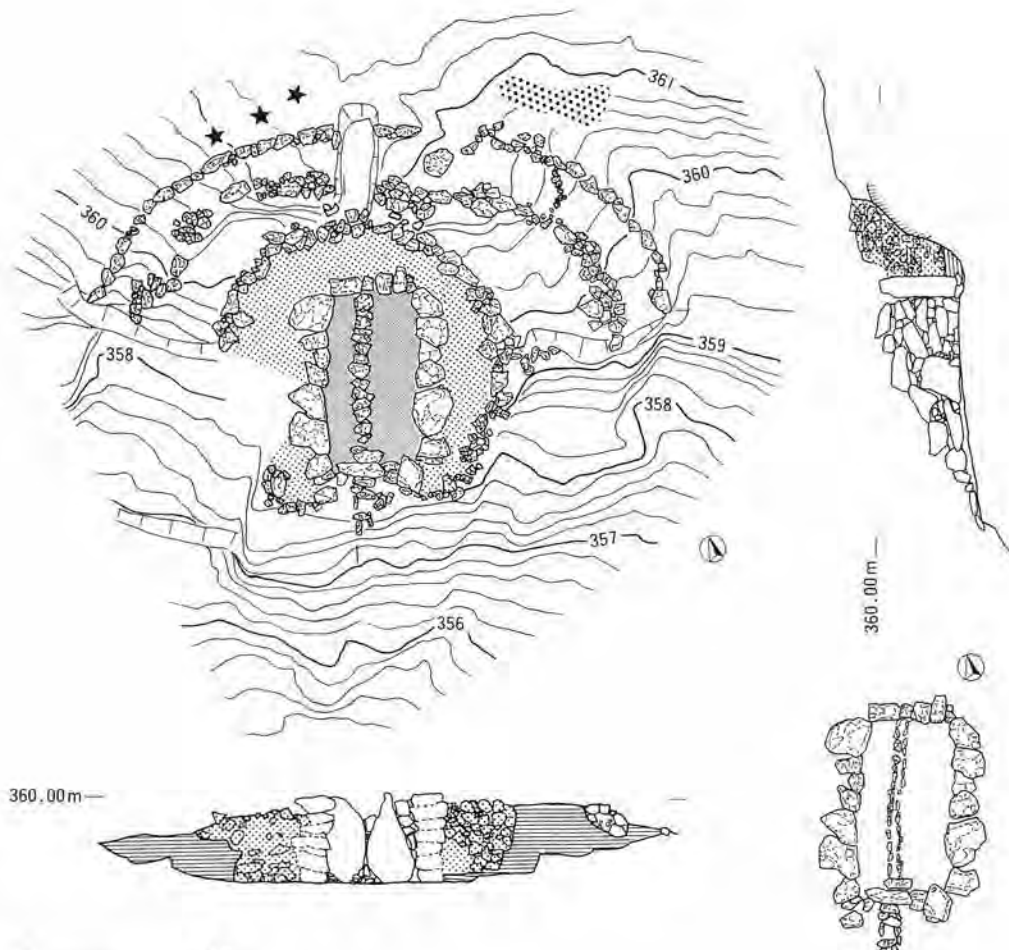
遺物は、土器・木製品が多量に出土している。そして、そのほとんどが河川跡からのものである。土器は、栗林式のものが多く出土している。木製品としては、部材や杭などが多数出土している。河川跡出土の遺物の中で特筆すべきは、木製の鋏である。縦6.8cm、横2cm、厚さ0.3cmで、基部に直径0.3cm程の穴が穿たれている。また、骨製の鋏や、自然遺物として若い女性の頭蓋骨の一部、栗林式の壺形土器に入っていた粟なども、注目に値しよう。

松原1号古墳

古墳時代後期に造築された径13m前後の円墳である。横穴式石室の羨道部をほとんど流失し、封土のかなりの部分と天井石をすでに失っている。石室の現存の大きさは、高さ1.8m、幅2.0m、奥行3.9mで、やや胴張りである。床は、人頭大の角礫の上に、拳大の角礫を敷いている。その下部は、粘質土をたたいて水平にし、石室中央に、入口へ向かって板状の石で側面と天井を囲んだ幅25cm程の排水溝が設けられている。

石室内は、中世の包含層が1m以上も堆積していたが、床面からは、金環・銀環・勾玉・管玉・ガラス小玉・直刀・馬具（轡）・鉄鋏など多くの副葬品と、7体分の人骨が発見された。

墳丘は、斜面を幅約7m、奥行約4mにわたって半円形に削り取り、取った土を斜面側に



360,00 m

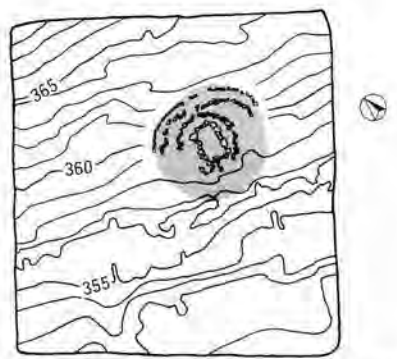
360,00 m



- 礎床
- ▨ 裏込め
- ▩ 大甕出土範囲
- ▧ 版築
- ★ 高杯

第17図A 松原1号古墳の石室平面図

■ 古墳の範囲



第17図B ⑧-3b区の全体図 (1:800)

盛って平坦な面を作り、そこに根石となる切り石を並べて、周囲に裏込めの土砂と版築を施しながら、順次側壁を積み上げていったものと思われる。また、列石が二重に巡ることから、墳丘が2段に造られていた可能性も考えられる。

その他に、墳丘裾部から須恵器の大甕が、また墳丘盛土内と思われる位置から土師器の高杯が出土している。また、調査区外ではあるが、松原1号古墳よりさらに上の斜面部にも古墳が1基あることが確認されている。今後、前述の古墳や大室古墳群金井山支群との関連、そして、松原遺跡の集落域との関連が注目される。

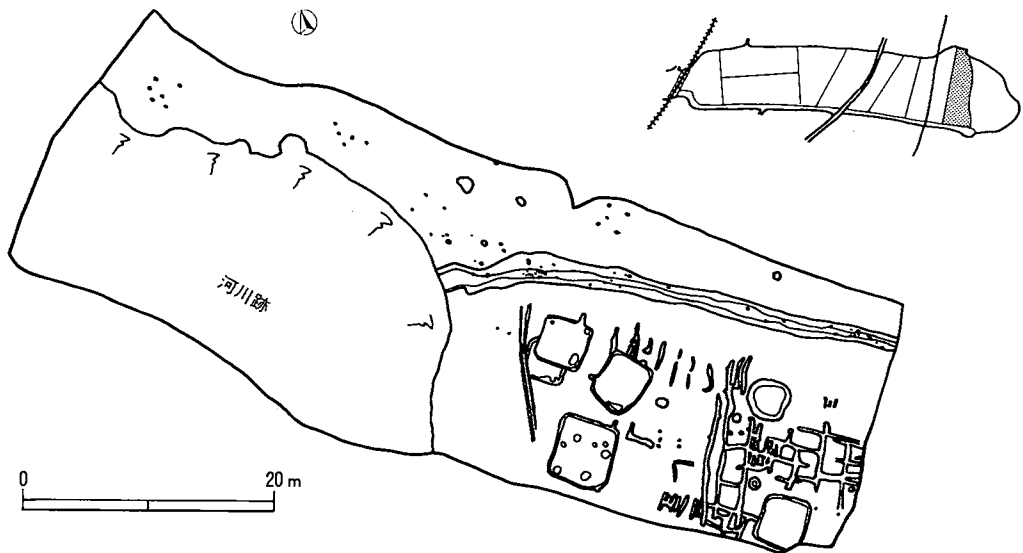
古 代

河川跡の埋没は進むものの、地形はほぼ前時代を継承する。遺構は、調査区を東西に横切り、河川跡に注ぐ幅2m程の溝を境に、南側に展開し、金井山寄りにはほとんど検出されなかった。検出された遺構には、竪穴住居跡、土坑、溝などがある。

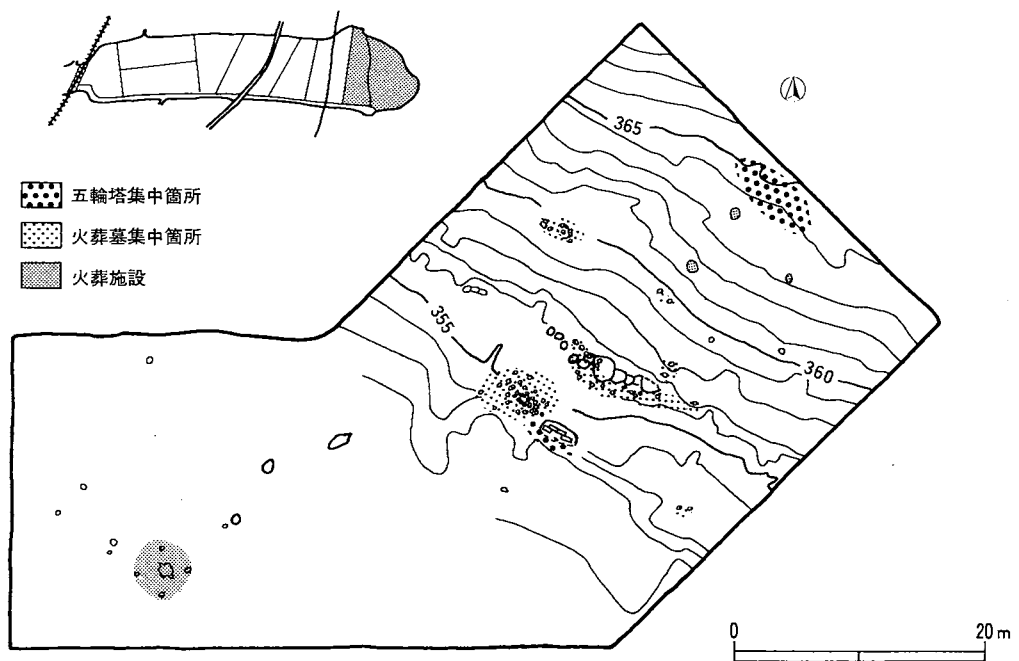
遺物としては、8～10世紀の土器が多数出土している。また、河川跡からは、トチ・ドングリなどの自然遺物、部材・杭などの木製品が多量に出土している。中でも、人形ひとがたや曲物まがり、杵えぶりの出土が注目される。

中 世

前年度に引き続き、⑧-3 b区の斜面部と、新たに金井山直下の⑧-3 a区の調査を行った。遺構としては、⑧-3 a区では、土坑と火葬施設が、⑧-3 b区では、火葬骨の集中と火葬施設が確認された。なかでも注目されるのは、火葬施設である。⑧-3 b区の火葬施設は、いずれも長軸80cm程の楕円形の土坑で、壁から床面にかけて赤く焼け、そのうちいくつかの土坑は、中程に溝状の窪みを持つ。また、⑧-3 a区の火葬施設は、一辺1m程の方形の土坑で、壁から底面にかけて赤く焼け、中程には窪みをもっており、両辺にカマドの煙道部に似た張り出しを持つ。そして、この施設の周囲には、4本の柱穴が配されている。このように、近接す



第18図 古代全体図 (1:600)



第19図 中世の全体図 (1 : 600)

る2つの地区で、形態の異なる施設が検出されたことが、こういった意味を持つのか、今後の研究が期待される。

遺物としては、多量の五輪塔や、銭貨・釘が出土している。そのうち五輪塔は、前述した火葬施設や墓地との関連も注目される。

おわりに

3年間にわたる発掘調査で、本遺跡が、縄文時代前期から中世に至るまで、何千年という長い間、人々が繰り返し生活していたということが確認された。さらに、今年度は、金井山へと続く急斜面から古墳が、また、松原遺跡を西方より望む尾根上にある北平1号墳が、それぞれ調査されたことにより、居住域だけでなく、墓域を含めた社会関係を復原する上で、多くの好資料が得られた。今後、本格的な整理作業が進むに従って、さらにその関係が解明されていくことが期待される。

きただいら
(6) 北平1号墳

所在地：長野市松代町東寺尾字北平

調査担当者：青木一男 下島浩伸

調査期間：平成3年4月8日～同年7月28日

中沢道彦

調査面積：3,000㎡

遺跡の立地：奇妙山系から北行する尾根支脈の頂部。松原遺跡との比高差150m。

時代と時期：縄文・弥生時代終末～古墳時代初頭，平安，中世末，近代

遺跡の特徴：痩せ尾根上に展開する墓域，生産遺構

主な検出遺構：低墳丘墓(1)，段郭状遺構(3)，溝(2)，畝状遺構(1)，道状遺構(1)

主な検出遺物：土器・陶器：土師器，黒色土器，灰釉陶器，かわらけ

石器：石鏃，石斧，石核，剥片

その他：勾玉，管玉，ガラス小玉，銅銭

善光寺平南域は，現在の長野市南部から更埴市に位置し，かつての埴科郡・更科郡・高井郡にあたる。当地は千曲川の形成する自然堤防，後背湿地が発達し，生活・生産空間が展開する。日常生活と密接に関連する里山はその背後に急峻な尾根となり位置する。

善光寺平の自動車道建設にあたり，こういった尾根のピークが「土採用地」となり，北平1号墳をはじめ，大星山古墳群，塩崎城見山砦が調査されている。いうまでもなく，これらの里山はあらゆる時代に人々の手が増えられ，人々の里山での行動の痕跡が少なからず明らかになりつつある。以下，字北平のピークに構築された北平1号墳を中心に，縄文・古代・近代の尾根利用についてもその概要を報告する。

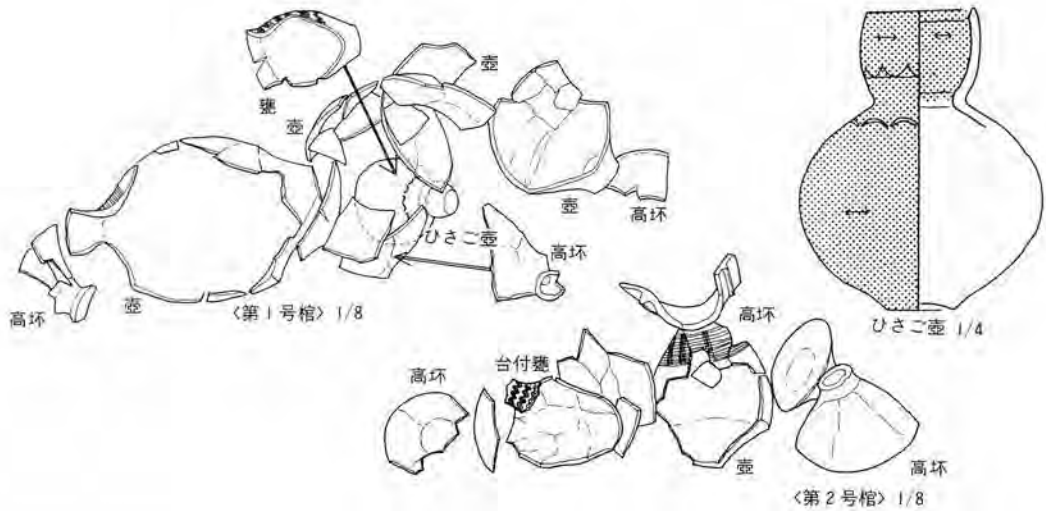
北平1号墳

「長野県埋蔵文化財ニュース」No.33でその調査概要にふれたおり，調査者は当墳墓を3世紀末の低墳丘墓と報告したことがある。遺構名については，①試掘段階で櫛形文系土器が出土したこと。②墳丘の構造や立地から複数の墳墓が想定されたことから「北平1号墳」と命名されたようであるが再考の余地がある。ここでは「北平1号墳」という遺構名で報告する。

墳丘は方形を基調とし，低い墳丘ももつもので，その主軸は14m前後，高さは1.5mを測る。墳丘を区画する周溝ならびテラスは1辺の中央部で切れ，同部分が陸橋部として外方に伸びる傾向にある。後世の桑畑の開墾等によってその構造については十分明らかにしえなかった。同様な平面形態をとる墳墓は，自然堤防上に展開する長野市・篠ノ井遺跡聖川堤防地点にみられ弥生時代後期から古墳時代前期の周溝墓・土壙墓・木棺墓等の集団墓に出現するようである。北平1号墳は比高差150m尾根上に1基のみ構築



第20図 第2号主体部・石郭状施設

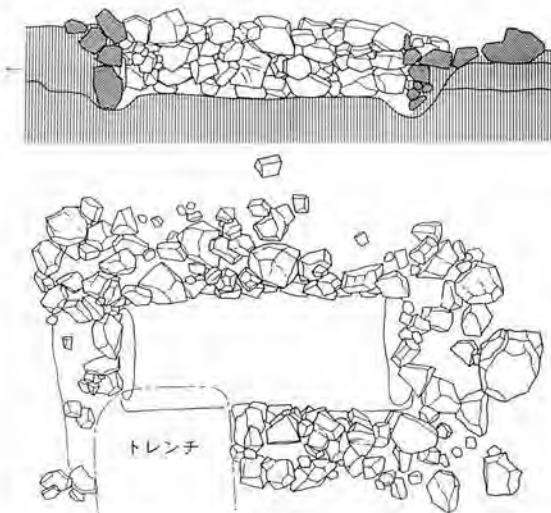


第21図 棺内土器出土状況および出土ひさご壺

されるという特徴をもつ。昨年の北平1・2号塚の調査を含め、周辺の尾根を300mにわたり調査した結果、単独の墳墓であることが明らかとなった。

埋葬主体部は2基の石椁状の石積みが検出され、平坦な床面・床面上の遺物の出土状況・小口痕の存在から箱形の木棺を想定している。その長軸は2mに満たない小型の棺である。この棺は、古墳出現期にみられる棺というよりは、弥生時代中期以来の棺の伝統を強く残すものと考えている。棺の底部は平板が用いられたようである。

出土遺物として、土器・玉類がある。土器はそのほとんどが2基の棺内に落ち込むかのような状況で出土した。棺上に埋置され、埋められたものと思われる。1号棺からは東海系ひさご壺が在来系土器群に相伴したが、中型壺の体部破片で取り囲まれる形で出土した。なお、棺外の墓壇構築面からも数点のガラス小玉が出土した。棺を埋置し、儀礼を執り行った際、玉が用いられている。



第22図 第1号主体部・石椁状施設略図(1:40)

棺床から出土したガラス小玉は、色調として、スカイブルーのものとコバルトブルーのものが相伴した。千曲川流域におけるコバルトブルーのガラス小玉の最古例は、長野市・松原遺跡河川跡出土のもので、大量の箱清水式土器と相伴した。弥生時代後期から古墳時代前期におけるコバルトブルー系のガラス小玉の流入の問題を考えるにあたり重要である。

まとめ

北平1号墳からは当該期のいくつかの集落を眼下に遠望することができる。自然堤防上の四ツ屋・松原・大室遺跡等である。善光寺平南縁部のこれらの地域は、近世においては北国谷街道のルー

トであり、北縁部の北国街道とともに日本海方面と中仙道を結ぶ重要なルートであった。今日の自動車道も前者のルートをとることとなった。大室集落の墓域とも考えられる村東山手遺跡からは櫛描文系の甕とともにS字状口縁台付甕・A類の出土をみた。また、当ルートにあたる中野市安源寺遺跡からはB類のS字甕とともに東海系土器群が、さらに近年の中野市域の調査ではさらに古相の東海系土器群が知られる。

北平1号墳が構築されるころ、北国谷街道ルート沿いの集落に東海系土器が姿を見せはじめ、後に中野市域では前方後方墳である蟹沢古墳が築かれる。北平1号墳に葬られた人物は同ルートの交易に関与したものと考えられるが、想像の域をでない。

弥生以前

北平1号墳の調査に伴う表面採集、また南斜面を中心に任意に設定した基盤層まで掘削したトレンチ調査では黒曜石、安山岩、頁岩、チャートなどによる打製石斧2点、石鏃2点、石核2点、剥片石器、剥片10数点、その他の石器類が検出された。これらは墳丘墓構築以前の遺物、おそらく大半は縄文時代のもものと推定される。樹木や、古代以降の山頂部での人々の活動等により遺物は当時の原位置をとどめていないが、墳丘墓構築以前においても人々による何らかの活動が営まれたことがうかがえる。詳細は本報告によりたい。

古 代

北平尾根一帯には奈良時代から平安時代前半の須恵器、土師器片が散見された。器種としては奈良時代の須恵器、蓋、長頸瓶の頸部、平安時代の黒色土器A類などである。煮沸具が欠如していることや遺構が少ないことを考えるに、当時の人々の生活の痕跡は稀薄であるものの、何らかの活動があったことがうかがえる。

中 世

現在山道となっている北尾根の脇から中世後半のかわらけがほぼ完形で3個体出土し、墳丘からは洪武通宝などの宋銭も見つかっている。遺構の早急な性格づけはできないものの、眼下に鳥打峠が位置していることから道状遺構・段郭状遺構を考える上で参考になると思われる。

近世以降

尾根の南東斜面に畝状遺構が発掘当初の山掃除の際に見つかっている。地域の人々の話などから明治・大正期の桑畑利用の跡と考えられる。蚕糸県長野の栄時における里山利用の一端がうかがえるものである。

えのきだ
(7) 榎田遺跡

所在地：長野市若穂綿内1952番地ほか

調査担当者：伴 信夫 稲場 隆 清水 弘

調査期間：平成3年4月4日～同年7月31日・

澤谷昌英 武居公明 谷 和隆

平成3年10月21日～同年12月20日

賛田 明 西嶋 力 野村一寿

調査面積：11,400㎡

馬場信義 廣瀬昭弘 廣田和穂

深沢重夫 福島正樹

藤沢袈裯一 藤原直人

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防及び後背湿地

町田勝則 宮島義和 若林 卓

時代と時期：弥生時代中期・後期，古墳時代，奈良時代，平安時代前半，中世後半，近世末期

遺跡の特徴：弥生時代中期～古墳時代の集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土 坑	溝	焼土跡	土器集中	沼 地	不 明
弥 生		36			7	2			
古 墳		341		2,490		4	1	1	2
奈良・平安		11	29		54	1			
中世以降									
合 計		388	29	2,490	61	7	1	1	2

主な出土遺物

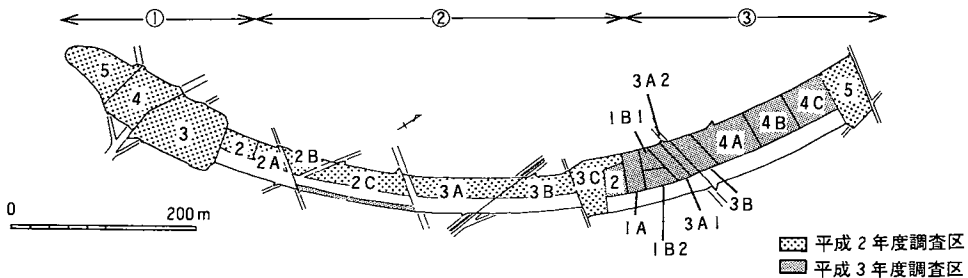
土器・土製品：弥生土器，人面付土器，土師器、須恵器，灰釉陶器，黒色土器，青磁，古瀬戸系陶器，中世土器，紡錘車，玉類，羽口，支脚，その他

石器・石製品：磨製石斧，紡錘車，玉類，コモ編み石，敲石，石鉢，磨石，磨製石製品，浮子

金属器・金属製品：金環，袋状鉄斧，銭貨

木器・木製品：曲物，井戸枠

そ の 他：人骨，獣骨など



第23図 榎田遺跡の調査範囲 (1:8000)

遺跡の概要と調査の経過 榎田遺跡は長野市の東部，若穂綿内に所在し千曲川右岸の後背湿地及び自然堤防上に位置する。本遺跡の調査は平成元年度，2年度の調査に引き続いて実施した。遺跡の全長は高速道用地内に沿って約900mを測り，前年度までに約20,000㎡を調査している。本年度は工事工程との関連から，従来の調査区と並行する②-1-A地区と，①-2～①-4-C地区までの11,400㎡を調査した。



第24図 榎田遺跡①-1, ①-2区全景

今年度は昨年度の成果から古墳時代後期から平安時代の遺構と、一昨年に調査された中世屋敷の続きが①-1～①-3地区より南に広がると予想されていた。しかし実際には奈良・平安時代の遺構は僅少で、また中世屋敷は①-3地区を越えて広がることはなく、古墳時代後期の遺構が圧倒的に多いことが明らかになった。これとは反対に弥生時代後期の遺構は①地区以北の調査区で12軒の住居を認めることができ、遺構の北側にも分布を広げていることが判明した。弥生時代中期 ①-2地区以北は、中期の包含層自体が存在せず、礫層に代わっており、遺物・遺構ともに検出できなかった。②-3-A地区の南に隣接する②-1-A地区からは、溝が2条検出された。2条のうち地区の北隅に位置する溝からは人頭大の礫とともに栗林II式の土器が集中して出土している。この溝より南からは、その溝から約30m南に位置するもう1条の溝も含めても、遺物は1片も出土しなかった。これらの事より、②-3-A地区で確認された中期の居住域の南限がこの溝になると推定できる。

弥生時代後期 昨年度調査において②-2-C～②-3-A地区より、23軒の住居が検出されている。今年度調査では②-2-C地区に並行する②-1-A地区より、24軒の住居が検出された。昨年度調査した②-2-C～②-3-A地区の面積と比べると、はるかに狭い面積である②-1-A地区であるが、住居数は23軒と24軒でほぼ同数であり、住居の密集度が高いことから弥生時代後期において、②-1-A地区の方がより居住適地として選地されていたことが推定できる。住居の形態は、方形、長方形、隅丸方形のものが多く、規模は様々で、一辺約3mのものから一辺約11mの大形住居も検出されている。炉は炉辺石を伴い、住居中央部からややずれたところに位置するものが一般的である。

①-3-A～①-4-C地区からは12軒の住居が検出されている。こちらの地区はかなり広い空間に、点在するように住居が分布しており、②地区の住居のあり方とは違い、かなり密集

度が低いあり方を示している。住居の形態は、隅丸方形のものがやや多く、その他、長方形、円形、不整形で、規模は一辺3～6mである。炉は前記した地区と同様に炉辺石を伴い、住居の中央部よりややずれたところに位置するものが一般的である。

また、両居住域の間にあたる①-2～①-3-A地区では住居は存在しないものの、遺物を伴う溝跡、土坑が検出されている。特に、①-2～①-1-A地区では最大径14m、幅1.5m～2mの円形周溝が存在する。その性格は周溝の内側は後の竪穴住居が著しく集中して、該期の施設を破壊しているため不明確であるが、墓である可能性も考えられる。また、周辺の溝や土坑との何らかの関連も考えられる。更に、同地区からは、遺構外ではあるが、人面付土器の顔面部の破片が出土している。この人面付土器は外面がきれいに磨かれて、赤色塗彩されている。目と口は穿孔されており、鼻孔部分も凹穴によって写實的に表現されているもので、県内では類例が少ない。この様なことから①-3-B～①-5地区が居住域であることに對し、①-1-A地区近辺は祭祀的意味合いの強い場所であったと推測される。

古墳時代前期・中期 榎田遺跡においては当該期の遺構が少なく、昨年度調査において遺跡中央付近の②-3-A～②-2-C地区において確認されているのみである。本年度は②-2-C地区の東側に位置する②-1-A地区において3軒の住居跡が調査された。遺物は土師器高杯、埴などが出土している。

古墳時代後期 榎田遺跡において最も集落が発展した時期である。昨年度までの調査の成果をふまれば、古墳時代前期の住居が遺跡中央付近（②-3-A～②-2-C地区）に見られたのが、後期になると中央付近から南側と北側に展開し、調査区域全面に広がる。また住居の切り合い関係も激しく当時の生活が連綿と続いていたことが推測される。

住居の形態的特徴としては、一辺5m前後の方形を呈するものが主流で、4m以下の小形住居や7m前後のやや大形の住居も見られる。特に①-4-A地区では、保有する土器も豊富な一辺約9mの住居、その隣には一辺8mの住居もあり、集落の中でも注意すべき地区である。また、当該期の住居はカマドを有しているが、当遺跡の特徴としてカマドが付設される壁面は北東か北西に向く傾向がある。

遺物としては土師器類が主体である。須恵器の杯類も若干含まれるが食器の器種組成に組み込まれる程ではない。生産関係の遺物については、フイゴの羽口および鉄滓、袋状鉄斧、浮子と思われる長球形の軽石製品などが出ている。またコモ編み石が多く出土しており、当時の生産活動に関わる遺物として記しておく。他に量的には多くないが、管玉・白玉・勾玉といった玉類の出土があげられ、これらは居住内からの出土例が目立つ。

掘立柱建物の時期の把握については昨年度からの課題として残されていたが、ほとんどの掘立柱建物が古墳時代の住居を切って構築されている以外は、時期を絞り込むことが難しい。いずれも柱穴の掘り方は比較的大きめで外形は円形のものが多く、2間～3間程度の大きさを有する。

奈良・平安時代 本年度の調査では奈良時代に特定できる遺構は確認できなかった。平安時代について①-1-A地区で5軒、①-1-B₂地区で3軒調査している。榎田遺跡においては

当該期の遺構は非常に少なく、平成元・2年度の成果を合わせても住居は①-1地区で確認されたにすぎない。しかし昨年度調査した③区では陰刻花文を有する緑釉陶器、丸柄、巡方、更には皇朝十二銭の「饒益神寶」なども出土しているの、調査区外に集落が広がっていた可能性がある。

本年度の調査で注目すべき遺構としては平安時代の木棺墓が上げられる。これは①-3-A地区で確認されたものである。規模は約270cm×100cmでほぼ長方形を呈しN-67°-Eに長軸をもつ。構造的には、材木を間隔を持たせて並べ、その上に木棺を乗せ、更にその周囲には木槨により囲まれている。木棺の下に敷かれた材木は平行に約45~70cmの間隔で置き、それぞれの周りを粘質土で囲んで固定してある。また、木槨に沿う形で杭が10本確認されている。遺物については、13本の歯が木棺南西部で出土、北東端の横に置かれた木と外枠の間では黒色土器の杯が4点上向き状態で出土し、灰釉陶器の皿が黒色土器の上に伏せた状態で1点出土した。灰釉陶器は東濃窯光ヶ丘1号窯式段階と考えられ、いずれもほぼ完形である。また灰釉陶器を載せた黒色土器の下からは木製品が出土している。

中世以降 本年度調査においては、①-2-B₂地区において井戸が1基検出された。これは調査区内で直角に曲がる溝1で区画された範囲の中に位置す

る。溝1は平成元年度に調査され、出土遺物から15世紀代に位置付けられており、井戸出土の灯明皿と比較しても年代的に矛盾しない。構造については底面に板を4枚樹形に組み、その上に巨礫が円形に組まれていたが、検出面では石組を壊して蓋をするかのようにしてあった。この他の遺構としては①-3-A区で溝の調査が行われ、北宋銭である「祥符通寶」が出土している。

おわりに 榎田遺跡の調査は今年度で3年目にあたるが、平成4年度も引き続いて発掘される予定である。当遺跡においては遺構密度も極めて高く、集落の範囲は調査区外にも広がると推測されるが、遺構の時期については弥生時代中期・後期~古墳時代後期、平安時代前期、室町時代のものが目立つ感がある。この中で古墳時代後期に属する住居が圧倒的に多い。しかしこれらの時代に挟まれた期間は生活の痕跡が少ないことも注意される点である。



第25図 榎田遺跡・木棺墓遺物出土状況



第26図 榎田遺跡・木棺墓

(8) がまん淵^{ぶち}遺跡

所在地：中野市大字草間字西山2092番地 調査担当者：鶴田典昭 入沢昌基 中村敏生

調査期間：平成3年7月15日～同年11月15日 阿藤慎治

調査面積：3,000㎡

遺跡の立地：篠井川に面した丘陵先端部の山頂および山腹

時代と時期：先土器時代，縄文時代，弥生時代後期

遺跡の特徴：先土器時代石器製作跡と丘陵上の弥生時代後期の集落跡

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴住 居跡	土坑	溝	ピット	ブロック
先土器					1
弥生後期	5	1	1	27	
近世以降		2	2		

主な出土遺物

土器：縄文時代前期土器，弥生時代後期土器

石器：石鏃，磨製石斧，石錘

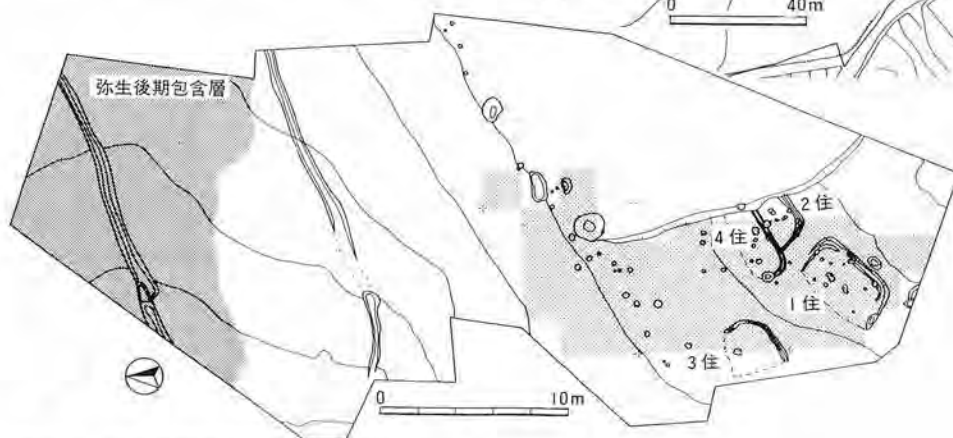
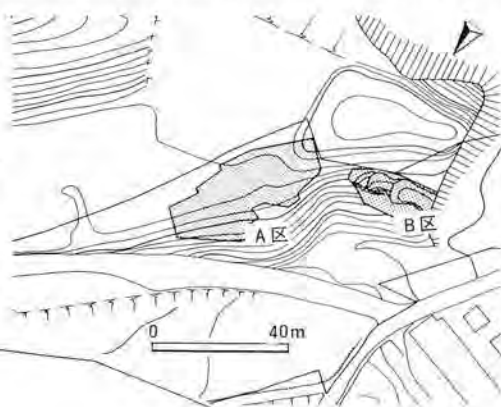
土製品：土製勾玉，紡錘車

石製品：管玉

鉄器：鉄鏃

本遺跡は，篠井川にのぞむ丘陵上に位置する。遺跡が立地する丘陵は土採りなどによりその南西端と南東側が削平され，また丘陵頂上部も一部削平されて，遺跡の一部がすでに失われている。また，調査区内においても削平した土砂を斜面の低い部分に盛り平坦部をつくり出しているため微地形はかなり変更されていた。

弥生時代後期（第27図）A区では，竪穴住居跡とピット列が検出され，B区では溝状の遺構が検出されている。B区の溝の覆土からは大量の弥生時代後期箱清水式の土器片が出土している。完形品は数点であとはすべて破片の状態です。斜面上方より廃棄された土器



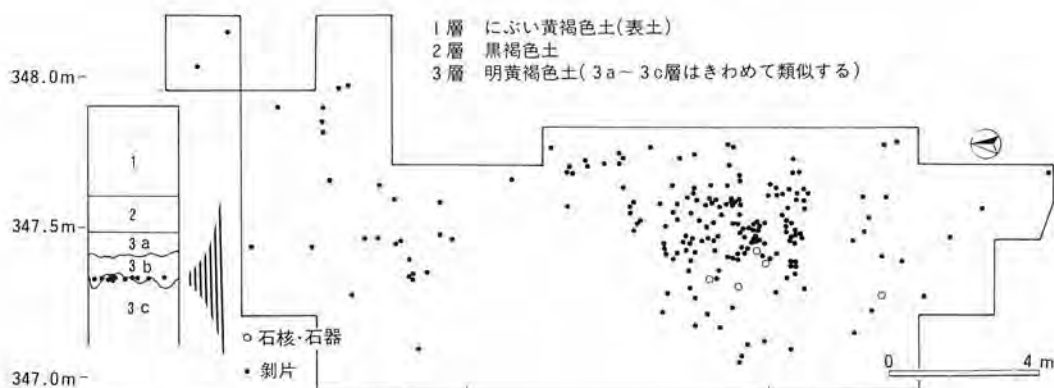
第27図 がまん淵遺跡，地形図及び遺構配置図

が溜っていたものと考えられる。またこの溝は数回の土砂崩れにより原形をとどめていない。A区では、緩斜面に5軒の竪穴住居跡が検出されたが、斜面下方は床がすでに流失しているようで住居跡の全形は不明である。全ての住居跡に周溝が認められ、2号住居跡は、深く掘り込まれた4本の支柱穴が確認されたが、1・3・4号住居跡には深く掘り込まれた支柱穴は確認されなかった。また、1号と3号住居跡で炉跡が確認されている。1号住居跡では3ヶ所の火床があるが、これらには床の貼りかえなどによる層位的な前後関係は認められない。なお、1号住居覆土より、管玉と鉄鏃が出土している。これらの住居跡の北側には直径15~35cm、深さ15~50cmのピットが等高線に平行して弧状に並んでいる。これらのピットの時期決定は困難であるが、その位置関係と覆土が住居のものと同様であることから弥生後期の住居跡と同時期と推定できる。ピットは垂直に掘られており柵のような施設を想定できる。ピット列の斜面下方には住居跡と溝より出土したものと同時期の多量の箱清水式土器の他、土製勾玉も出土している。想像をたくましくすれば、低地部との比高差約20mの小高い丘陵上に柵とB区で検出された溝で区画された小集落が描き出されてくる。

先土器時代 弥生後期の住居跡が集中する緩斜面からブロックが検出されている(第29図)。ほとんどが安山岩とクリーム色に風化した頁岩と思われる石材で、黒曜石が数点含まれている。剥片196点で石核2点、剥片に周辺加工をしているものが3点である。出土した石器の時期決定は今後の課題とし、ここでは資料を提示するのみにとどめるが、剥片は細石刃または槍先形尖頭器の製作の結果生じたものではない。層位的にも沢田鍋土遺跡の細石刃のブロックと区別することができない。



第28図 ブロック出土の石核・他 (1:2)



第29図 先土器時代石器分布図 (1:200)

さわだなべつち
(9) 沢田鍋土遺跡

所在地：中野市大字立ヶ花字鍋土636番地ほか

調査担当者：鶴田典昭 入沢昌基

調査期間：平成3年4月4日～同年11月30日

中村敏生 阿藤慎治

調査面積：20,000㎡

遺跡の立地：丘陵上緩斜面から低地の谷部

時代と時期：先土器時代，縄文時代中期，古墳時代前期，奈良時代，近世以降

遺跡の特徴：細石刃を含む石器ブロック，古墳時代前期粘土採掘坑，奈良時代須恵器窯跡など

主な検出遺構

遺構 時期	住居跡	土坑	溝	窯・灰原	埋壘	粘土採掘坑	焼土坑	ブロック
先土器								1
縄文中期					2			
古墳前期						1		
奈良	2	9	1	3			1	

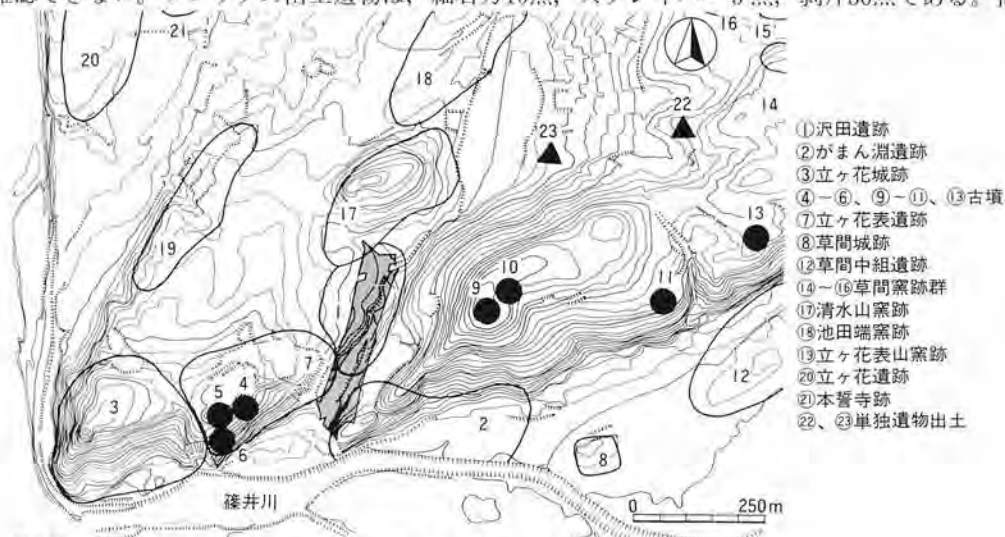
主な出土遺物

土器：縄文中期後半土器，古墳時代土師器，奈良時代須恵器・土師器

石器：細石刃，スクレイパー，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，磨石，石皿

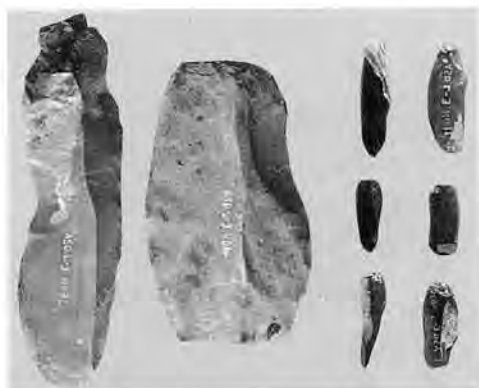
本遺跡は，上信越自動車道の建設に伴う県教育委員会文化課による埋蔵文化財の試掘調査の際発見された遺跡である。遺跡は篠井川と千曲川の合流点にのぞむ丘陵上に位置し，周辺には，草間窯跡群，立ヶ花表山窯跡群，清水山窯跡群，池田端窯跡群などの窯跡遺跡が集中する地区である。遺跡は小さな谷を挟んで二つの丘陵上に位置し，そのうち西側の丘陵の肩から谷部にかけてが調査範囲となる（第30図）。調査区内の丘陵上は，自然の流路と思われる溝により3つに区分される。これらの溝は奈良・平安時代以降に形成されたものである。

先土器時代 調査区の西壁際に細石刃を伴う石器ブロックが検出された（第32図）。基本層序5層の黄褐色土中より出土している。ブロックの西半分が調査区外に出ているためその全容は確認できない。ブロックの出土遺物は，細石刃10点，スクレイパー5点，剝片36点である。他

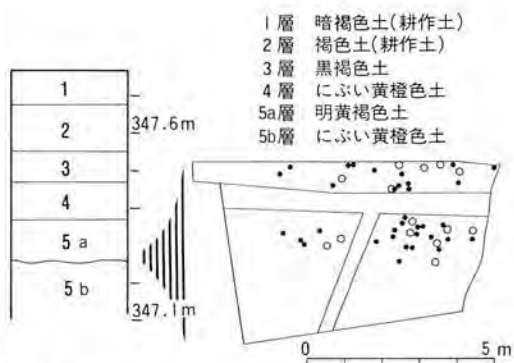


第30図 遺跡位置図（遺跡範囲は中野市遺跡詳細分布図より転載）

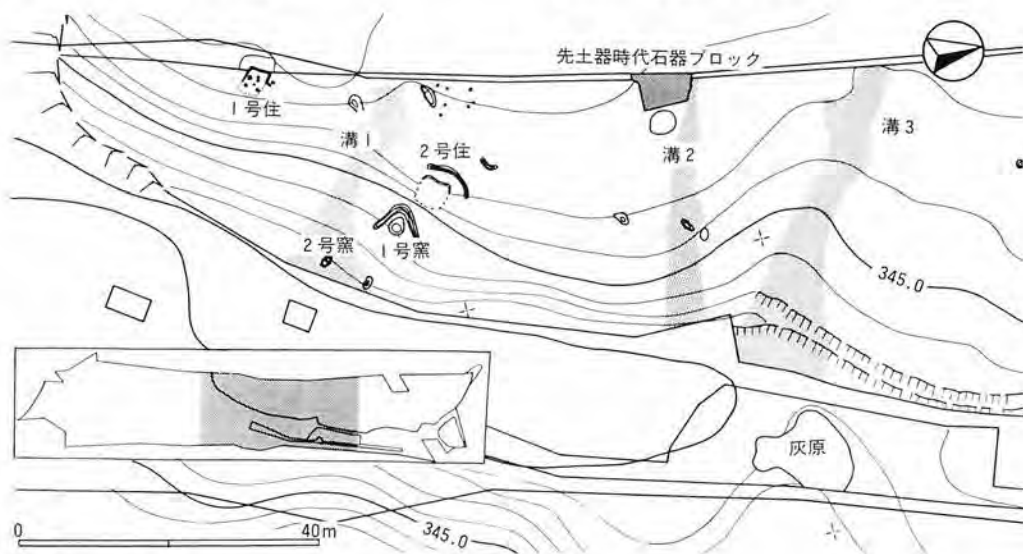
にこのブロックの北端を走る溝2の覆土からも同時期のものと思われるスクレイパーが3点出土している。本ブロックの北東にある粘土採掘坑の覆土よりナイフ形石器1点と剥片2点が出土している。粘土採掘坑によりブロックが破壊されているものと思われる。



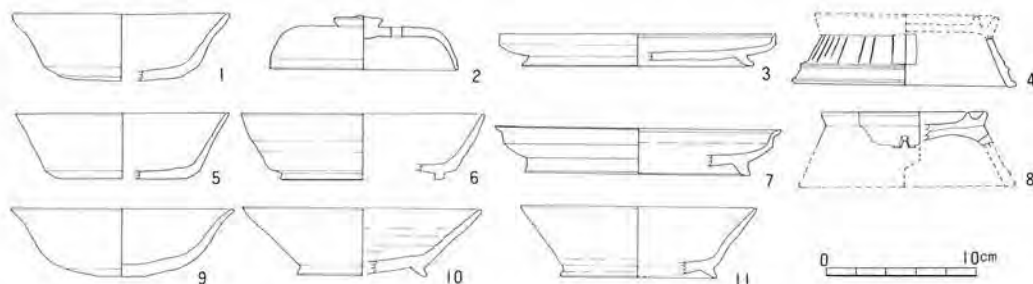
第31図 ブロックの石器 (1:2)



第32図 先土器時代石器分布図 (1:200)



第33図 遺構配置図



第34図 1・2号窯・灰原出土の須恵器 (1~8:灰原, 9~10:2号窯, 11:1号窯 1:5)

縄文時代 検出された遺構は、上部が耕作により失われた正位に埋められた屋外の埋甕のみである。古墳時代の粘土採掘坑を覆う黒褐色土より縄文中期後半の土器片、打製石斧、石鏃等の石器が多数出土しているが、これらの遺物は調査区の西側の斜面上部より流れてきたものと判断される。



第35図 埋甕出土状況

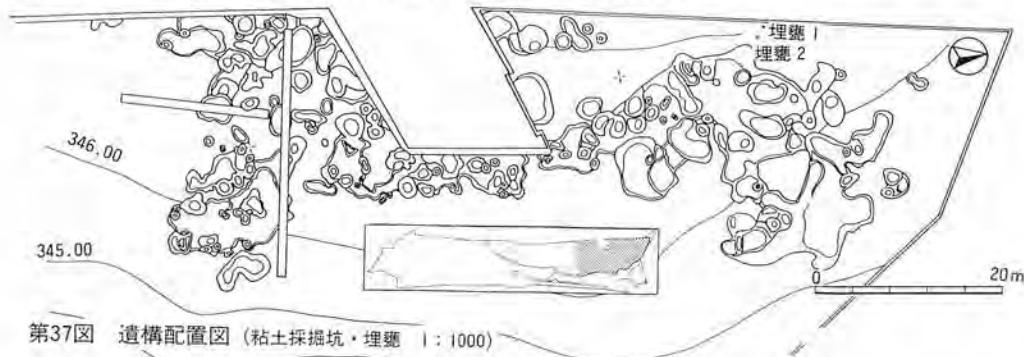
古墳時代 調査区の北半分に粘土採掘坑と思われる不定形な穴が検出されている(第37図)。これらの穴は粘土層まで垂直方向に掘り込み、さらに粘土層を数10cm水平方向に掘り粘土を採掘したと思われるオーバーハングした部分も認められる(第36図)。深いところでは粘土層の下の砂利層上面まで掘り込み、検出面より1.5mとなる。また、底面より三角形や弧状の工具痕と思われるものも検出されている。以上のような状況からこの遺構は粘土採掘坑であると判断した。覆土の状態から掘った土を前に掘った穴に埋め、前の採掘の穴が埋まる前に次々と連続的に粘土の採掘を行っていたと考えられる。整理作業途上のため明言はできないが、穴の底部より古墳時代前期の高杯、甕等が出土していること、前期の土器が目立つこと、さらに前述の覆土の状態から、古墳時代前期を出ない比較的短時期に行われた粘土採掘の跡ではないかと考えている。また採掘坑の範囲は一部調査区外に出ておりその全容はつかめないが、調査区内での採掘坑の総面積は787㎡におよぶ。



第36図 粘土採掘坑断面

奈良・平安時代 竪穴住居跡は調査区南端の斜面部に2軒検出されたが、斜面下方は既に流失している。カマドは2軒とも北壁に設けられており、1号住では浅い4本の柱穴が確認され

ている。また2号住では斜面上方に弧状に巡る溝が検出され、覆土の類似とその位置関係から竪穴住居に関係する施設と思われる。なお、溝1より斜面上方から流れてきた土師器などが大量に出土しており居住域は更に斜面上方に広がっていると考えられる。2号住の斜面下方には登り窯が2基検出されたが、溝1に削られており窯底が部分的に残存しているのみである。1号窯は床の下の焼土面が残っており残存長は9mで、周辺の窯跡のなかで大形のものである。これらの窯の灰原は既に流失しており確認されなかった。この窯跡より北東へ60mの谷部で灰原が検出された。窯がある斜面は調査区外のため、調査していない。杯、杯蓋、盤、皿、円面硯、長頸壺、短頸壺、甕、横瓶などが出土している(第34図)。



第37図 遺構配置図 (粘土採掘坑・埋甕 1:1000)

(10) 更埴条里遺跡

所在地：更埴市屋代七ツ石3-1番地ほか

調査期間：平成3年4月8日～同年12月26日

調査面積：46,100㎡

遺跡の立地：自然堤防背面～後背低地

時代と時期：縄文後期・晩期，弥生～現在

主な検出遺構：43ページ参照

主な遺物：

土器・陶磁器：縄文後期・晩期土器

弥生土器，土師器

須恵器，灰釉陶器

中近世土器陶磁器

土製品：土偶，分銅型土製品，

布目瓦

石器・石製品：打製石斧，石鏃，剥片

蛇尾，分銅型石製品

紡錘車，石臼，砥石

金属製品：刀子，紡錘車，銅銭

木製品：田下駄，曲物，井戸杵

その他：馬歯，人骨ほか

調査担当者：市川隆之 川崎 保 桜井秀雄 中村 寛
長谷川桂子 河西克造 大久保邦彦 松岡
昭彦 松岡忠一郎 宮脇正実 柳沢 亮
伊藤克己 上田典男 岡沢康夫 小林清人
伴 信夫 稲場 隆 清水 弘 澤谷昌英
武居公明 谷 和隆 西嶋 力 野村一寿
馬場信義 廣瀬昭弘 廣田和穂 深沢重夫
福島正樹 藤原直人 宮島義和 若林 卓
出河裕典 西 香子

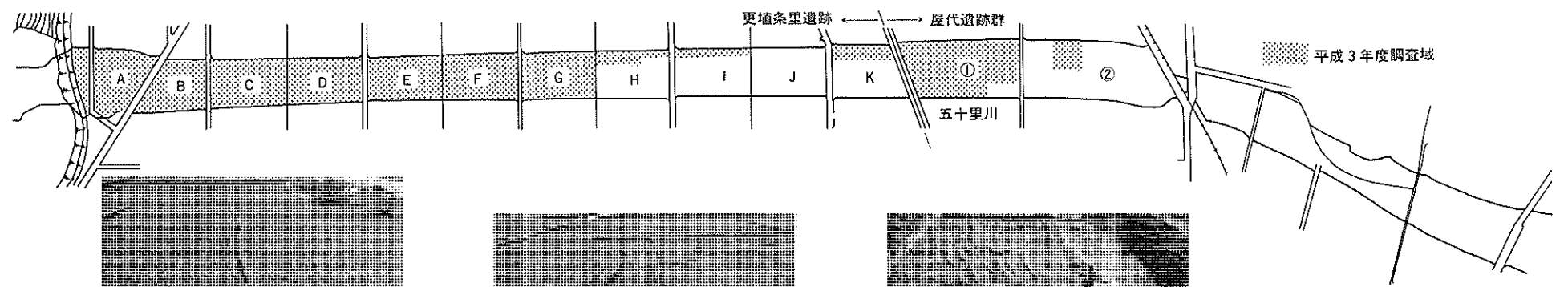


第38図 更埴条里遺跡全景

調査の概要 更埴条里遺跡は自然堤防背面の緩斜面から低地に立地し，現在，この地は圃場整備を経た水田が広がる。これに先立ち，昭和37年～41年にかけて文献・地形地理・考古の各分野の専門家が集まり，現地表面の条里景観を含めて多角的に分析・記録する調査が実施された。この調査は数々の成果をあげ，後の研究にも少なからず影響を与えている。その後，自然堤防側を中心に更埴市教育委員会が調査を行い，新しい所見も加えられている。このような調査歴のなかで，今回，上信越自動車道建設に伴って後背低地から自然堤防を縦断する範囲で調査を行うことになった。調査対象地は現在の道路や水路と交差する箇所を区切り，南よりA～K地区とし，本年度はA～G地区とH・I・K地区の幅10m分を対象として調査を実施した。その結果，地形と土層に対応して遺構の性格を変えながら最大6枚の調査面が確認された。なお，遺跡の範囲に関し，南限は山際，北限は便宜的に五十里川を境として屋代遺跡群とした。以下，時期別の概要を記す。

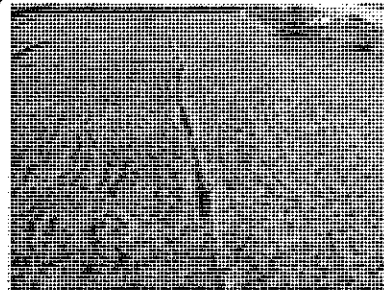
縄文後期 南端のA地区で少量ながら縄文後期の精製土器が出土し，内部に礫を持つ土坑数基が検出されている。また，土器の伴出は無いが，埋土に焼土や炭化物を含む土坑がA，E，G，H地区で検出されている。

縄文晩期以降 E，F，H，I地区で粗製土器の集中が数箇所認められる。石器はかなりの範囲で打製石斧等が出土しているが，小型石器はわずかであり，出土の認められない地区もある。



●●●● = ブロック状土塊の分布する図面

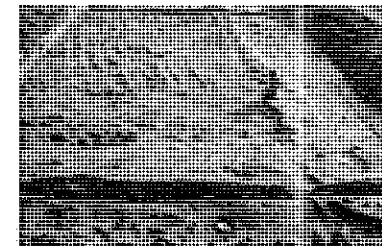
==== = 浅い溝が併列する図面



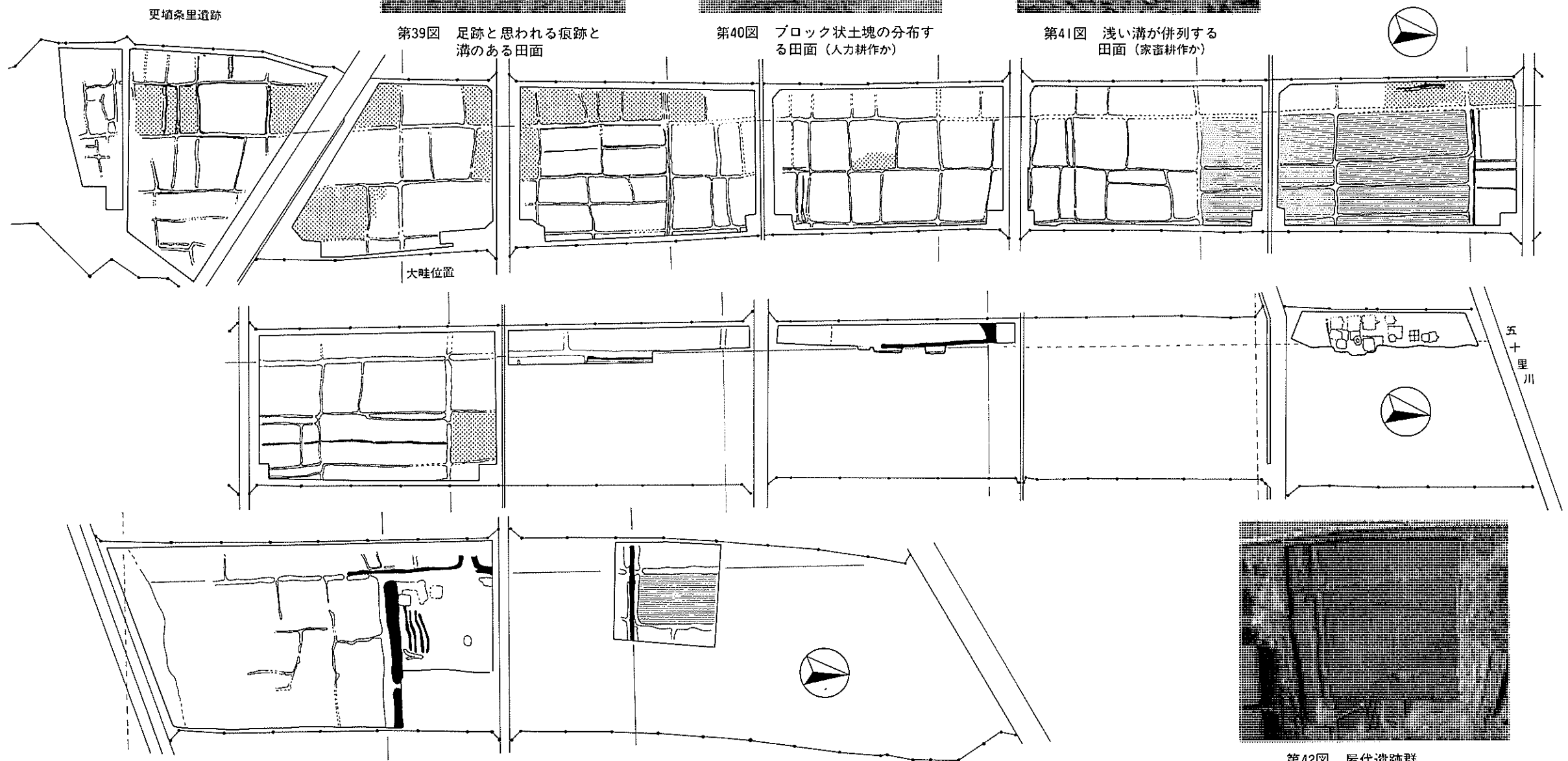
第39図 足跡と思われる痕跡と溝のある田面



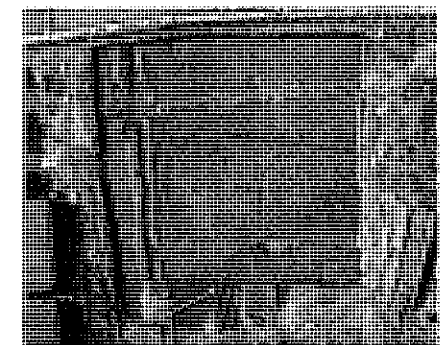
第40図 ブロック状土塊の分布する田面 (人力耕作か)



第41図 浅い溝が併列する田面 (家畜耕作か)



第43図 更殖桑里・屋代遺跡群平安前期遺構略図 (1 : 2,000)



第42図 屋代遺跡群
②-C区平安水田面

遺構としては、包含層と同じ埋土が入る柱穴状や焼骨を含む大きめの土坑、焼土跡が検出された。柱穴状の落ち込みはA～I地区で認められたが、1間×1間の方形に配列する例がE地区以北、また、円形に配列する例がF地区で確認された。これらの遺構や遺物に関して性格を十分検討できている段階ではないが、非常に注目される遺構である。

弥生時代～古墳前期 縄文晩期から弥生時代のある段階までにE地区以北で新たな土層堆積が認められる。この堆積直後の自然堤防背面の様相は明確にできていないが、低地側のA地区では少量の弥生時代中期～古墳時代前期土器を耕土に包含する水田が2面検出された。2面とも類似した水田で地形に合わせた大きめの区画をとる。用水路は検出されなかった。

古墳後期？ 前代までの低地水田にピートの堆積が認められ、耕作は放棄されたい。

自然堤防背面では平安時代の耕作土の下層に傾斜方向に走る溝や畔の残骸が認められ、自然堤防背面の水田化が進行したようである。しかし、厚い堆積土がないうまま、連続耕作されており、次の平安期水田にいたるまでの子細な状況は明らかにできなかった。

平安時代前期 この時期の遺構は広範囲に厚い洪水砂層で覆われたために遺構が良好に遺存する。A～I地区に広がる水田域では東西南北に貫く大畔～半折畔によって坪～半折に区画されており、大畔の区画は屋代遺跡群と同じ計画性の内にあるようだ。半折区画内は更に小畔で分割され、傾斜の大きな箇所ほど細分される傾向がある。また、田面に残る溝との関係や畔の土層観察より、小畔の区画は時期毎や耕作の事情等で変化しやすい区画である可能性がある。田面には、耕作跡と思われる足跡が列状に認められるほか、土がブロック状に検出されて荒起こしと思われる痕跡、平行する浅い溝が列状に並び、家畜を用いたスキ耕作と思われる痕跡が残る。また、畔の脇に浅い溝が作られている例等もある。水回しは基本的に水口を媒介とした畔越配水であり、用水と思われる溝はC地区と集落境の可能性のあるI地区で検出されたのみである。なお、E・F地区の東西大畔下で古水路と推定される溝が検出されている。この水田は出土土器と耕作痕等から平安前期末頃の春に埋没したと推定される。また、水田が広域に及ぶわりには畔越配水を基本とすることからも水田全域の耕作には疑問も残る。

平安前期の集落はK地区で検出されたが、砂層を埋土に持つ遺構は井戸のみで、竪穴住居跡は洪水前に放棄されていた可能性がある。

平安中期以降 A地区では埋没水田畔に一致する溝が洪水砂上に認められ、洪水直後水田域が復旧されたと推定されたが、その一方で高台に位置するH・I地区では竪穴住居が構築され、洪水以前より遺構として認められる水田域は減少している。このH・I地区集落は平安後期には消滅する。

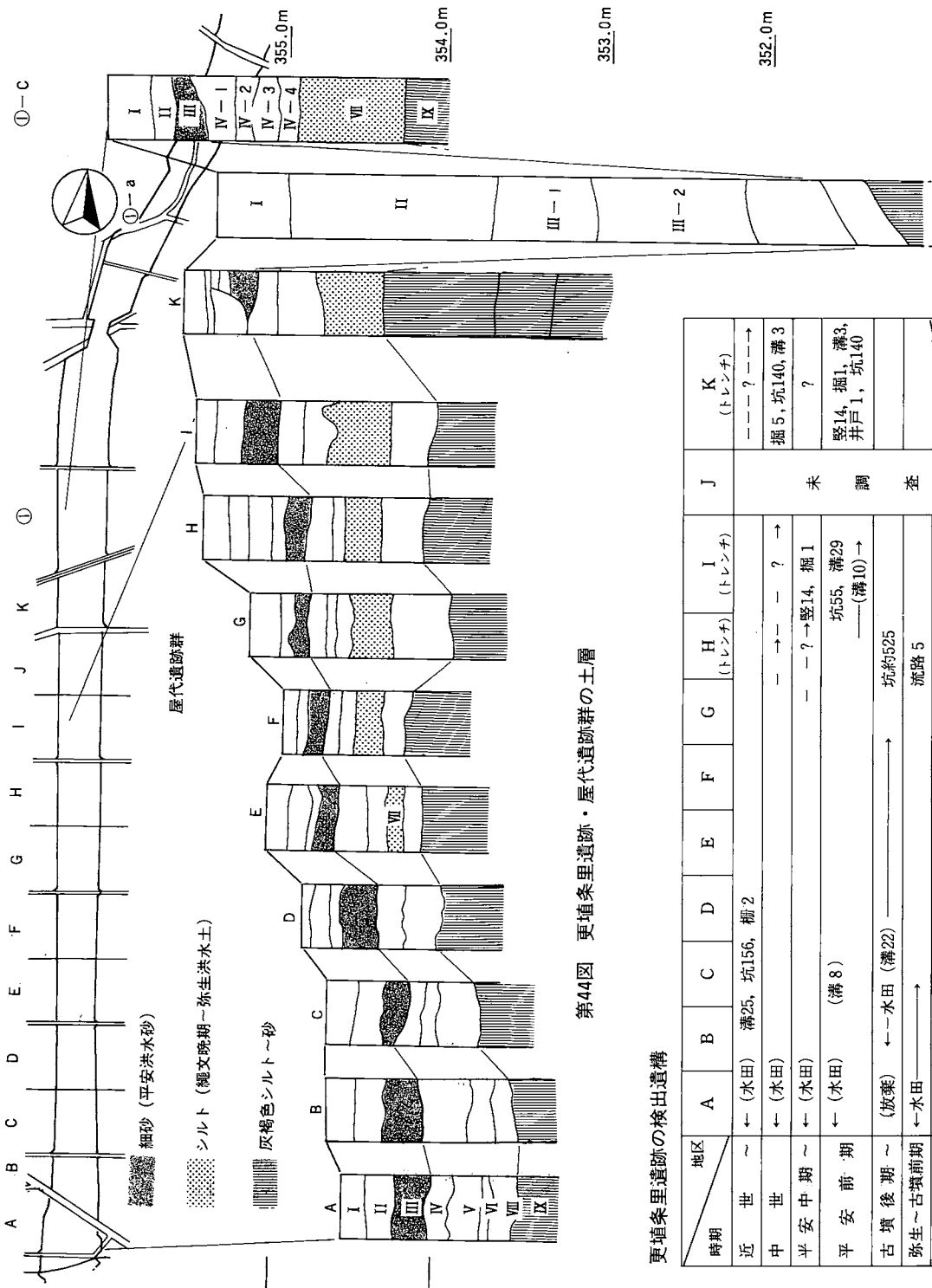
平安時代以後は厚い堆積土がなく、検出された溝や浅い井戸状の土坑から推測すれば、調査範囲の大方は水田等の耕作域として継続された可能性がある。そのなかでK地区は中世に再度、集落が作られているが、それも近世には連続していない。そして、調査範囲の大方が水田になるのは耕土の遺物や水路から近世も後半以後と推定される。

最後に 今回の調査は、自然堤防を後背低地から貫くかたちで、低地側～自然堤防背面部を対象とした。今後、自然堤防上の屋代遺跡群と合わせ遺跡の性格を検討をしていきたい。

屋代遺跡群～更埴条里遺跡の地形と土層

遺跡の所在する更埴市屋代・雨宮は、千曲川右岸に位置し、地形的には、自然堤防、その背後の緩やかな自然堤防背面、そして後背低地とわけられる。今回の調査範囲は後背低地から自然堤防を貫く形で、五十里川を境として自然堤防側を屋代遺跡群、自然堤防背面から山際の後背低地にいたる部分を更埴条里遺跡としている。この調査地内の地形は巨視的に見れば千曲川で形成された堆積地形に全て包括され、自然堤防から山際の低地へ傾斜する地形である。さらに微視的にみれば、いくつかの自然堤防と平行する高まりと窪みの凹凸が存在し、旧河道や埋没している河道跡が絡みあって、平安時代には集落と水田域が入り組む状況を産み出している。

上記に述べたように遺跡内の土層は基本的に千曲川起源の堆積土からなる。調査の下限ととらえた灰褐色の砂質シルト～砂は、屋代遺跡群側に高いものの、現在みる地形傾斜よりかなり緩やかである。この灰褐色シルト上面には更埴条里の低地～自然堤防背面にかけて灰黒色の粘土層が認められ、縄文晩期の包含層となっている。範囲は更埴条里Ⅰ地区までしか確認されていない。この層の上には屋代遺跡群に広がる灰褐色の新しい堆積土が認められる。この層は自然堤防側に厚く堆積し、更埴条里E～D地区まで分布する。本来はもっと広範囲に分布した可能性もあるが、耕作で削平されて不明になっていると考えられる。堆積時期は土層自体に遺物をほとんど含まないが、上下の遺構・遺物より縄文晩期～弥生時代のある段階と考えられる。この土層堆積以後～平安期の大洪水砂までの土層は、広範囲に及ぶ人間活動の働きかけ（特に水田耕作）や、腐植等の2次的影響で場所により様相が異なる。逆にいえば、人間の活動跡を埋め尽くす大洪水は平安前期まで認められず、その間は安定した時期と言える。まず、先の縄文晩期～弥生時代の堆積土との関連は明確でないが、更埴条里A地区を中心とした低地のみに確認される古い水田関連の土層がある。その上には屋代遺跡にまで及ぶ堆積土が載るが、耕作された可能性のある所では黒灰色～灰色の粘土層、水田化されなかった自然堤防上では腐植化したとも推定される黒褐色のシルト層となっている。その後水田化されたり、集落が営まれたりと、水田土壌は地域的に偏在する。こうして、平安前期までの様相が形成されるが、これも平安前期の洪水砂で全て覆われる。この砂層は調査範囲の広域で認められる他、千曲川対岸の石川条里遺跡等で確認される砂層と対比できる可能性がある。この洪水砂の堆積後、水田耕作が行われたり、腐植している状況も認められるが、後の水田耕作で削平されて堆積土そのものしか残存しない地域が多い。特に後の堆積土が薄い更埴条里側では洪水砂の2次的に変化した土層が残存しない地域が多い。この後、複数の洪水が覆う状況は推定されるが、ほとんど耕作等の人間活動の影響で、堆積土そのものが残存する箇所は本年の調査範囲では確認されていない。最後に以上のことは本年の調査結果からの中間評価であり、今後の調査の進展により、所見の変更が出る可能性のあることを断っておく。



第44図 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の土層

更埴条里遺跡の検出遺構

時期	地区	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
近世	~	← (水田)	溝25, 坑156, 樋2									(トレンチ)
中世		← (水田)										掘5, 坑140, 溝3
平安中期~		← (水田)								?		
平安前期		← (水田)	(溝8)									
古墳後期~	(放棄)	←~水田 (溝22)										
弥生~古墳前期		←水田										
縄文晚期	掘20, 坑約650, 焼土址3, 遺物集中20											
縄文後期	坑30											

竪=竪穴住居跡, 掘=掘立柱建物跡, 坑=土坑

(11) ^{やしろ}屋代遺跡群

所在地：更埴市雨宮北中原

調査担当者：寺内隆夫 上田 真

調査期間：平成3年4月15日～同年12月26日

本田 真 吉沢信幸

大和龍一 田中貴美子

調査面積：9,250㎡

夏目大助 百瀬忠幸

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上

青木一男 中沢道彦

下島浩伸

時代と時期：弥生時代中期・後期，古墳時代前期，平安時代，

鎌倉・室町時代，江戸時代

遺跡の特徴：9世紀代の集落と条里水田の開発，大洪水による水田の壊滅と10～14世紀に至る集落の展開

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡 竪穴状遺構	礎石建物跡 掘立柱建物跡	柱穴ほか	土坑	墓	溝	井戸	水田	畦畔	その他
弥生中期 ～古墳前期				1,374 (根痕多)	6		4				焼土跡1
平安	59	6	1,880以上 (中世建物多)	70以上	7	154	17	19	31	炭化物・遺物 集中区 数ヶ所	
鎌倉・室町	14	総数不明		220以上	3	22					
江戸						6	6				

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文土器(後期)，弥生土器(中期・後期)，土師器(古墳時代前期)，土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁(平安時代)，青磁・かわらけ・その他中世陶器

土製品：土偶(弥生時代)，土錘(平安時代)

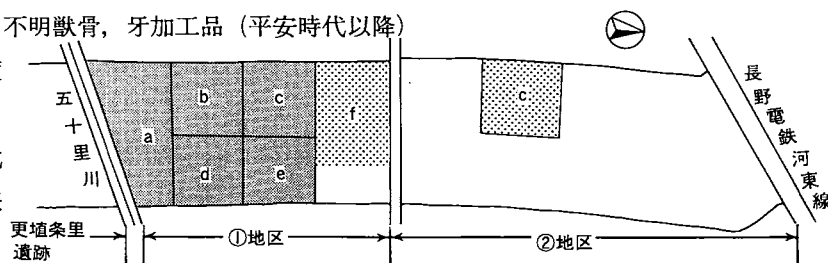
石製品：磨製石斧，石庖丁，石鏃(弥生時代)，石帯，砥石(平安時代以降)

金属製品：鋤・鎌・鉄鏃，釘・紡錘車・刀子・短刀・鉄さい，銅鏡片？，銭貨(平安時代以降)

木製品：卒塔婆？，下駄，箸，曲物，板材，杭(平安時代以降)

骨・骨製品：人・馬・犬・不明獣骨，牙加工品(平安時代以降)

調査の概要 平成3年度は，①a～e区の調査を完了し，①f・②c区の平安時代の層(IV2層上面)まで調査を進めた。本地区は，千曲川の自然堤防上を縫うように走



第45図 屋代遺跡群・平成3年度調査地区範囲(1:4000)

る五十里川の左岸に接しており，①f区のピークからゆるやかに五十里川(南)へ向かって傾斜している。堆積状況と検出面の関係については，第44図を参照していただきたい。

縄文時代～古墳時代 旧五十里川より縄文時代後期の土器片が出土した。しかし，炭化物の包含が認められたVII層，IX層での遺構・遺物の検出はなかった。

弥生時代中期～古墳時代前期にかけての遺物は，IV3層中に散在した状態で認められた。同

層の下面では多数のピットと焼土跡1ヶ所が見つまっているが、ピットについては根痕も多く、遺構との識別は、現在整理検討中である。

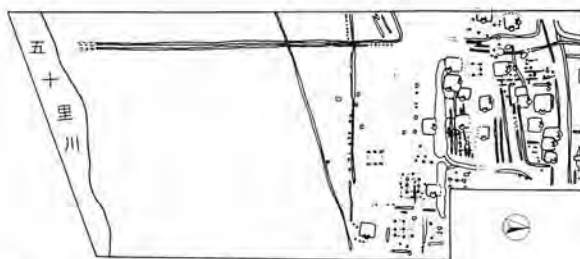
平安時代 9世紀代 IV 1～3層上面で検出。島状の微高地となっていた①f地区を中心に集落が形成されはじめる(第47図)。①c・e地区ではほぼ東西に走る柵列と溝が検出され、これを境に北側に竪穴住居跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡などが集中する。ここで注目される



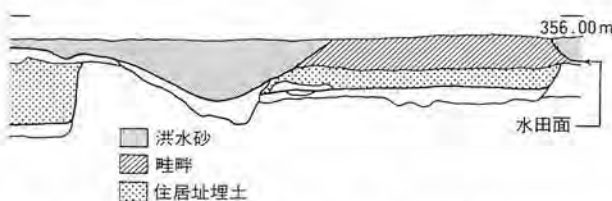
第46図①f地区礎石建物跡

遺構は、2棟検出された礎石建物跡である。9世紀代の溝が上下層にあり、平安時代の非常に限定された時期に属する。①f区からは、石帯、銅鏡?の破片、緑釉陶器片が少量見られるだけで、出土遺物から本建物跡の性格を窺い知ることは難しく、今後に課題を残している。

平安時代 9世紀末 灰釉陶器を包含する洪水砂(III層)に被われたIV層上面は、砂の除去によって容易に当時の地表面を復原できる好資料となっている。9世紀代には、大規模な条里景観を示す水田の区画がこの地区にもおよび、埋められた竪穴住居跡の上に大畦畔が設定され(第48図)、集落域は短期間の内に範囲を縮小するものと思われる(第43図)。微高地上の竪穴住居跡は埋め戻された状態で洪水砂を被っており、洪水時に建っていた住居は見つかっていない。この微高地には平行する数条の溝があり、畝跡の可能性が考えられる。水田区画は、更埴条里遺跡から延びる南北軸に乗っており、東西の大畦畔の間隔は、104m前後を測る。また、五十里川の最下の遺物包含層からは灰釉陶器の出土が認められた。

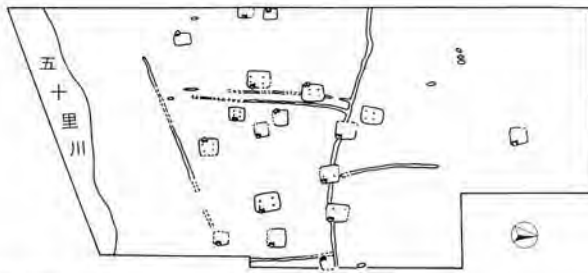


第47図 ①地区 9世紀の遺構分布図 (1:2,000)



第48図 平安時代(9世紀) 住居・畦畔・洪水関係断面図 (1:100)

平安時代 10～12世紀代 III 2層上面で検出。洪水後、水田の再開発は行われず、調査区の大半分は集落域となる。集落の中心はやや南に移動し、9世紀代の集村型から竪穴住居が散在する形に変化する(第49図)。この間に、住居形態が変化を遂げる。掘り込みが浅くなり、カマドは壁中央からコーナーへ移動し、煮炊具は甕から羽釜へ変化する。さらに、12世紀代にはカマドが消滅し、竪穴の中央に炬を持つようになり、この形態は中世の竪穴状遺構へと引き継がれる(第50図)。

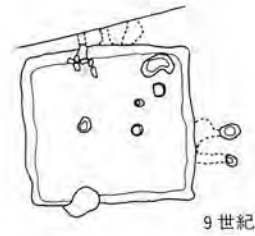


第49図 ①区11～12世紀の遺構分布図 (1:2,000)

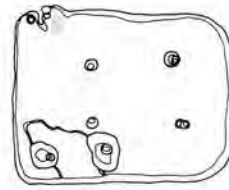
鎌倉・室町時代 III 2層上面で検出。12世紀代から再び集住化が進行し、鎌倉時代には五十里川沿いの①b・c区に集落の中心が移る。集落の外縁は溝や柵列によって方形に囲まれ、さらに、集落内に「L」字状の溝で囲まれた地区(口絵)を形成する。この時期の方位は、平安時代のものとは大きく異なり、北西に傾いてくる。柱穴は干を越え、現在整理中であるが、多くの掘立柱建物が建っていたと想定される。いずれの柱穴も径30cm内外、深さ20～50cm前後となっており、大規模な建物はなかったようである。この他、井戸跡、墓、性格不明の円形土坑などが認められる。この時期の五十里川は淀んだ状態となっており、岸边からは卒塔婆と思われる先端に刻みのある板材や下駄などの木製品、獣骨類、中国製磁器などが多量に出土している。

近世以降 III 1層上面で検出。杭を伴う溝や井戸が見つかり、再び耕地化したと思われる。

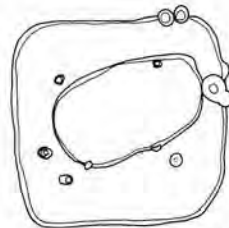
調査は開始されたばかりであり、今後、調査を進めていく中で、窪河原遺跡・更埴条里遺跡との関係、屋代遺跡群の特徴について考えていきたい。



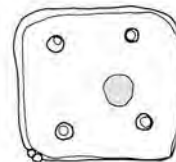
9世紀



10～11世紀



12世紀



13～14世紀

第50図 竪穴住居址・竪穴状遺構の変遷 (1:200)



第51図 中世の五十里川と卒塔婆？出土状況

(12) 栗林遺跡

所在地：中野市大字栗林字山下783, 字松原638,
字堤下525番地ほか

調査担当者：岡村秀雄 赤塩 仁
奥原 聡 北島英巳
越 修一 林 正則
渡辺敏泰 中島庄一
斎藤久美 藤沢高広
賛田 明 阿藤慎治

調査期間：平成3年4月8日～同年12月28日

調査面積：23,850m²（総計50,000m²）

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防および後背湿地

時代と時期：縄文時代中・後期, 弥生時代中・後期, 古墳時代前期, 平安時代, 中・近世

遺跡の特徴：縄文時代後期の居住域・食物加工址, 弥生時代中期～古墳時代前期の居住域, 平安時代の居住域, 中世以降の生産域

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴住 居 跡	土 坑	溝	集石	土器集中	そ の 他
縄 文	4	45		22		屋外埋甕2
弥 生	4	3	2		1	円形周溝1
古 墳	3					
平 安	6		1		3	円形周溝1
中 世	1	29 (井戸2)	13			ビット多数 畑跡状遺構1 畦畔状遺構4 舟着き場状遺構1
近 世						
不 明		ビット多数				板囲い遺構1

主な検出遺物

土 器：縄文中期・後期土器, 弥生中
期・後期土器, 土師器, 須恵
器, 中・近世陶磁器
石 器：石鏃, 石錐, 搔器, 石匙, 打
製石斧, 磨製石斧, 敲石, 凹
石, 磨石・特殊磨石, 石皿,
石錘, 砥石, 多孔石

土製品：土偶, 小形土器, 土製円盤, 耳栓, 土錘, 紡錘車

石製品：石棒, 丸石, 棒状石製品, 抉状耳飾り, 細形管玉, ガラス小玉, 砥石, 石鉢

その他：骨片, クルミ, トチ, 葉, 木片, 建築部材, 銭貨, 釘

1 栗林遺跡調査の概略

栗林遺跡は千曲川を北および北西に望む旧河床右岸の自然堤防（現在では河岸段丘化している）上に立地する。遺跡発見の端緒は古く、昭和6年（1931）神田五六氏が瓦原料粘土採取場で採取された土器に始まり、藤森栄一氏による信濃の弥生式土器として型式設定されるにおよんで、その名が栗林式土器とともに周知されるようになった（1936年）。本格的な発掘調査が実施されたのは昭和23年（1948）で該期の住居跡2軒などが報告されている（坪井清足『下高井』1953）。以降現在まで8次におよぶ発掘調査がおもに中野市教育委員会によって実施されてきた。昭和35年（1960）には県史跡として遺跡の中心と思われる自然堤防上の一帯（北原地籍31,000m²）が指定をうけ、中部高地における弥生文化解明の重要な遺跡として認識され現在に至っている。しかしながら現在までの発掘調査が小規模であったことなどから、遺跡それ自体の評価については不明な点が多く、さらに栗林式土器自体の良好な資料の集積が今までで少なかったことなどによる混乱なども課題として残ったままといえよう。

中野市遺跡詳細分布図（中野市教育委員会1985）によれば、遺跡範囲は県史跡指定範囲を中心に北東方向に長さ1.5km, 面積にして570,000m²ほどの広範囲におよぶ。周辺遺跡としては南に長岡丘陵斜面台地上の安源寺遺跡（先土器～中世）、旧千曲川対岸の自然堤防上に南大原遺

跡（縄文前期）などがある。今回の調査対象区域は、長野県教育委員会による試掘調査結果から遺跡の範囲がさらに北に300mほど延びることとなり、長さ約1.3km、面積50,000㎡、県史跡範囲の南東側などがそれにあたることとなった（第52図）。調査区が広範囲にわたるため調査にあたっては調査区全域の立地条件を考慮して、県史跡範囲の自然堤防上の南側低地部分（③区）、県史跡範囲の自然堤防上に続く段丘部分（②区）、段丘部の切れる今回新たに追加された部分（①区）、以上の3区分を実施した。以下各地区の概要を記す。

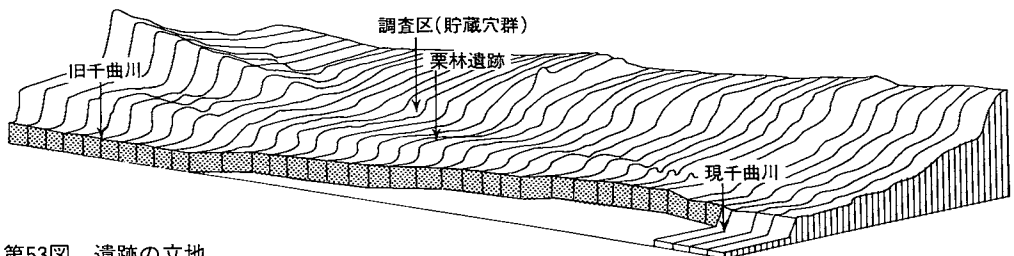
①区は長丘丘陵斜面の繰り返された地滑りによりテラス状になっている一帯である。丘陵から供給される崩落土は調査時に3メートル以上に及ぶことが判明し、弥生時代以前の遺構が存在していたかどうかは現在では確認できないと判断した。部分的に地表下1メートル以上まで掘り下げ面調査を実施した

が遺構遺物ともに皆無であった。②区は旧千曲川を見下ろす段丘上にある。栗林期の集落の広がりを確認することが調査の重要なポイントであったが、弥生時代中期の住居跡は検出されなかった。今年度の調査は2地点に分かれ、ひとつは字松原地籍の1,000㎡程度と狭いもので、弥生時代中期の土坑3基、同後期住居跡4軒、古墳時代前期住居跡3軒、平安時代の住居跡3軒、中世住居跡1軒などの他に弥生時代の溝跡が検出され、断絶を持つものの古くから生活が営まれていたことが理解できた。もうひとつは段丘の切れる北端、および同崖下あたり、崖下の地点からは拳大の礫を敷詰めた南北6m東西4mの石敷きの遺構が検出された。調査時の所見からは近世・近代における河川の利用施設（船着き場）が推測された。

③区は西の自然堤防帯と東の段丘・同斜面に挟まれた低地部を含む一帯で、字堤下・字清水尻とよばれ、以前から弥生時代の生産域の可能性が指摘されてきたところである。弥生時代の水田跡、集落跡が検出されることが推測され、調査の重要な課題であった。結果は弥生時代の遺物が部分的に散見するに留まり、プラントオパールなどによる水田跡を積極的に肯定する資



第52図 地形と調査区



第53図 遺跡の立地

料は得られず、縄文時代の遺構と遺物が大量に検出されるといった結果となった。特筆すべきは地表下2～3mで検出された縄文時代後期の貯蔵穴群で、県内では初例となるだけでなく、全国的にも貴重な資料となった。さらに全容は後の耕作などにより攪乱を受け知ることができないものの同時期に存在したと考えられる敷石住居跡が段丘斜面上に確認され、集石も検出された。現段階では調査が継続中であるために遺構の同時性などについて十分な検討がなされていないが、遺構のセット関係は該期における集落のあり方を考えるうえで解明すべき大きな課題となった。

2 遺跡の立地

栗林遺跡は千曲川右岸に連続する浸食面（栗林面）上に位置する。南東部には更新世の浸食面である高丘・長丘丘陵が続き、両者は明確な段丘崖をもって区分される。

栗林面は旧河床体積物で構成された段丘化しつつある面で、谷底との比高は下流側程高く、地表面は上流に向かってゆるやかに傾斜している。これは恐らく地盤運動の結果である。

2区から3区にかけては、長丘丘陵から供給された土砂が小扇状地を形成し、地表面化に厚さ1メートル前後の砂礫層を堆積する。礫層中には弥生中期～古墳期の遺構が包含されている。3区は西側の自然堤防帯と東側の段丘崖に挟まれた低湿地帯から段丘斜面上にかけての範囲で、表層は9世紀以後の新しい粘質土で構成されている。下部には幅40メートル前後の縄文後期の谷が埋没しており、谷底から段丘斜面上にかけては縄文人の生活の場となっていた。1区は山腹崩落によって栗林面が失われており、現在に至るまで幾度も地滑りや崩落を繰り返している場所である。

3 主な遺構と遺物

(1) 縄文時代後期の土坑（貯蔵穴）

今回の調査成果を代表するものとして、多量の炭化種子などが検出された縄文時代後期の貯蔵穴群があげられる。未整理の段階であるが、今年度の調査所見をもとに以下概略を記す。

前述した遺跡調査の経緯から当地区は土層観察用トレンチを設け、プラントオパール分析などから水田土壌と考えられる層の確定を行った。結果、出土土器などから考えて古くとも平安時代以降に形成されたと判断される地表下約1mにある4c1層までが水田土壌の可能性があると判明した。同時に地表下2mほどでおもに卵大礫を含んだ砂礫層（7層）中に縄文時代後期前半（堀ノ内式期主体）の土器片が多量に採取された。東側斜面上に同時期と判断される敷石住居跡が3軒、岬状に張り出したテスラ上に1軒の住居跡が検出されるなど、旧地形が徐々に形を持って現れてくるにしたがって、埋没した旧段丘下においてはこの7層が厚さ20～40cmで全域を覆っていることが明らかとなった。この礫層を剥いだ面が遺構検出面である（第56図）。

検出面は部分的に浸食による凹凸をもちながらも西に向かって緩やかに傾斜し、最低部付近が砂もしくは砂礫層（被覆する7層と別）であったほかは浅黄色シルト質粘土層（8層）である。検出はこの面に、7層および黄灰～黒褐色粘質土の落ち込みが認められるのが一般であった。止水のための矢板を調査区側縁に設置していたため東斜面からの湧水が目立ったが、立地環境からみて遺構が利用された当時は一帯が水をかなり含んでいた土地であったことは想像に

難しくない。調査中も土が乾燥するといったとはなかった。検出された遺構はおもに土坑と拳大～人頭大礫の集まった「集石」(第54図)である。その分布は(第56図)を参照されたい。

土坑の平面形状は概して1.5～2mの円形プランを示す。断面形状は深さにより異なるようで、底から開口部に向かってやや開き気味の桶状を呈するものが深いものに多く見られ、浅いものは立ち上がりが緩やかなカーブを描くもので占められる傾向がある。部分的には立ち上がりがややオーバーハングするものもあったが、どちらとも明らかに袋状を示すものはなかった。深さは120cm前後のものが数基認められたほか、70～80cm・30cm前後のものがほぼ均等に存在する状況であった。

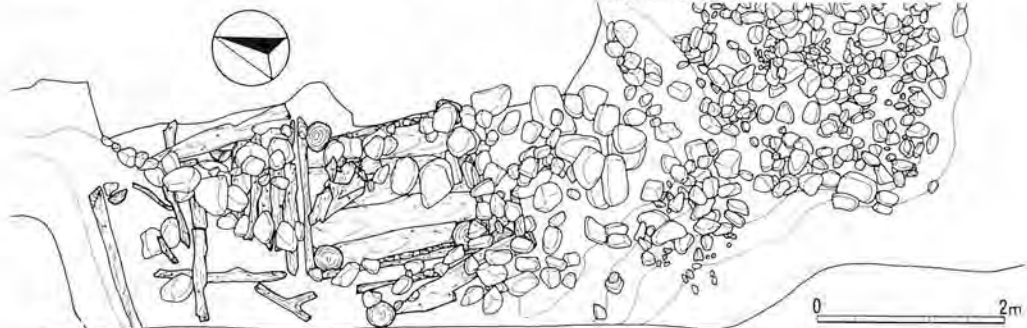
土坑の覆土および埋没状況は被覆する7層が遺構内に多く、深く流れ込んでいるもの・上面に浅く溜ったもの・まったく見られないものの3者に大きく分別でき、土坑本体の覆土は埋め戻し状況などが考えられるものもあるが、概ね黄灰～黒褐色粘質土で全体に均一であった。

遺物出土状況は人頭大礫が多いもの・土器片(堀之内式期)を多量に含むもの・ほとんど遺物が認められないものなど明らかな差異があり、人頭大礫が多いものについては底の浅い土坑に特徴的にみられた。土坑の性格を確証づける多くの炭化種子(クルミ)の出土は、底の深いものに認められる傾向があり、浅いものからはほとんど出土をみない。炭化種子は現在解っているところではクルミのみで、「ドングリ」などは確認されていない。出土位置は底部からのものが多く、一面に広がっているものもある。このほか覆土中には木片・葉・樹皮が混じり、薄い面を持って認められるなどが観察できる。貯蔵方法の復元が期待される場所である。石器が出土する例も少なくなく打製石斧・磨石・石皿などの他に、石棒も含まれている。これらは廃棄によるものが多く含まれていることは確かで、遺物は底から浮いた状態のものが多いことが観察された。

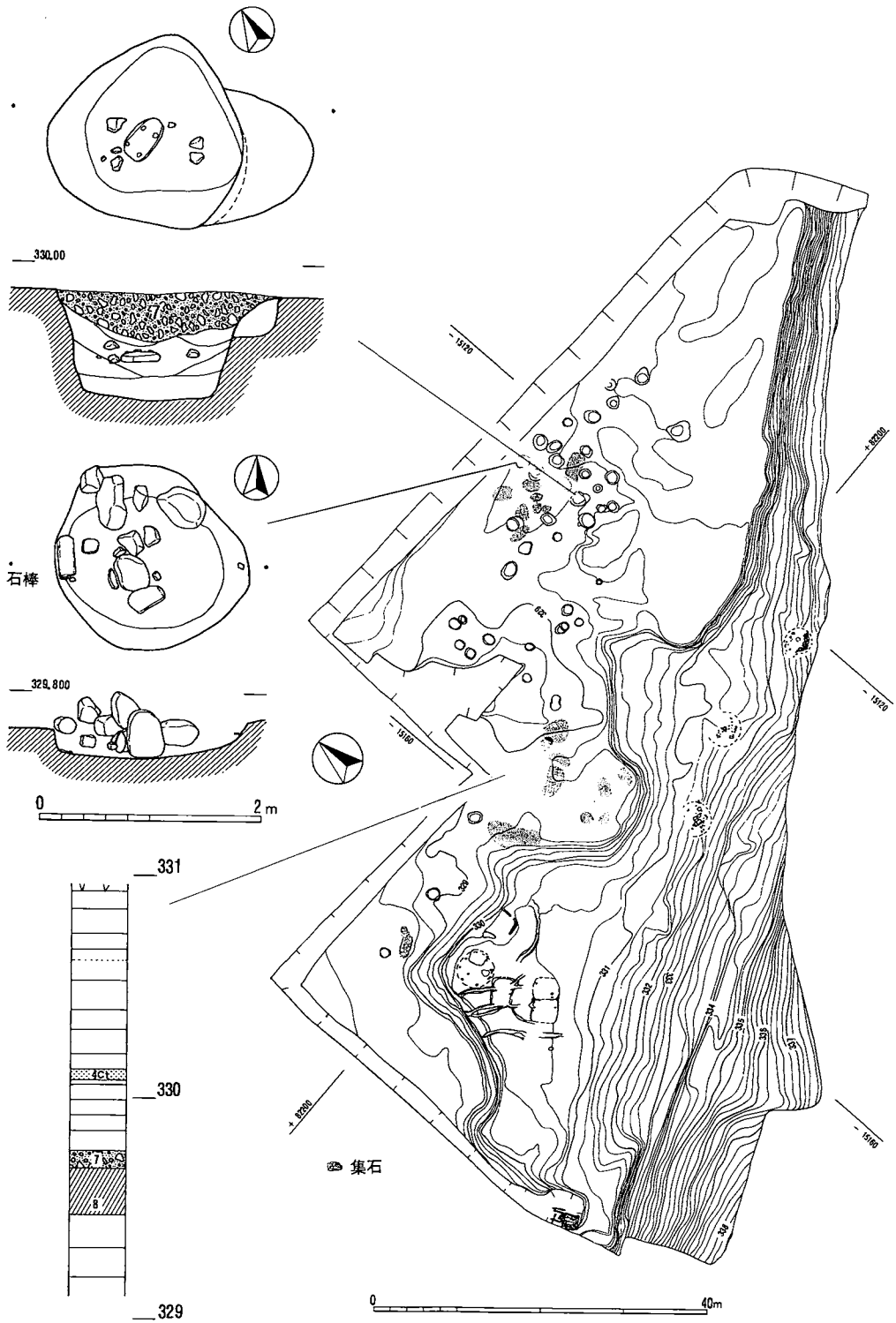
以上の所見からみて、遺構は縄文時代後期前半の、大枠でみれば貯蔵穴としての機能が想定されよう。しかしながら今後細かな分析の中で、各所見に認められるような差異が「貯蔵する」といった機能のなかでどのように位置付けていくのか、



第54図 3号集石



第55図 板囲い遺構



第56図 ③区遺構配置図 (1 : 800)

またすべてが「貯蔵する」機能を有するのか、遺構の同時性はどのようなかを整理していく必要がある。なお、土坑の覆土については水洗選別を行う予定で土を採取した。

この他、土坑との関連が考えられる特異な遺構として不明瞭な点が多々あるが木製の構築物(第55図)については触れておきたい。遺構は調査区南西端にあり、配水・土層観察用トレンチにかかった状態で検出された。このため遺構の東側は部分的に破壊されている。また、この地点は古くから「下井戸」と呼ばれる湧水地で、現在でも湧水を利用した井戸が使用されている。調査中も矢板による止水を行っていたにもかかわらず東斜面からの出水は少なくなかった。埋設していた旧地形からみれば、段丘の狭く窪んだ場所に遺構が作られたようで、地表から約2.3mの位置にある。土層は上層2m付近まで後世の攪乱・埋め戻しがあり堆積状況は良いとはいえない。遺構付近で部分的に縄文時代後期前半の土器片のほか、土師器片も採取されたが、調査区際ということもあって明瞭に土層の堆積状況は把握できなかった。

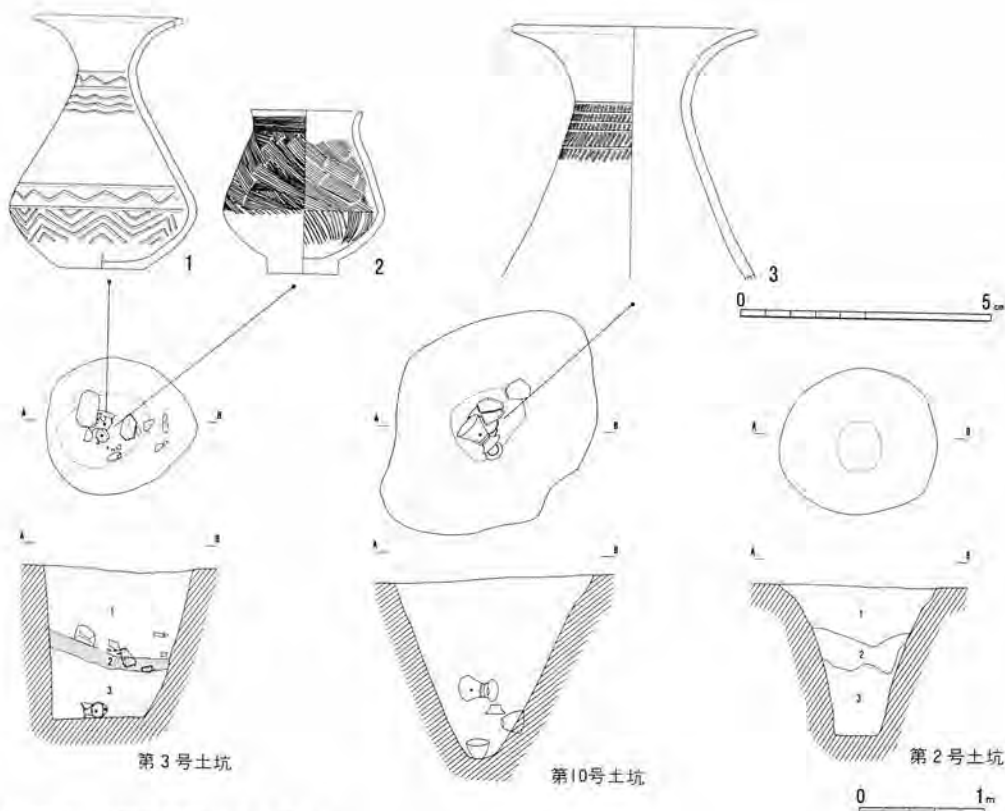
遺構は検出された範囲で南北5m、東西2mの長方形を呈す。西側は矢板際までの調査であり、さらに広がる可能性も残っている。直径約25cmの柱状に立てた丸木が6本、それより一回り小振りの丸木割材を立てたものが2本認められ、このうち4本が2×1.6mの長方形を画して配置され、厚さ10cm以上の割材による底板を4枚敷きつめ、丸木の外側に底板が載るように側板を配し箱状に組んであった。組み立てには釘は使用されておらず、ほぞ穴なども認められてない、非常に簡便に作られている。深さは30cmほどで、丸木・側板の上端は欠損した状況は認め難く、検出した状態のさらに上に構築が行われていた可能性は低い。丸木の長さは80～60cmで、底より20～30cm地中に埋まっていた。出土遺物は少ないが、縄文時代後期前半の浅鉢がほぼ完形で底板に接して1点出土し、炭化したトチの皮が1点、クルミの殻数点が材に付着して発見されている。さらに、底板の下からは石皿が出土した。遺構の南側斜面部には礫が重層的に認められ、特に遺構付近および遺構内に巨礫が集中する傾向が看取される。これが人工的なものなのか納得できる根拠は現段階では提示できないが、遺構の南側に巨礫が組んであった可能性も考えられなくない。

材についてはすべて取り上げ、現在、使用痕観察・鑑定・分析の途についたところである。資料的な分析はこれからであるが、調査時の所見と調査区における周囲の遺構の状況を考慮すれば、貯蔵穴と関連して縄文時代における堅果類の「水さらし場」として考えられる可能性があるので敢えて提示した。類例としてはトチの実加工跡が発見された埼玉県赤山陣屋遺跡の「板囲い遺構」(金箱文夫「川口市赤山陣屋遺跡西側低湿地検出のトチノミ加工場跡」『考古学ジャーナル』1990-No.325)があげられそうである。また、遺構の西側は来年度継続調査が行われる。今回の成果を検証する意味でもその結果を待つところが大きい。

(2) 弥生時代中期の主な遺構と遺物

今回の調査では弥生中期の遺構や遺物は主に②区で検出され、③区では僅かな土器片を検出したに留まる。②区で検出された弥生時代中期の遺構は井戸状土坑3、のみであり、全体として遺構の密度は低い。

井戸状土坑と仮称した土坑は円形ないし楕円形の平面形とやや摺鉢状の断面形をもつ土坑で



第57図 井戸状遺構とその遺物

ある。3号土坑では覆土の中程、第2層が地山とほとんど変わらない褐色を呈していた。2層の上面には大型の土器片や大形の礫が堆積している。また、土坑底には図示した1、2の土器が横倒した状態で並んで発見されている。2号、10号土坑では大形の土器片や完形に近い土器が発見されている。10号土坑では底に壺形土器の下半部が残されていた。管見にふれた類例は栗林遺跡第5次調査の一例のみである。その性格は不明である。今後の類例の増加を待ちたい。

1は3号土坑出土。刷毛整形を施した後、磨きが行われ、やや太めの沈線で文様が施文される。赤色塗彩される。2は3号土坑出土。内外面に刷毛整形痕が残る。頸部も横方向に刷毛整形。3は10号土坑出土。頸部に縄文を施文した後に、平行沈線文が施文される。

今回の調査では弥生時代中期の集落構造の一端を明らかにすることができると考えていたが、遺跡の中心部分から距離をおいて井戸状遺構を検出したにとどまる。今回の知見は弥生中期の栗林遺跡の広がりや構造を考えるうえで新たな課題となろう。

(13) ^{ななせ}七瀬遺跡

所在地：中野市大字七瀬字前山928-1番地ほか、
前田2, 3-2番地ほか

調査担当者：赤塩 仁 越 修一

中島庄一 斎藤久美

調査期間：平成3年8月1日～同年12月27日

藤沢高広 藤沢袈裟一

調査面積：4,000㎡

遺跡の立地：長丘丘陵の崩落地およびそれに続く沖積地

遺跡の特徴：弥生時代中期～古墳時代初頭の集落

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	土坑	溝	焼土跡
弥生中期	2	2	1	
弥生後期	23	13	1	9
平安		2		

主な出土遺物

土器：弥生時代中期土器、弥生時代後期土器、古墳時代前期土器、ミニチュア土器、土師器

石器：磨製石鏃、太形蛤刃石斧、砥石、石庖丁

土製品：紡錘車、勾玉、人面、匙

装身具：管玉、ガラス小玉

鉄製品：鉄鏃、やりがんな、釘

木製品：鋏、杵、建築部材

その他：古銭、穀物炭化物

中野市の長丘丘陵周辺には多くの遺跡が点在している。丘陵上に七瀬双子塚古墳を始めとする古墳群、丘陵の西側には栗林、安源寺、立ヶ花などの遺跡、また丘陵に沿って南側には、大徳寺、片塩などといった遺跡が分布している。

七瀬遺跡は七瀬双子塚古墳の東側直下に位置し、遺跡の範囲は七瀬地区の全域に及ぶほどの広さを持っている。

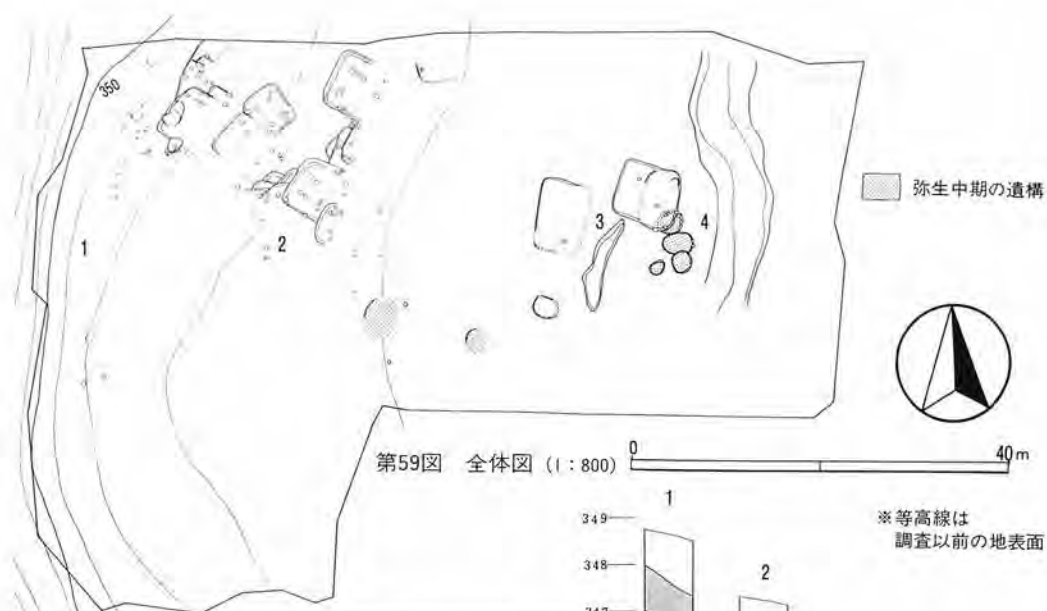
調査区は遺跡範囲の南端部で、西側に長丘丘陵の急斜面が迫り、東側には夜間瀬川によって形成された扇状地が広がっている。



第58図 地形図 (1:3,500)

検出された遺構は表のとおりである。丘陵の裾はいくつかの地滑りによる段丘状地形と谷によって形成されており、弥生時代後期の集落は、そういった微高地に営まれていたようである。また中期の遺構は、それよりもやや低い、微高地を巡るように流れる江部川寄りの範囲で検出されている。

ほとんどの住居が斜面に構築されており、斜面下方側のプランは不明確なものが多い。中期の住居跡はお



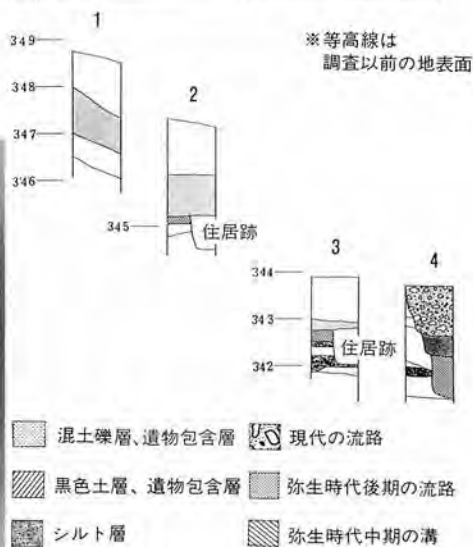
第59図 全体図 (1:800) 0 40m



↑第60図 人面土製品



第61図 土製勾玉→



およそ長楕円形を呈していたと思われる、掘りかたが浅く、柱穴も検出されていない。また、後期の住居跡は正方形あるいは長方形を呈しており、半数の住居で周溝が検出されている。焼失住居が1軒あり、萱状の炭化物が床に密着した状態で検出された。

調査当初、調査区のはほぼ全域に、礫群が広がっていることが明らかにされた。礫群からは弥生時代後期～古墳時代初頭の大量の土器片に伴って、完形の土器、四脚付ミニチュア土器を始めとするミニチュア土器、やりがんな、鉄鏃といった鉄製品、さらに土製勾玉、人面土製品などの遺物が出土した。

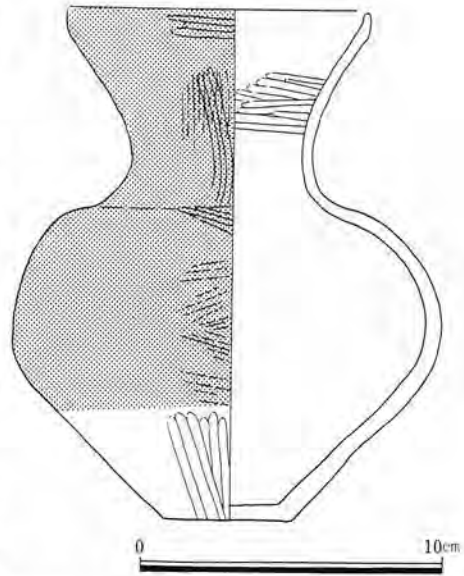
人面土製品(第60図)は顔の直径が約4cmで、首状の部分の様子から、何らかの土器に把手状に付けられていた可能性が考えられる。顔面は赤く彩色され、あごの両下に手を短く表象したような突起が見受けられる。また土製勾玉(第61図)は直径約8cm、太さは約3cmをはかる大型のものである。

礫群の中では、厚いものではないが焼土の散布が確認され、人為的な集石遺構という可能性

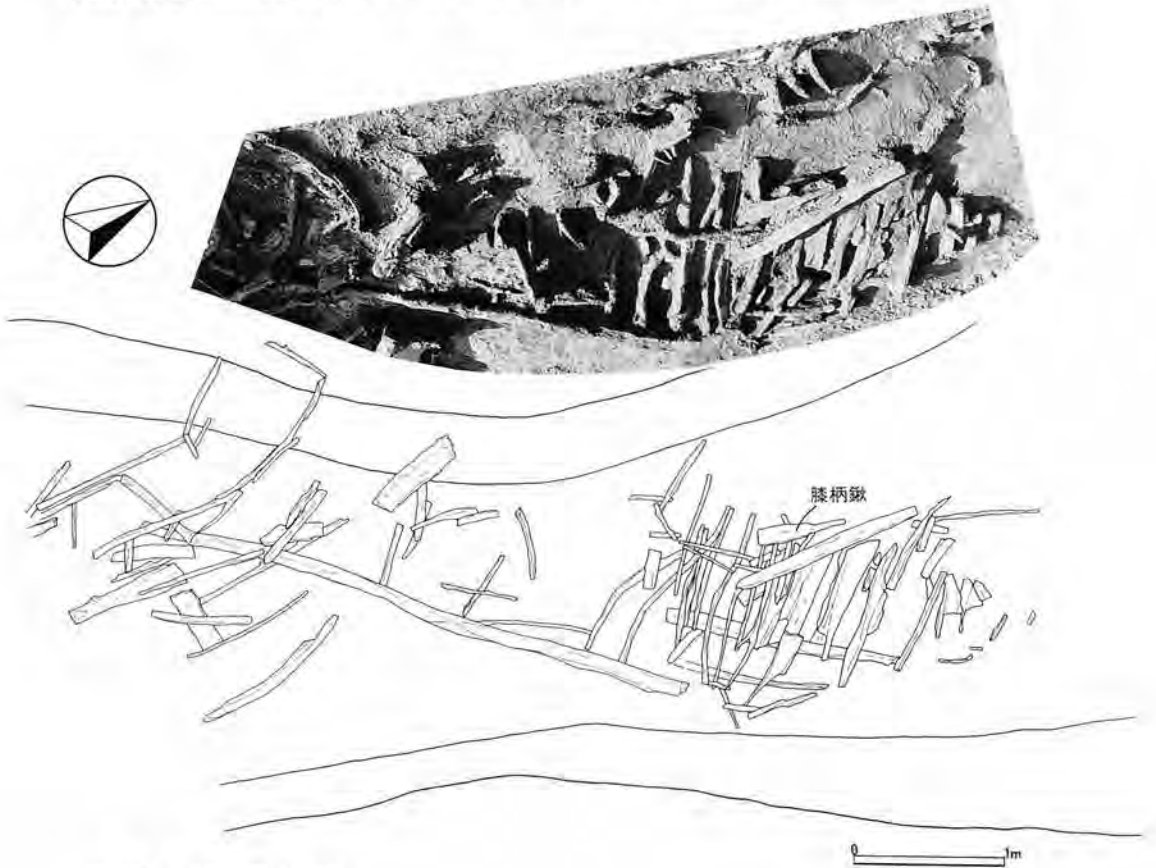
も否めないが、集石の単位やその下の掘りかたを確認できたわけではなく人工とする積極的な根拠に欠く。

また礫層は住居跡の覆土を覆うような形で堆積していることが明らかになり、住居跡とは時間差があることが分かった。性格については断定できる状況ではなく、今後の遺物整理および当該時期の集石遺構の資料の増加を待って、検討を進めて行きたい。なお調査時の所見であるが、土器の中では越後方面に系譜を持つ土器がある程度まとまって出土している。

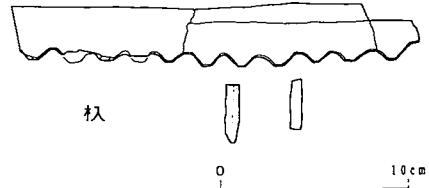
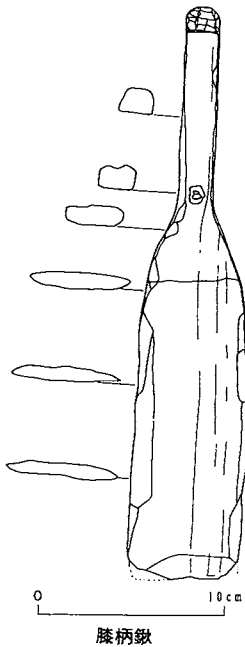
調査区の江部川に近接する範囲では、弥生時代中期栗林式土器と木製品を大量に伴う溝（流路）が検出された。また南北に伸びる溝の南側では、溝を斜めに横切るように柵状の遺構が検



第62図 礫群出土の土器



第63図 堰様遺構 (1:60)



第64図 木製品実測図

出された。太いものでは直径10cmほどの材を、何本も交互に重ねたものである。本来立っていたものであろうが、倒れた状態で検出されており、原位置を保っているかは不明である。また柵状部分の表面は薄い樹皮状のもので覆われていた痕跡が見受けられた。橋状の遺構かあるいは何らかの目的で水をせき止める効果を狙ったものだと思うのだが、今後、綿密な整理の中で検討を加えていきたい。仮に今回は堰様遺構として実測図と写真を掲載した（第63図）。

大量に出土した木製品の中には、調査時に確認できたもので、3点の膝柄鋏と1点の杓が含まれている（第64図）。しかし、今後約600点に上る遺物整理の中で、このほかにも何らかの木製品が見つかる可能性は高い。

これらの木製農耕具は、今のところ県内では最古、地理的には最北の例となろう。また、近年の善光寺平での水田跡調査の進展によってもなお、確実な中期水田が充分にはあきらかでない現状において、水稻耕作の伝播の時期・経路などの問題を考えるにあたって、重要な資料となるものである。本調査に先行して、調査区の東側4か所で試掘を行い、プラント・オパール分析を行った。それによれば、時期はあきらかでないが水田跡の存在はほぼ確実である。この水田跡の可能性が指摘される層は、隣接の中期の調査面にちかい深さに埋没している。いずれにしても、江部川以東の扇端との間は湧水に恵まれ、初期水稻耕作には適地であったと思われる。

中期の遺構（住居跡2・土坑4）は流路（溝）の山側（西側）微高地上に検出され、水田跡の予想される部分は東側にあたる。この流路は居住域と生産域を区切るとともに、そこで検出された堰様の遺構はなんらかの利水施設である可能性がある。

前述したが、七瀬遺跡では弥生時代中期～古墳時代前期の土器が大量に出土している。今後の整理により、木製品の所属する時期としての栗林式土器および弥生時代後期～古墳時代前期の土器の内容が明らかになれば、搬入土器の問題も含めて、弥生時代中期・古墳時代前期の北信の土器編年に重要な資料となるべきものであろう。

<佐久調査事務所関係>

(14) いしがみ 石神遺跡群

所在地：小諸市大字八幡字狐島805-1-B番地ほか

調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成3年4月15日～同年5月24日

木内英一

調査面積：2,500㎡

依田謙一

遺跡の立地：浅間山南麓に広がる馬背状地形の頂部

時代と時期：縄文時代前期～晩期，弥生時代中期，古墳時代前期～後期

遺跡の特徴：縄文時代中期中葉の墓域，古墳時代前期初頭の集落

主な検出遺構

遺構 時期	いしがみ 縦穴 住居跡	土坑	溝	その他
縄文		70		
古墳	3			大形土坑1
不明			3	

主な出土遺物

土器：縄文時代前期～晩期の縄文土器，古墳時代前期初頭の土師器

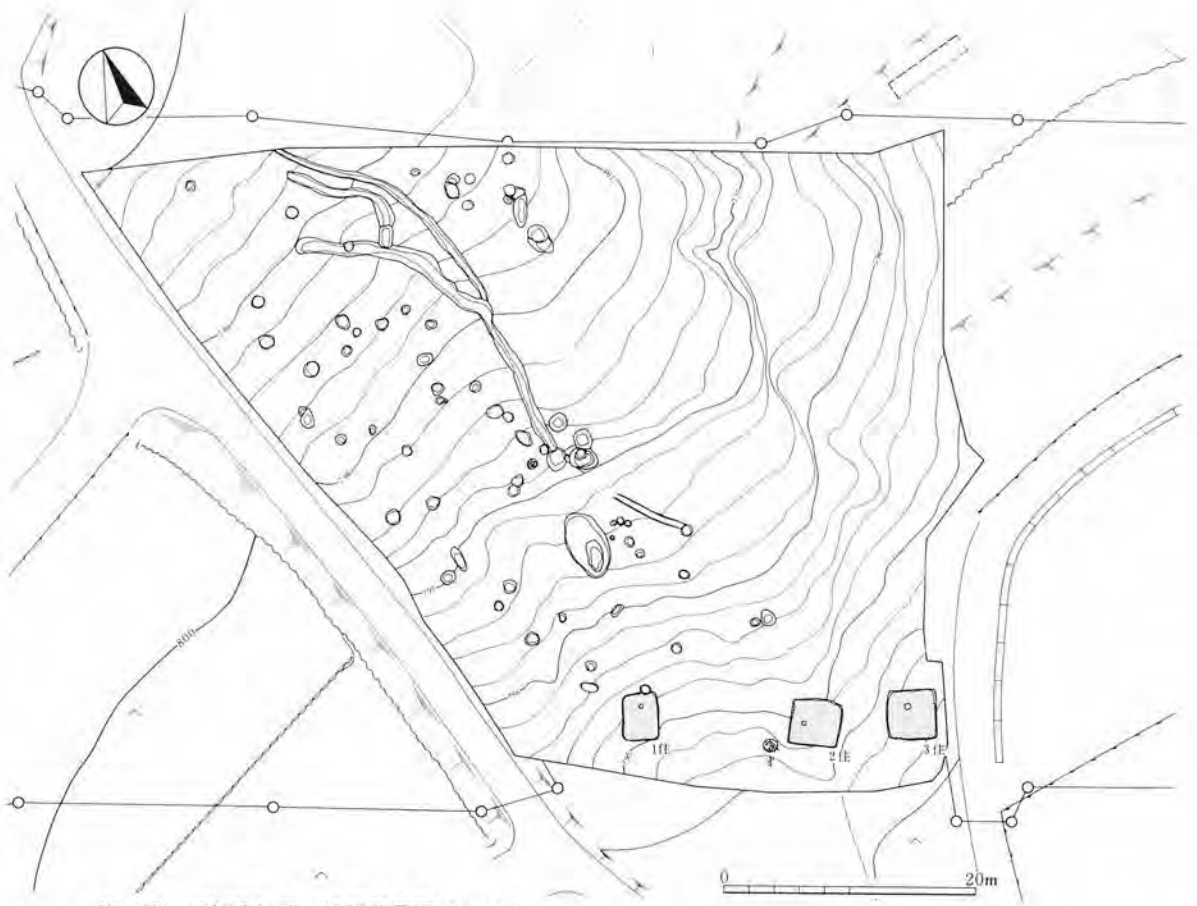
石器：石鏃，打製石斧，磨石，スクレイパー

石・土製品：石棒，紡錘車

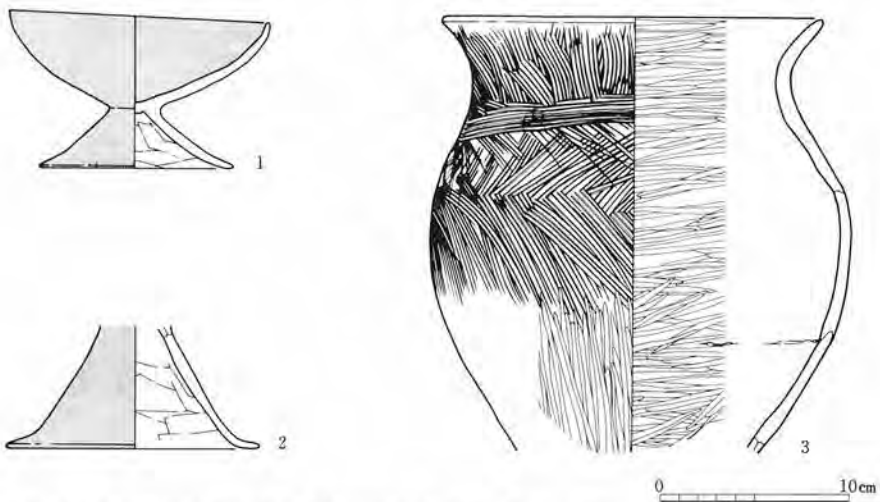
浅間山からひだ状に南行する細長い尾根に営まれた遺跡である。狭く浅い谷状地形を挟んだ複数の尾根からなる範囲を，一括して「遺跡群」として登録されている。高速道は，西端の尾根の先端部を通過することとなった。

調査の結果，尾根頂部に連なる縄文時代中期中葉を主体とした土坑群と南縁に分布する古墳時代前期初頭の住居跡3軒を検出した。土坑は，径1mほどの円形を呈するものが多く，底面に大形礫が1・2点遺存している場合も儘みられた。墓壙的役割を果たしたものが多いためであろう。古墳時代前期初頭の集落は，標高800m内外まで上がった地点では稀な存在であるが，付近の調査によっても当該期の集落がわずかながら確認されている。今のところこれに前後する時期のものが見当たらないことから，古墳時代に入って間もなくの頃，付近一帯に開発の目が向けられたらしく，また，これに失敗したか短期の内に終焉を迎えることになったらしい。

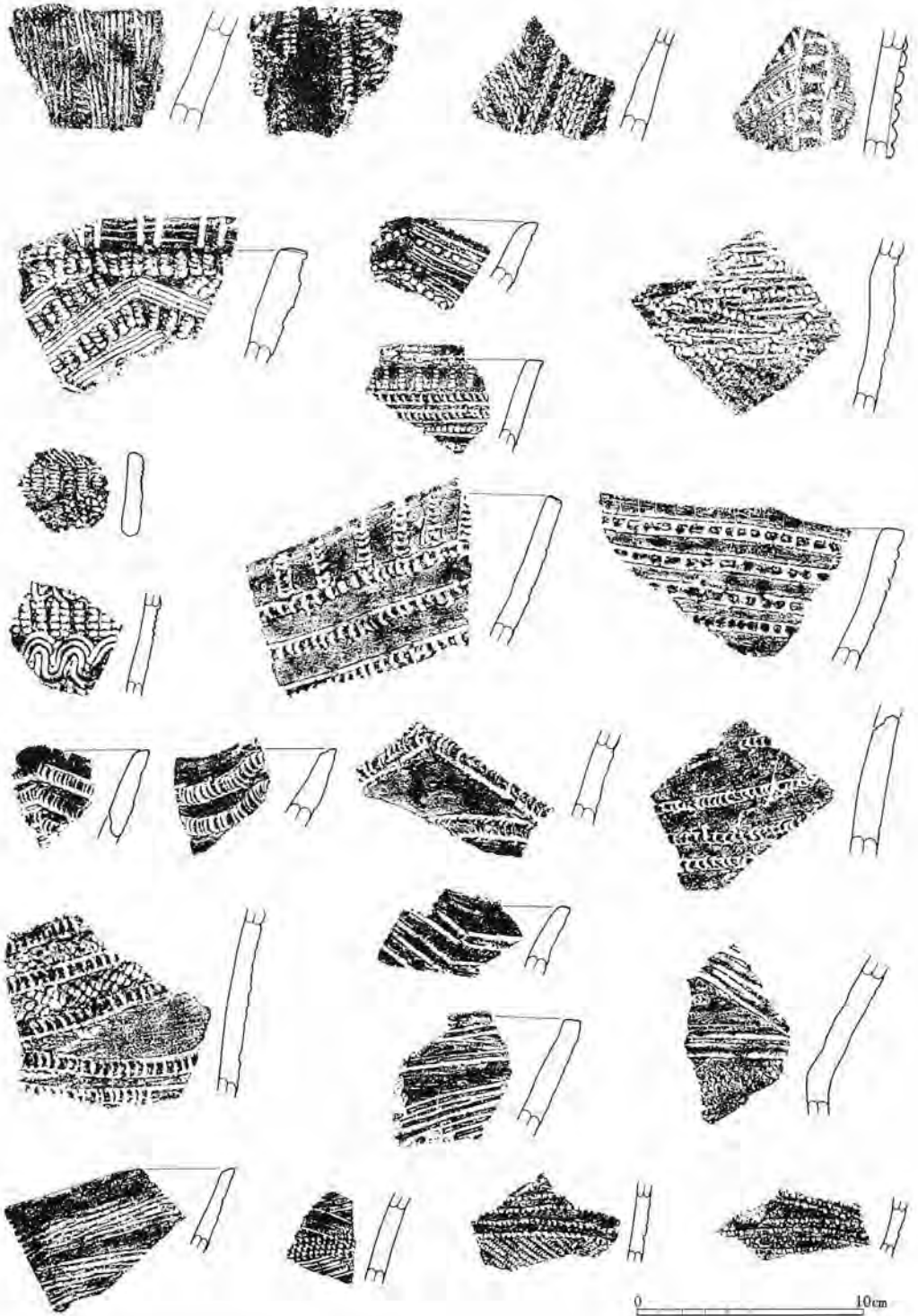
なお，調査区の外，主に谷を挟んだ西側の尾根上から多量の遺物を表採し，その中に東信地方では少なかった有尾式土器が数多く含まれていた。調査に直接かかわるものではないものの，貴重な資料であるためここで紹介しておこう（第67図）。最上段左2片を除いた資料が，いわゆる「有尾式土器」に該当するものである。これらには，施文手法が同じでも胎土に繊維を含むものとそうでないものがあるほか，含んでいてもそれが微量に過ぎないものも少なからず認められた。近年，同型式の資料が増加しつつある群馬県では，繊維を含むものが数多く報告されているが，一方，標識遺跡である飯山市有尾遺跡では繊維を含まないことを通例としており，この違いを地域色，はたまた一型式内における微妙な時間差と認識するかが現在の大きな課題となっている。こうした中，両者の中間域に位置する本遺跡周辺で，奇しくも中間傾向にある土器群をみたことは，新たな視点を模索するうえで極めて重要な資料となることは疑う余地のないところである。



第65図 石神遺跡群の遺構配置図 (1 : 600)



第66図 石神遺跡群出土の古墳時代前期初頭の土器 (1-1号住, 2・3-2号住)



第67図 石神遺跡群調査区外の表採資料

ひがしまるやま
(15) 東丸山遺跡

所在地：小諸市大字菱平字東丸山73-1番地ほか

調査期間：平成3年5月25日～同年8月12日，同年12月11日～12月17日

調査面積：3,900㎡

調査担当者：宇賀神誠司 木内英一 依田謙一

遺跡の立地：浅間山南麓の尾根縁辺部

時代と時期：縄文時代前期～中期

遺跡の特徴：縄文時代中期中葉の集落

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	土坑	陥し穴
縄文	3	71	1

主な出土遺物

土器：縄文時代前期～中期の縄文土器

石器：石鏃，打製石斧，磨石，石皿

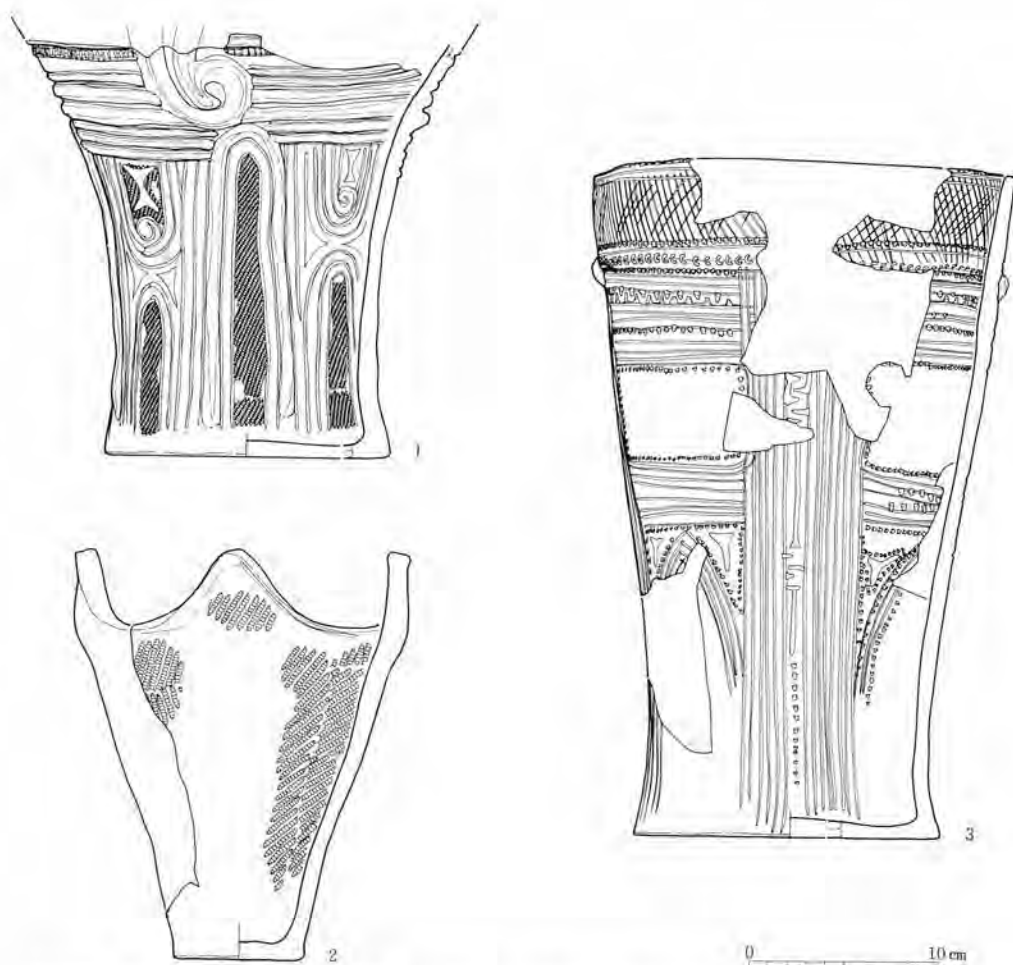
高峰山から南行する尾根の東縁部に営まれた遺跡である。東側は急崖をもって沢に面し，また西側は西丸山遺跡との間にそびえ立つ尾根状の高まりが並走しており，一見狭長な低位段丘を思わせるような地形を呈している。このもっとも奥寄りの地点を高速道が通過することとな



第68図 東丸山遺跡の遺構配置図 (1:1,000)

り、遺跡の北端部が調査の対象になった。遺物の散布状況からするなら、広範でかつ遺構密度の高い遺跡のようだが、これまで調査を受けたことはない。

調査区からは、西寄りに縄文時代中期中葉の住居跡3軒を検出し、そのすぐ南方には同期のものを主体とした径1m前後の円形土坑が群在していた。住居と土坑との関係は、調査範囲が限られることから必ずしも明確でないが、遺跡の中心部と考えられる調査対象地点の南側では縄文時代中期末葉から同後期にかけての遺物が拾えるばかりで、こうした土坑群を成立させた集落が広く南方に展開する可能性は極めて低いといえる。したがって、数軒を単位とした住居群と、その内部、ないしは近接した位置に設けられた土坑群といった小集落のある一点の姿を良好に表出しているのではないかと考えている。また、いわゆる「陥し穴」1基を検出しているが、特殊磨石が何点か出土していることから、遅くとも前期初頭には生業の場として利用され始めたことがうかがえる。



第69図 東丸山遺跡出土の縄文土器 (1-2号住, 2-3号住, 3-32号土坑)

にしまるやま
(16) 西丸山遺跡

所在地：小諸市大字菱平字西丸山236番地ほか

調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成3年5月25日～同年8月1日

木内英一

調査面積：3,900㎡

依田謙一

遺跡の立地：浅間山南麓の尾根上

時代と時期：縄文時代中期？

遺跡の特徴：縄文時代中期の生業域？

主な検出遺構

遺構 時期	土坑	溝
縄文	45	
不明		1

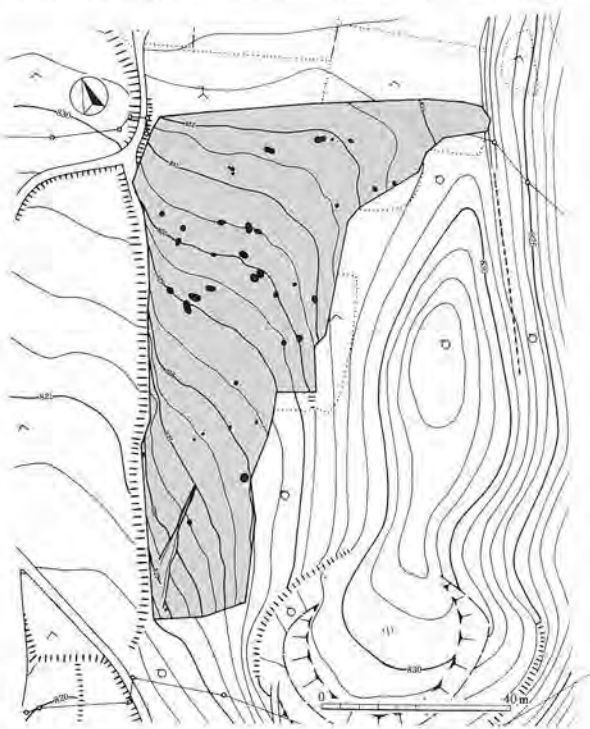
主な出土遺物

土器：縄文時代中期末葉の縄文土器

石器：打製石斧

小諸市教育委員会が「西丸山C」として登録している遺跡の北端部、わずか1,000㎡の範囲が当初の調査対象であった。しかし、遺跡が立地するこの尾根の頂部は、遺跡付近で幅400mほどをはかり、かつ起伏の少ない南面する傾斜地であることから、周知範囲の拡大、あるいは未周知遺跡の存在が考えられた。したがって、高速道にかかる尾根頂部全域に試掘トレンチを入れることから開始した。この結果、周知範囲からは遺物・遺構ともにまったく確認できなかったが、尾根東端に存在する小丘の西裾で土坑及び溝の分布が認められたため、この範囲に限り面的調査を実施することとなった。

土坑は、一部重複しているが、全体に散在しており、規模・形状にもばらつきが目立つものであった。遺物をほとんど含まず、遺構外で採集できたものも数片に限られたことから、集落に伴うものではないと考えられる。また、一般に集落遺跡で確認されるものと違って、不整形に掘り込まれたものが大方を占めていた。わずかな伴出遺物から、縄文時代中期末葉の産物である公算が大きい、何らかの生業活動に関連したものであろうか。いずれにしても、こうした集落外での活動の痕跡を確認しえたという点では、地味ながらも大きな成果を得たといえる。これらの分布状況と地形からすると、さらに北方への広がりが予想される。



第70図 西丸山遺跡の遺構配置図

(17) ^{みつごづか}三子塚遺跡群

所在地：小諸市大字平原字東丸山1650番地ほか 調査担当者：寺島俊郎 木内英一

本調査期間：平成3年9月17日～同年11月16日 依田謙一

試掘期間：平成3年12月16日～同年12月20日

遺跡の立地：浅間山南麓の台地部

調査面積：本調査8,900㎡，試掘対象面積4,800㎡，試掘面積1,600㎡（総計30,000㎡）

時代と時期：平安時代

遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

調査	時代	遺構
本調査	平安時代	竪穴住居跡 2
	不明	畑跡 1，土坑 3
試掘調査	平安時代	竪穴住居跡 5
	不明	溝 数本

主な出土遺物

土器：縄文中期末～後期土器，古墳前期土器，土師器，須恵器

石器：石鏃，スクレイパー

金属製品：釘，銭貨

本遺跡群は浅間山南麓に位置する。南麓一帯は浅間火山の火砕流（浅間第1・2軽石流）が厚く堆積し，西流する繰矢川と北川（田切り地形）に挟まれた台地全体が遺跡群となっている。この台地は幅200m～480m，長さ2.7kmに及ぶ。繰矢川の田切り地形はその中でも最大級で垂直崖が発達し，谷幅120m，比高差30mをはかる。

調査対象範囲は遺跡群東端を南北に横断し，長さ400m，幅65～75mをはかる。この付近一帯の発掘調査は今回が最初である。対象地の中央やや北西より8,900㎡を実施した。踏査の所見から遺構が希薄であろうと予想され，バックホーによって幅4mのトレンチを10m間隔で格子状に入れ，遺構が検出された場所を拡張して面調査を行った。

その結果，南東半分からは平安時代後半の竪穴住居跡2軒が検出された。2軒は近接し，南東隅にカマドが構築され，その右脇にピットがあり，カマドの対角壁近くに火床が認められるなど，住居構造や使用方法に類似点がいくつも見出すことができる。

北西半分には幅50m，深さ1.3mの谷状地形が認められ，下方には黒色の腐食層が堆積し，その上面は水性の褐色砂によって覆われ，谷に直行した方向で畑跡を検出した。畝は数度に渡る畝の立替えが認められ，北東側の下方からは上面の畝に直行した畝を検出した。耕土中には縄文中期末～後期と古墳時代前期の土器を包含し，それ以降の土器は検出されなかった。

試掘調査は，繰矢川から本調査実施地区間の住宅や作付けされている畑地を除く7,000㎡余りをその対象範囲とした。この地区は調査南東側と同様の地形を呈し，本調査の結果や踏査から遺構の可能性は希薄と予想された。調査は国道18号の北西側（4,800㎡）から，バックホーによって4m幅のトレンチ8本を路線方向沿いに10m間隔であけた。その結果全域から竪穴住居跡が5軒散在し，数本の溝が北西の河川に平行して検出された。そのため，国道18号線の南東側は同様に地形が連続することから試掘を中止し本調査の対象とした。



第71図 三子塚遺跡群全体図 (左1:1,000, 右1:4,000)

4 試掘調査遺跡

(1) 赤沼遺跡

所在地：小諸市大字平原宇赤沼270-4, 273-2番地ほか 調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成3年12月12日～同年12月19日

対象面積：11,000㎡ 試掘対象面積：5,600㎡

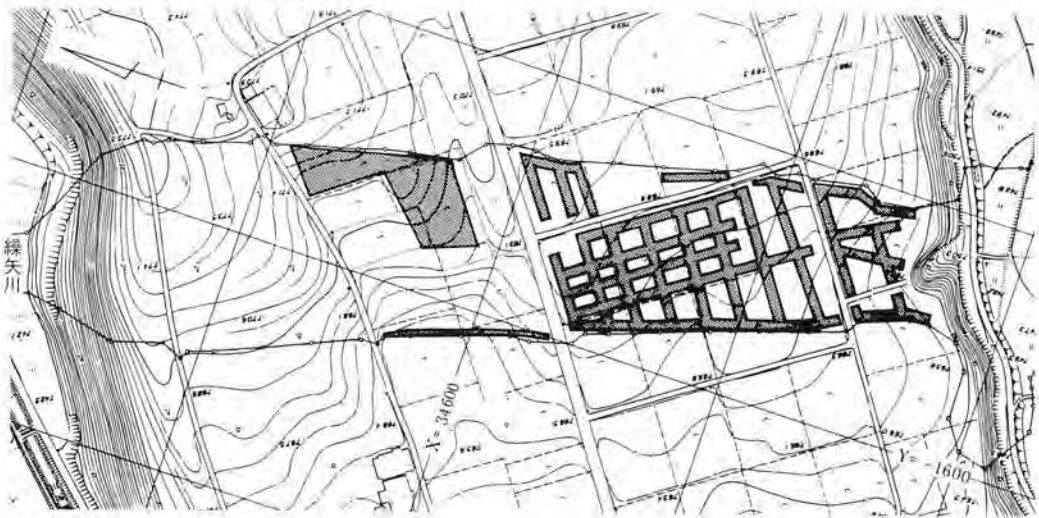
遺跡の立地：本遺跡群は浅間山南麓に位置する。前述した三子塚遺跡群の南側の緑矢川を隔て、同様の台地上に立地し、台地の西端部には三弘法山城跡が存在する。現況は、台地上には数軒の住宅があるほかはすべて高原野菜の畑作地帯となっている。

当遺跡は、今まで調査例がなく今回の試掘が初めての調査例となった。遺跡の中央には市道が、その南と北側に農道が走る。市道の南側は平坦で、北側は起伏が激しく農道との間には発達せずに終焉した谷状地形が認められる。その北側は山林となっている。今回の試掘調査の対象はこの山林部分をのぞく5,600㎡を対象とした。

調査結果

踏査では縄文時代中期末の土器片が1片採集されたのみで、遺構の存在の可能性は非常に薄いものと予想された。試掘は重機によるトレンチ調査を市道南側の平坦地形部分に重点をおいて行った。市道南側は耕作土が薄く地山の土がかなり含まれ、即地山に至ることから、削平を受けている可能性が認められ、結果的には遺構・遺物は検出されなかった。北側の谷状地形部は客土によって埋められ、下方には2層の黒色腐食土層が確認されたが、無遺物層であった。一部東側の緩斜面部分を面的に広げたがやはり遺構は検出されなかった。

以上の調査結果より人間の生活痕が認められなかったことから、面調査の必要はないと判断した。だが1片ではあるが遺物が採取できたことから、付近には希薄ではあろうが何かの遺構の可能性のあるものと思われる。



第72図 赤沼遺跡全体図 (1:3,000)

おおほしあい
(2) 大星合遺跡

所在地：小県郡東部町大字滋野字大星合2344-1番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月24日・25日

稲場 隆

対象面積：11,000㎡ 試掘面積：648㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：東信火山群の裾野地形の一部、大石沢川の形成した押し出し扇状地上に立地する。南を流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜する扇面上である。東は小諸市に接し、西側は大石川の浸食による渓谷で切られている。標高はおおむね690mを測る。

概 況

幅2mのトレンチを等高線に直交する縦断方向に8本、水平方向に1本設定し掘り下げた。調査区中央部を横断する町道滋野208号線の南側では、土器片（須恵器、縄文後期）の散布が観察されたため若干平面的な拡張を試みたが、20cm程の耕作土の下はローム層で遺構・遺物は認められなかった。調査区内の畑地では耕作土は20～50cmを測り、その直下はローム層でありその境も明瞭であることから、耕作及び畑地の整備によりかなりの削平を受けているものと考えられる。調査区の西端部は段状の水田域であり、数10cmの現水田土壌層の下は水田形成のための切盛りによる削平と盛り土が施され、削平部直下は基盤の砂礫層まで削られている。盛り土の施された部分では黒褐色土の残る箇所があるが、小礫を多く含む遺構・遺物は認められない。

調査結果

発見された遺物4片（うち表採2片）はいずれも耕作土中であり、それらの遺物は削平を受けたときに混入したか、客土によってもたらされたものと考えられる。遺跡あるいはその痕跡は認められず、遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。また、調査地内（センター杭12.89km付近）には積石塚（？）と思われる塚状の盛り上がりが見られるが、これについては保留とする。



第73図 大星合遺跡トレンチ配置図（1：3,000）

すず めん
(3) 鈴の免遺跡

所在地：小県郡東部町大字滋野字東原地2870番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月2日

稲場 隆

対象面積：800㎡ 試掘面積：740㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査とする。

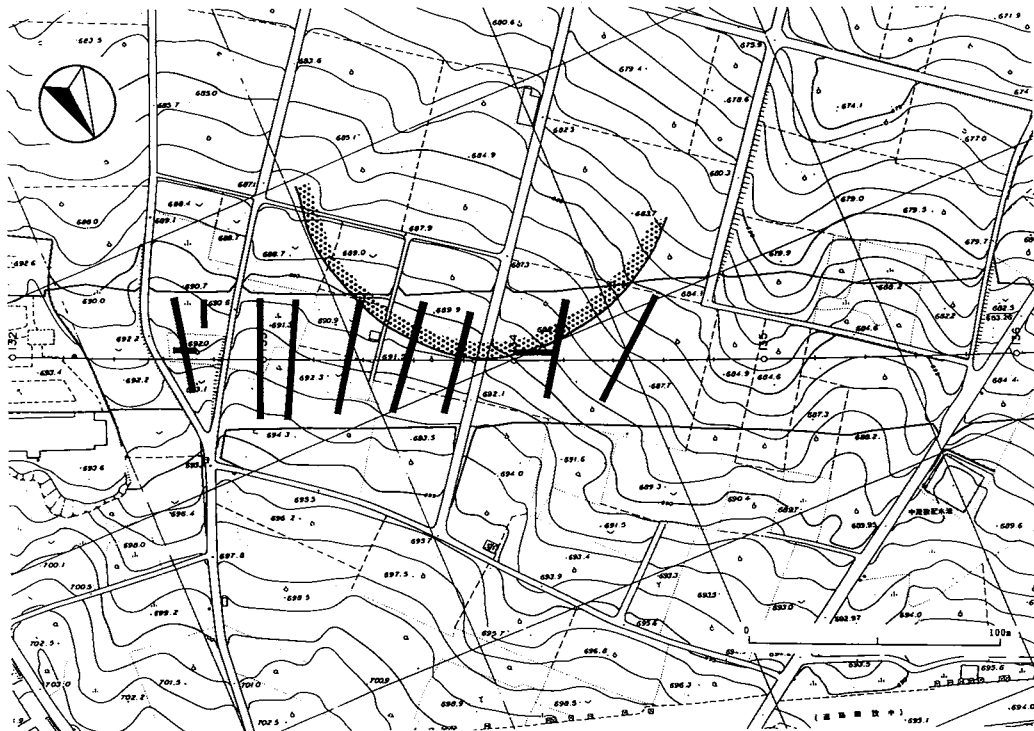
遺跡の立地：鈴の免一帯は東信火山群の裾野地形の一部、大石沢川と西沢川の形成した複合扇状地に当たり、遺跡は南を流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜する扇面の帯状台地に立地する。標高はおおむね690mを測る。

概 況

幅2mのトレンチを等高線に直交する縦断方向に8本設定し掘り下げ、谷部に関しては水平方向にトレンチの拡張を試みた。20～60cmの厚みを有する耕作土の直下はローム層で、その境界は明瞭である。ローム層の上に本来有るべきローム漸移層・黒色土（土壌化による）は認められなかった。土器片（縄文土器片）が1点検出されたが、耕作土中であり遺構に伴うものでなく、また遺構も認められなかった。

調査結果

耕作土とローム層のあり方等、土層観察の結果やローム層上面での掘り込みが確認されなかったことなどから、遺跡の存在する、あるいは残っている可能性は低いものと考えられる。



第74図 鈴の免遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)

はつかいどう
(4) 初海道遺跡

所在地：小県郡東部町大字滋野字西原地2655番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月2・3日

稲場 隆

対象面積：6,500㎡ 試掘面積：732㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査とする。

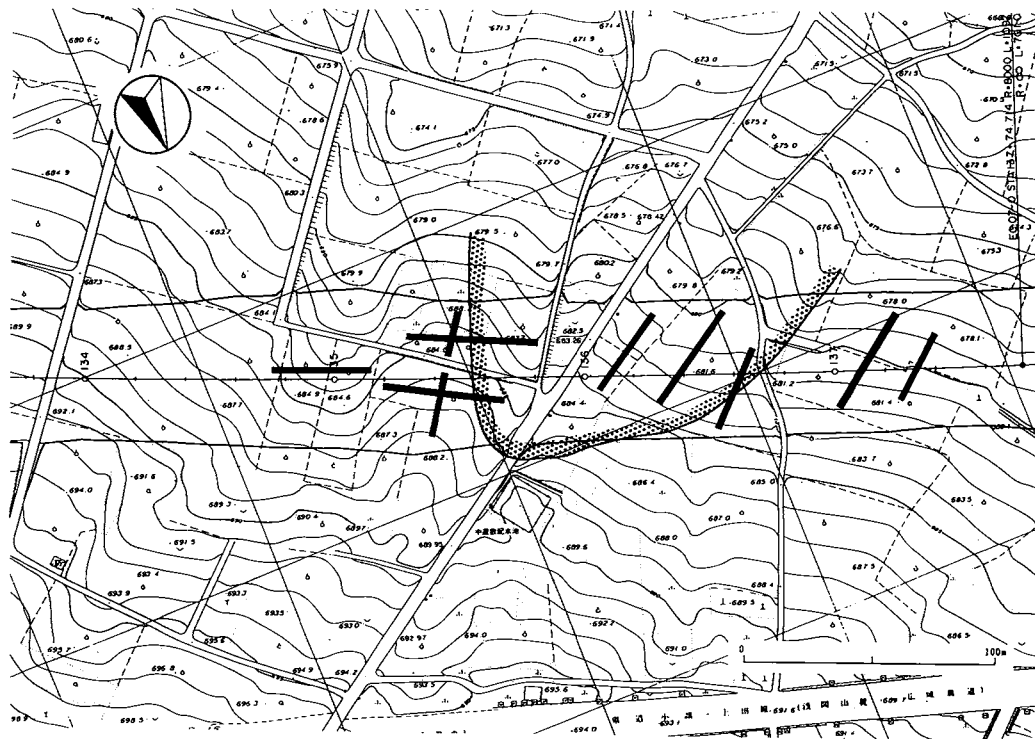
遺跡の立地：初海道一帯は、東信火山群の裾野地形の一部、大石沢川と西沢川の形成した複合扇状地に当たり、遺跡は南方（約3km）を流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜する扇面上の帯状台地に立地する。標高はおおむね685mを測る。

概 況

幅2mのトレンチを等高線に直交する形で縦断方向に6本、南側の尾根部分に2本、谷部分に1本それぞれ水平方向に設定し掘り下げた。耕作土は20~60cmで、その直下はローム層となり境は明瞭である。耕作土とローム層の間に暗褐色土の認められる地点があったが、ロームをブロック状に混入しローム層との境も明瞭であることから、耕作あるいは削平時の攪乱によって混入したものと考えられる。

調査結果

耕作土の直下がローム層まで削られていること、遺構遺物が認められないことから、遺跡の存在するあるいは残っている可能性は低いものと考えられる。



第75図 初海道遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)

(5) ^{にしはらち}西原地遺跡

(5) ^{にしはらち}西原地遺跡

調査担当者：藤原直人

所在地：小県郡東部町大字滋野字石堂24526番地ほか

稲葉 隆

調査期間：平成3年12月4～7日

対象面積：500m² 試掘面積：702m²

調査方法：重機によるトレンチ調査とする。

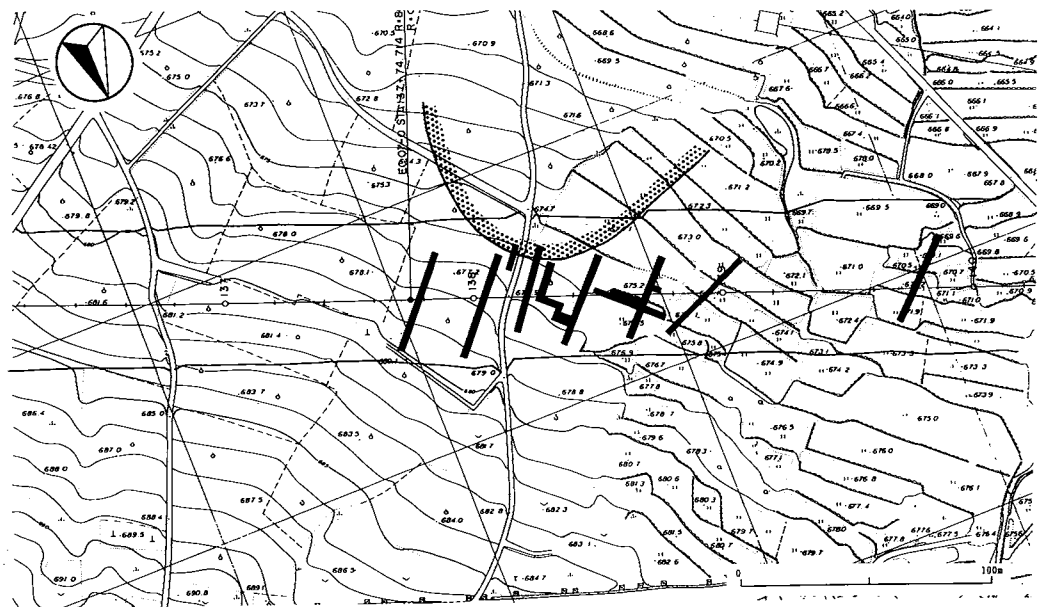
遺跡の立地：西原地一帯は、東信火山群の裾野地形の一部で、西沢川の形成した押し出し扇状地にあたる。遺跡は南を流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜する扇面上に立地する。調査地の北西部は南に流下する西沢川に接している。標高はおおむね670mを測る。

概 況

幅2mのトレンチを等高線に直交する縦断方向に7本設定し掘り下げた。一部遺構検出の可能性のある地点では拡張を試みた。ほとんどの地点では耕作土(30～50cm)の直下でローム層が検出され、削平の行われたことが伺われる。北西から3本目のトレンチからは耕作土の下に黒褐色土とローム漸移層が残り、土器片(縄文土器)が出土した。そのため平面的な拡張を試み、該層から数点の遺物を検出したが遺構は確認できなかった。また4本目のトレンチでは、摩耗した土器片が自然流路(深さ10cm程)から数点出土している。

調査結果

数点の土器の出土、土層の状況から遺構の存在する可能性がかなり高いものと予想され、予定以上の拡張を試みたが遺構は検出されなかった。



第76図 西原地遺跡トレンチ配置図(1:3,000)

(6) ^{はら}原遺跡

所在地：小県郡東部町大字滋野字利根川乙4693番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月9～11日

稲場 隆

対象面積：700m² 試掘面積：859m²

調査方法：重機によるトレンチ調査とする。

遺跡の立地：字利根川近隣は東信火山群の裾野地形の一部で、所沢川の形成する扇状地上に位置する。原遺跡の約500m南西には西沢川が南流し、その周辺（外城地区）は小規模ながら西沢川の形成する扇状地である。原遺跡から西沢川にかけては南方約3kmの所を北に流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜する扇面である。標高はおおむね665mを測る。

概況

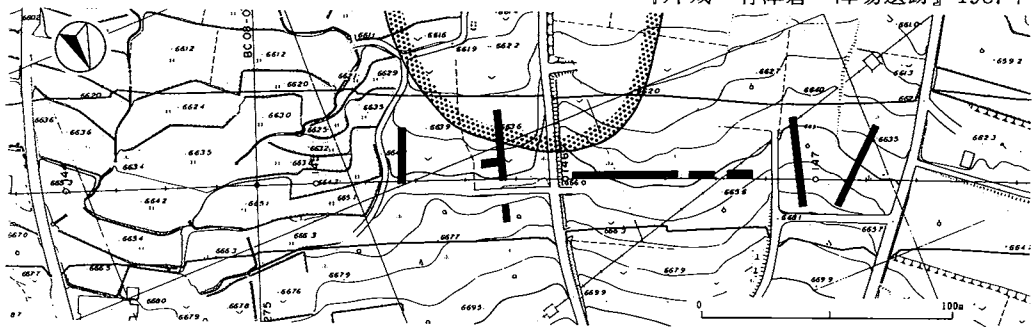
15～60cmを測る耕作土の直下はローム層で、その境は明瞭であり遺構・遺物は検出されなかった。原遺跡と西沢川の間付近は外城遺跡の北端（調査区まで及ばない）にあたるため、若干のトレンチ調査を試みたが遺構・遺物は検出されなかった。

調査結果

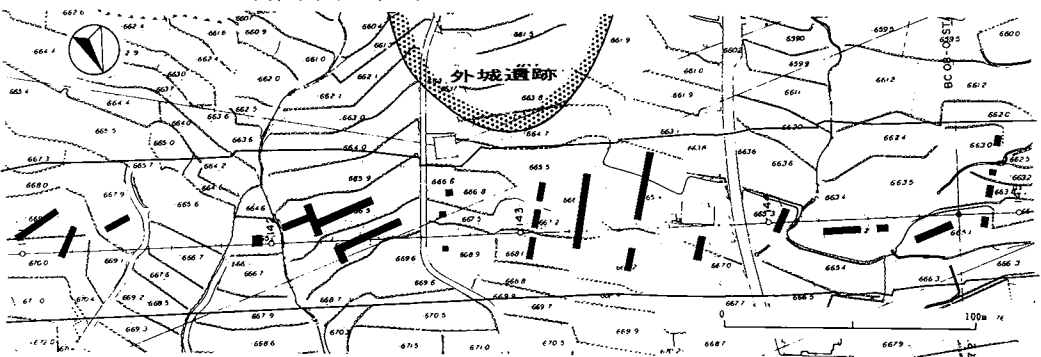
削平の状況からみて遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

参考文献：東部町教育委員会『塚穴・鞍掛・天神遺跡』1984年

『外城・有津倉・陣場遺跡』1987年



第77図 原遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)



第78図 外城遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)

(7) 鞍掛遺跡

所在地：小県郡東部町大字鞍掛字下平890番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月12日

稲場 隆

対象面積：2,500㎡ 試掘面積：266㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査とする。

遺跡の立地：鞍掛一带は東信火山群の裾野地形の一部で、所沢川の形成した扇状地の扇中央部に位置する。遺跡周辺は南方（約3km）を流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜している。標高はおおむね660mを測る。

概況

幅2mのトレンチを等高線に直交する形で縦断方向に6本設定し掘り下げた。耕作土は15～30cmで、その直下はローム層となり境は明瞭である。遺物・遺構は認められなかった。

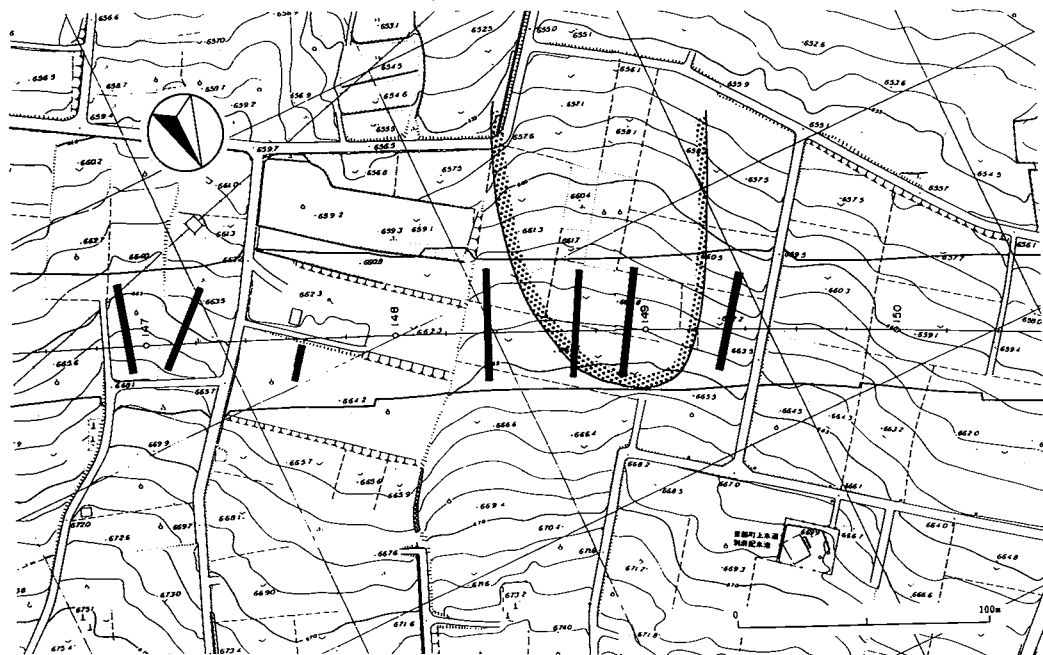
鞍掛遺跡は昭和58年、東部町教育委員会によって今回の調査地の約200m南方の地点の調査が行われ、縄文中期～平安時代にわたる資料が明らかにされている。

今回の調査でも何等かの歴史的資料が認められるものと予想されたが、遺跡範囲の北端であること、削平を受けていることなどの状況により生活の痕跡を認めることはできなかった。

調査結果

土層観察の結果、削平はほぼ全域におよび、遺跡の存在するあるいは残っている可能性は低いものと考えられる。

参考文献：東部町教育委員会『塚穴・鞍掛・天神遺跡』1984年



第79図 鞍掛遺跡トレンチ配置図 (1 : 3,000)

しもだいら
(8) 下平遺跡

所在地：小県郡東部町大字鞍掛字下平904番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月13日

稲場 隆

対象面積：15,000㎡ 試掘面積：460㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査とする。

遺跡の立地：下平一帯は東信火山群の裾野地形の一部で、所沢川の形成した扇状地の扇中央部に位置する。遺跡周辺は南（約3km）を流れる千曲川に向かって緩やかに傾斜している。標高はおおむね660mを測る。

概 況

幅2mのトレンチを等高線に直交する形で縦断方向に6本設定し掘り下げた。耕作土は15～30cmの厚さを有し、その直下はローム層である。暗褐色を耕作土とローム層の間に残す地点があるが、ロームブロックやガラス等を混入し、ローム層との境が明瞭かつ直線的であることから耕作による攪乱と考えられる。ローム層を50cm程掘り下げると人頭大の礫を主体とするローム礫層となり、さらに1.5mほど掘り下げると基盤の礫層となる。今回の調査では遺構・遺物は認められなかった。

調査結果

地山はローム層まで削平を受け、遺構・遺物が確認されなかったことなどから遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。



第80図 下平遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)

かまむらだ
(9) 釜村田遺跡

所在地：小県郡東部町大字東上田字釜村田7045-1番地ほか

調査担当者：藤原直人

調査期間：平成3年12月16・17日

稲場 隆

対象面積：15,000m² 試掘面積：931m²

調査方法：重機によるトレンチ調査。

遺跡の立地：矢立山の南西、三分川の扇状地上に位置する。三分川の上流姫子沢はV字谷を形成し、その谷の終わりには姫子沢集落が展開する。三分川扇状地はその姫子沢集落の下から始まり、そこを扇頂部として東は大星川の扇状地、南西は東金原扇状地（現在の井高周辺）までで終わる。今回の調査区は三分川扇状地の南に傾斜する扇央部、釜村田集落と姫子沢集落のほぼ中間に位置する。標高は約650mを測る。

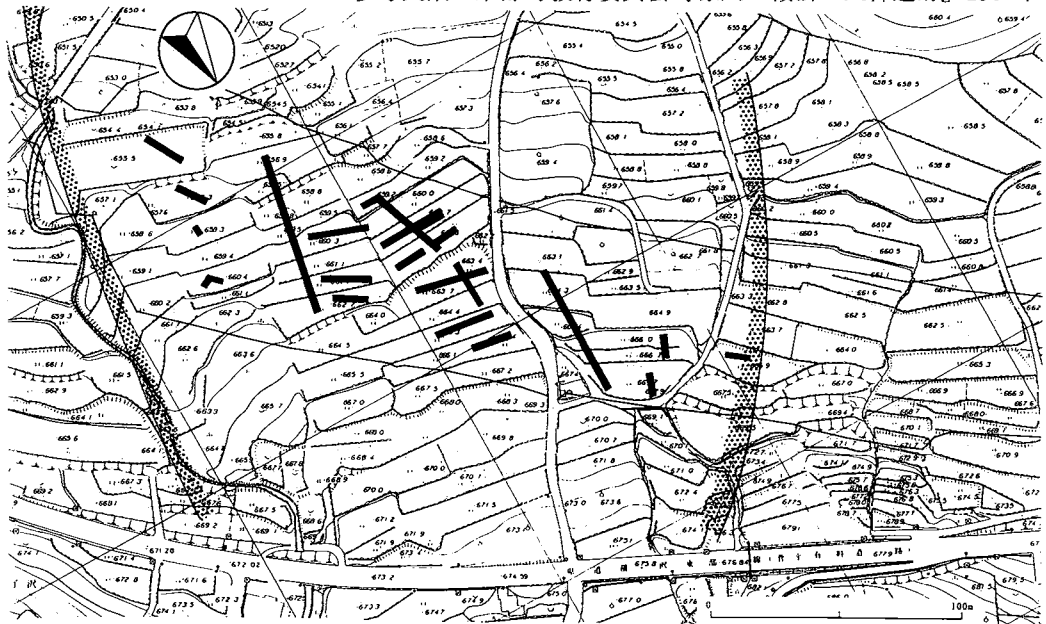
概 況

平成2年度に町教委により隣接地（町道東側）の調査が行われており、今回の調査にあつては本調査区を縦断する町道釜村田姫子沢線を中心として、幅2mのトレンチを長短含めて19本設定し掘り下げた。

調査結果

部分的ではあるが地山層が残存することや隣接地に遺跡が存在したこと、隣接地・周辺域の圃場整備事業地内から土器が採取されたことなどから、削平を受けていない箇所に関して遺跡が存在するという可能性は否定できない。

参考文献：東部町教育委員会『塚穴・鞍掛・天神遺跡』1984年



第81図 釜村田遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)

のぎょうだ
(10) 野行田遺跡

所在地：小県郡東部町和7951-1番地ほか

調査担当者：田中正治郎 吉沢信幸

調査期間：平成3年12月12日～同年12月19日

対象面積：7,000㎡ 試掘面積：268㎡

調査方法：地形に対して並行あるいは直交する方向にトレンチを設定し、遺構、包含層の有無を確認するとともに基本的な層序を把握した。

遺跡の立地：烏帽子山南麓に展開する扇状地状斜面。いわゆる火山山麓。

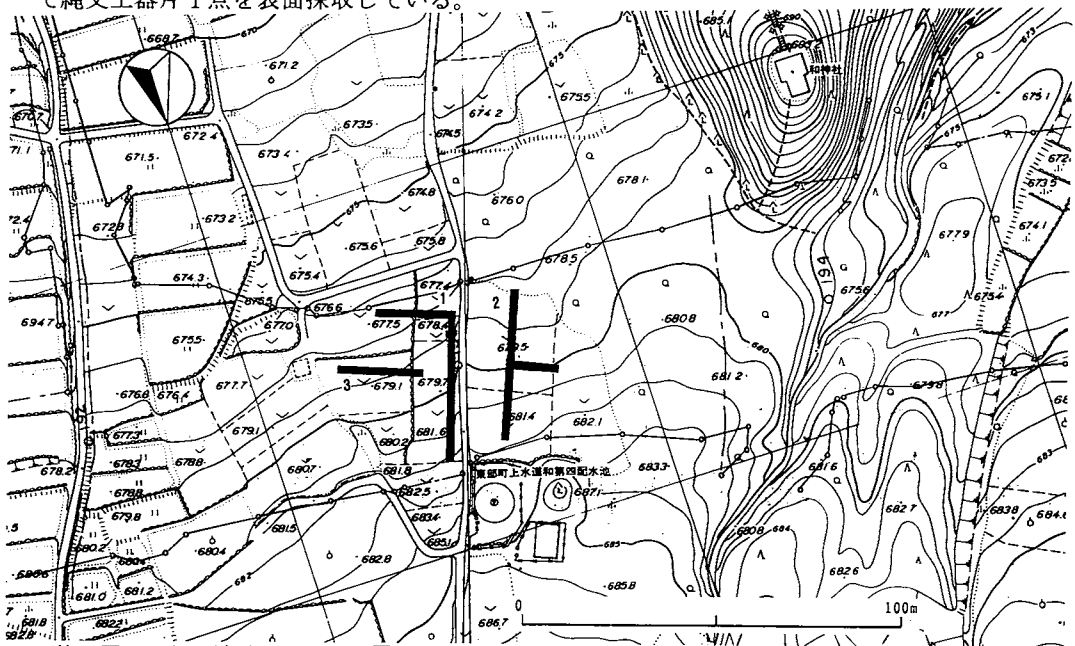
概況

遺跡西端は金原川左岸の山林。これに続く桑園から遺跡範囲となるが上物が残っているため調査不可。遺跡東側の水田は広く圃場整備の工事が行われており用地内の水田もこれとともなって一部が既に破壊されている。上物が残る果樹園（地図上では畑地）等を避けると試掘可能な地区は町道149号線の両側のみとなり、ここに3本のトレンチを設定した。層序は基本的には耕作土と巨礫混じりのローム層の2層であり、部分的に何層かに細分される場合もあるが遺構、遺物等は全く確認されなかった。

調査結果

上記結果からして町道149号線沿いの地区に遺構、包含層の存在する可能性は極めて薄いとわざるをえない。また西側の山林へ続く部分も同様と考えられる。水田の部分もその大規模な石垣状の畦畔から造成時に破壊されている可能性が高い。

本遺跡内で唯一可能性を見出すとすれば、上物の残る果樹園およびその周辺となろう。ここで縄文土器片1点を表面採取している。



第82図 野行田遺跡トレンチ配置図 (1:2,000)

なかはら
(11) 中原遺跡

所在地：小県郡東部町和2677-1番地ほか

調査担当者：田中正治郎 吉沢信幸

調査期間：平成3年12月12日～同年12月19日

対象面積：14,500㎡ 試掘面積：1,102㎡

調査方法：地形に対して並行あるいは直交する方向にトレンチを設定し、遺構、包含層の有無を確認するとともに基本的な層序を把握した。

遺跡の立地：烏帽子山南麓に展開する扇状地状斜面。いわゆる火山山麓。

概況

町道大川・田沢線西側は広く葡萄園となっており調査不可。東側はほとんど水田であるが一部畑地もある。本遺跡は畑地または果樹園から水田へと土地利用上の遷移帯となっており、このことは火山山麓上の湧水帯に立地していることに起因しているものと考えられた。調査はこれらの点を考慮し、ほとんど水田一枚ごとにトレンチを設定し状況把握につとめた。

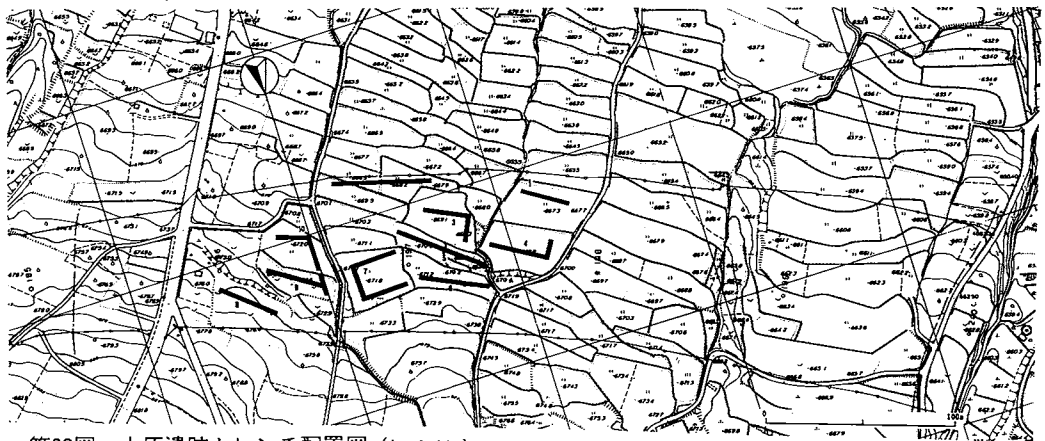
基本的には礫混じりのローム層が基盤をなし、この上に押し出し性の砂礫土が帯状に幾筋も分布し、さらに黒褐色土、耕作土が堆積しているのであるが、湧水によって湿地化しグライ化したローム層、そのうえに泥炭質土が卓越する。

遺物はこの泥炭質土層に少量ながら混入しており時期的には縄文前期から古代にわたる。明確な遺構は第5トレンチでこの土層に切り込んだ古代らしい焼土跡のみにとどまるが湿地を取り巻く畑地、果樹園には遺構の分布する可能性が大である。

町道和128号線東側の地区については当初周知の遺跡として登録されてはいなかったが遺物の散布を見、また住居跡らしい落ち込みおよび土坑を確認した。したがって遺跡範囲は従来よりも東に広がり、成沢川付近まで達することが予想されるがこれらの地域もやはり圃場整備にともなう破壊が著しい。

調査結果

上記のとおり本遺跡は山麓の湧水帯を取り巻く集落跡の可能性が大きい。しかしながら用地内は湿地の分布と押し出しにより遺構密度は高くないと思われる。



第83図 中原遺跡トレンチ配置図 (1:4,000)

(12) ^{うえ やまさん}上の山三遺跡

所在地：小県郡東部町和上の山3860番地ほか

調査担当者：廣瀬昭弘 西嶋 力

調査期間：平成3年12月5日～同年12月6日

対象面積：8,000㎡ 試掘面積：180㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：殿城山南山麓の尾根上

概況

遺跡は殿城山（1,193m）から南にのびた尾根上に立地する。遺跡周辺では傾斜が緩くなり、小さな谷が幾つか入り込むため丘陵状で起伏に富んだ地形となる。標高696m。

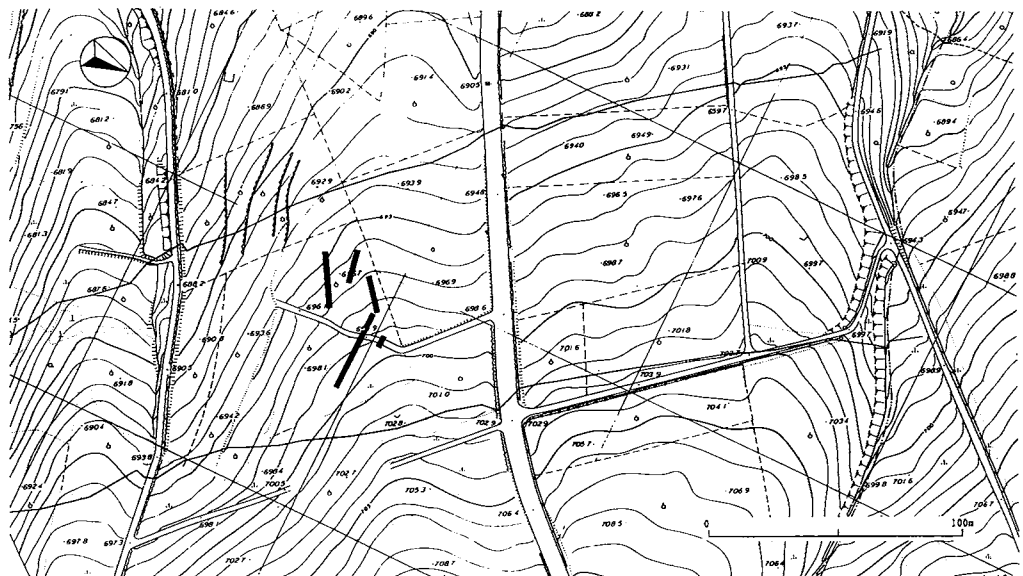
遺跡範囲はほとんど果樹園（ブドウ）となっており、試掘調査にあたり起工承諾がとれたのは遺跡の一部となり試掘率は低くなってしまった。調査は元果樹園の荒地に幅2mのトレンチを畑灌を避けて設定し、重機でトレンチを掘削しながら遺物包含層、遺構・遺物を確認し、基本土層の把握を行った。

調査区の土層は表土（耕土）が0.1～1mあり、その下部はローム質土層または明褐色砂質土層の基盤層となっている。遺物包含層は確認されず遺構も検出されなかった。遺物は土器細片（縄文・土師器）が数点表土層から出土したのみである。

なお、調査地南西の果樹園の坪掘りでも現地表下20～30cmでローム質土層になり、調査地と同じ土層であることが確認された。

調査結果

本遺跡では開墾や耕作にともなう破壊によって遺物包含層が残存しておらず、遺構もないものと判断される。



第84図 上の山三遺跡トレンチ配置図（1：3,000）

しもひのくち
(13) 下樋口遺跡

所在地：上田市殿城下樋ノ口1711番地

調査担当者：廣瀬昭弘 西嶋 力

調査期間：平成3年12月2日

対象面積：2,000m² 試掘面積：57m²

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：殿城山西麓の神川段丘面

概 況

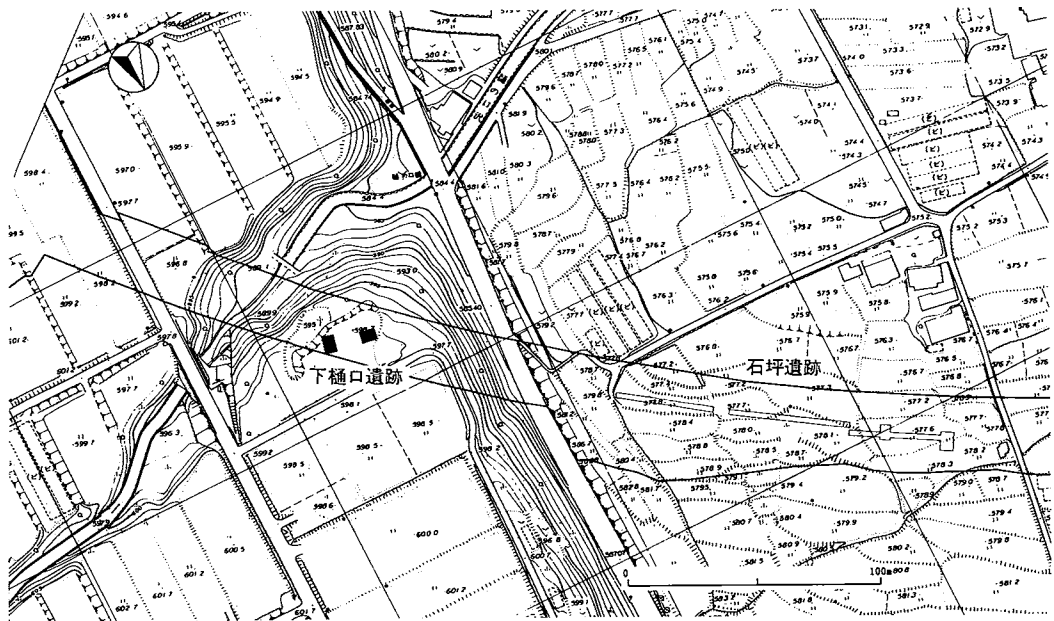
遺跡は殿城山（1,193m）の西山麓で神川によって形成された高位段丘面（染谷面）の端部に立地する。段丘面は山麓から続く緩い扇状地状の傾斜面となっている。遺跡の南側は樋の口沢による谷で段丘面が切られている。神川中位段丘面（上田面）との比高差は約20mを測る急崖となっている。標高598m。

調査は工事廃材置き場となっている荒地に任意のトレンチを2本設定した。土層は現地表面の下に2m以上の盛土があり、その下に数10cmの水田耕作土が堆積し、以下は礫混じり砂質土の段丘基盤層となる。遺物包含層はなく、遺構・遺物もない。

路線内で水田となっている地区は調査を実施できなかったが、現地踏査により少量の土器片（土師器）が採取された。

調査結果

水田地区の状況は明らかでないが、遺跡の大半が工事廃材置き場として利用されているためこの範囲では遺物包含層が残存していないと考えられる。



第85図 下樋口遺跡トレンチ配置図 (1:3,000)

いしづぼ
(14) 石坪遺跡

所在地：上田市殿城南前田753番地、石坪652番地ほか 調査担当者：廣瀬昭弘、西嶋 力

調査期間：平成3年12月2日～4日

対象面積：5,000m² 試掘面積：425m²

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：殿城山西麓の神川段丘面

概 況

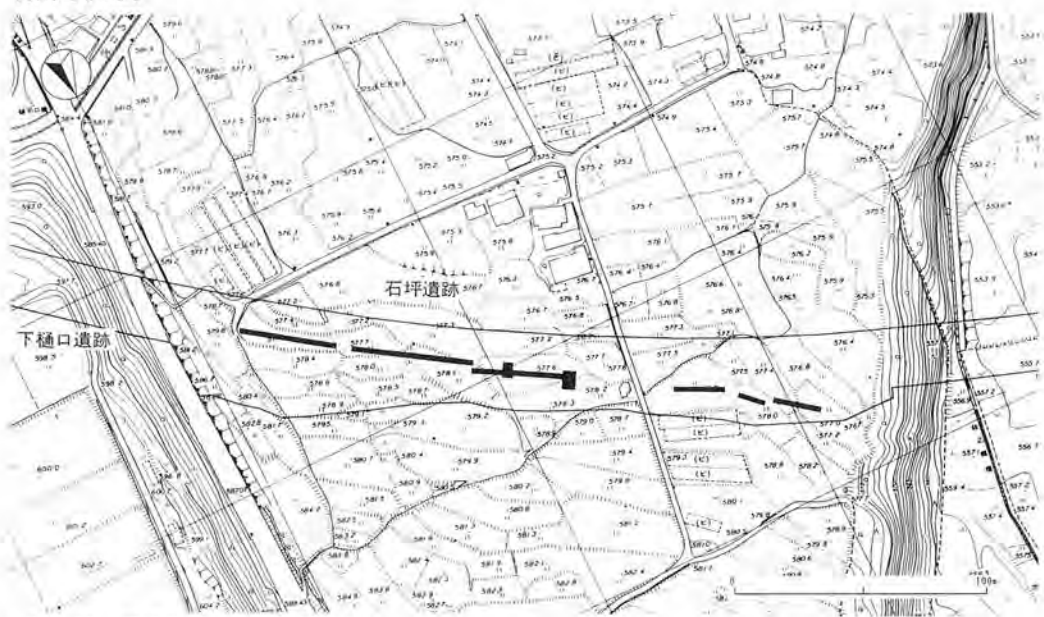
遺跡は殿城山西麓の神川段丘面で、下樋口遺跡より一段下面の中位段丘面（上田面）に立地する。段丘面は緩く南側に傾斜し、遺跡の南側を樋の口沢が流れる。神川低位段丘面との比高差は約20mで急崖となっている。標高577m。

遺跡は水田地となっており、調査は道路センター杭に沿って幅2mのトレンチを設定した。トレンチは上田面を横断した状態となる。調査区の基本土層は表土層の下に旧耕土、黒褐色の粘性土（ピート質）が堆積し、その下部は段丘基盤層の礫混じり砂質土となる。表土層下が礫層となるところも多い。

調査区内で遺物包含層は確認されなかった。遺構はないが、自然流路や不整形をした自然の落ち込み（平面・断面とも不整形で黒褐色の落ち込み）が発見された。遺物は表土層から土器片（土師器・須恵器）が少量出土したのみである。

調査結果

本遺跡では、水田による地形改変等により遺物包含層が残存しておらず、遺構もないものと判断される。



第86図 石坪遺跡トレンチ配置図 (1 : 3,000)

(15) 上原古墳群

所在地：埴科郡坂城町南条3602番地ほか

調査担当者：百瀬長秀

調査期間：平成3年12月2日～平成4年3月31日

対象面積：13,000㎡ 試掘面積：下草刈り13,000㎡

調査方法：現状は森林及び原野のため下草を刈り払い、現地踏査を徹底した。その結果発見された古墳の可能性のある石積み及びその周辺について、墳形・地形測量を実施した。

遺跡の立地：虚空蔵山北麓で、千曲川の支流である谷川左岸の河岸段丘上

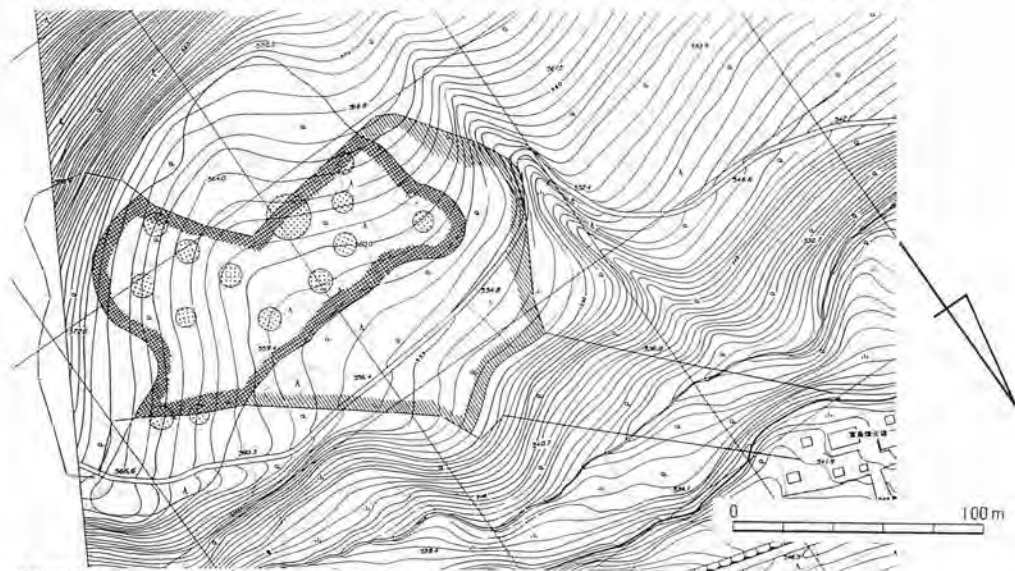
概況

『坂城町誌』中巻（森嶋稔ほか1981）によれば、坂城町の谷川古墳群は4つの支群があり、その一つが上原支群である。上原支群は谷川右岸の2基、谷川左岸の2基から成る。後者は上原塚と呼ばれ、直刀が出土したとの伝承を持つが、半壊の状態だという。今回調査対象としたのは、この上原塚を含む谷川左岸の一群であると思われるが、町誌の記載には曖昧な点があり、断定はできかねる。

古墳群を含む段丘面はいったん桑畑として開拓された後放棄され、森林、原野に戻っている。開拓時に集められた石積み（通称「やっくら」）と古墳との区別は地表観察のみでは難しいが、高速道用地内には14基の石積みが存在する。段丘面は標高560m付近を境にして山麓末端へと移行するが、石積みの大半はこの境界付近～山麓寄りに分布し、段丘中央や段丘崖寄りにはみられない。石積みの規模には大小があるが、直径5～10m、高さ0.5m程度を標準とする円形で、人頭大の角礫を乱雑に積み上げてある。石室等の施設は現状では観察できない。

調査結果

古墳の可能性のある14基の石積み及びその周辺8,000㎡の記録保存が必要であろう。



第87図 上原古墳群石積みの分布図 (1:3,000)

やまぎき やまぎきた
(16) 山崎・山崎北遺跡

所在地：埴科郡坂城町中之条1640, 1422番地ほか 調査担当者：廣瀬昭弘 西嶋 力

調査期間：平成3年12月9日～12日

対象面積：(山崎遺跡) 3,500m² 試掘面積：43m²

(山崎北遺跡) 1,500m² 試掘面積：82m²

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：大峰山麓の扇状地

概 況

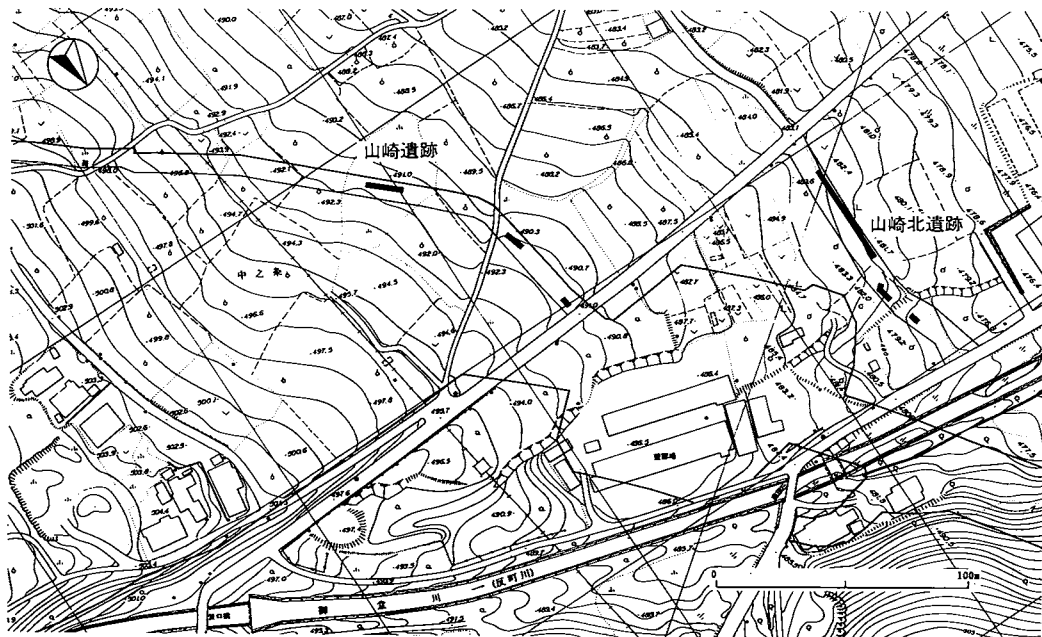
大峰山(1,327m)山中から流れ出る御堂川によって形成された扇状地の扇中央部に立地する。標高490～482m。

今回の調査は両遺跡とも工事用道路を対象とし、起工承諾のとれた畑地・荒地等に幅2mのトレンチを設定したが、かなりの部分が果樹園・畑となっており調査可能地は少なく、試掘率は低い。調査区内の土層は扇状地を形成した砂礫層が厚く堆積しており、最上部に旧耕土と現耕土(表土)が僅かに認められるだけであった。本線地内の露頭の断面観察によると砂礫層は3m以上の厚さが確認された。調査では遺物包含層が確認されず、遺構も検出されなかった。

遺物は少なく、山崎遺跡で土師器片1点と黒曜石の剥片数点が採取され、山崎北遺跡で縄文土器片と黒曜石片が散見されたにとどまる。

調査結果

工事用道路内は表土層下に扇状地形成による砂礫層が厚く堆積しているだけで、遺物包含層は存在せず、遺構も存在しないと判断される。



第88図 山崎・山崎北遺跡トレンチ配置図(1:3,000)

しみずせいてつし
(17) 清水製鉄址

所在地：更埴市森3059番地ほか

調査担当者：廣瀬昭弘 西嶋 力

調査期間：平成3年12月16日～21日

対象面積：14,000㎡ 試掘面積：1,492㎡

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：有明山の東山麓

主な検出遺構

遺構 時期	土 坑	焼土跡	ピット
平安	5	6	1

主な出土遺物

土 器：平安時代土器（羽釜など）

土製品：羽口

鉄製品：スラグ

概 況

遺跡は有明山（651m）の東山麓に入り込む谷地形の谷底に立地し、山麓斜面から山裾の緩斜面に広がる。標高435～385m。

調査は地形に合わせてトレンチを設定したが、山麓斜面で傾斜のきつい部分は調査不可能であった。遺構は遺跡の南半部に多く、尾根状に張り出した山麓の東斜面と山裾の緩斜面で確認された。特に、南側の尾根東斜面に焼土跡3基、土坑2基などとまとまりが見られた。遺跡北半部では山麓の一部で土器が散見されたが、表土層直下から大形礫を含む基盤層となる部分が多い。

遺物は少なく、スラグの他に土器が少量と羽口1点が出土したのみである。

調査結果

検出された遺構は製鉄址に関係すると考えられ、各遺構の詳細な性格は本調査で明らかにされるであろう。



第89図 清水製鉄址トレンチ配置図 (1:4,000)

しみずやま いけだはた
(18) 清水山・池田端古窯跡

所在地：中野市立ヶ花字清水山649番地ほか、字清水山裏388番地ほか 調査担当者：鶴田典昭
調査期間：平成3年11月25日～同年12月13日 入沢昌基
対象面積：48,000㎡ 試掘面積：4,200㎡ 阿藤慎治
調査方法：重機による幅2mのトレンチ試掘調査。一部分的に表土をはぎ遺構の有無を確認した。

遺跡の立地：丘陵上の斜面及び谷間の低地

堆積状況：丘陵上の緩斜面では15～30cmで遺物包含層または遺構検出面に達する。遺物包含層の下は粘土層となる。低地部分ではビート層と粘土層が互層になっており、深いところでは5mを越えても基盤層に達しない。

概況

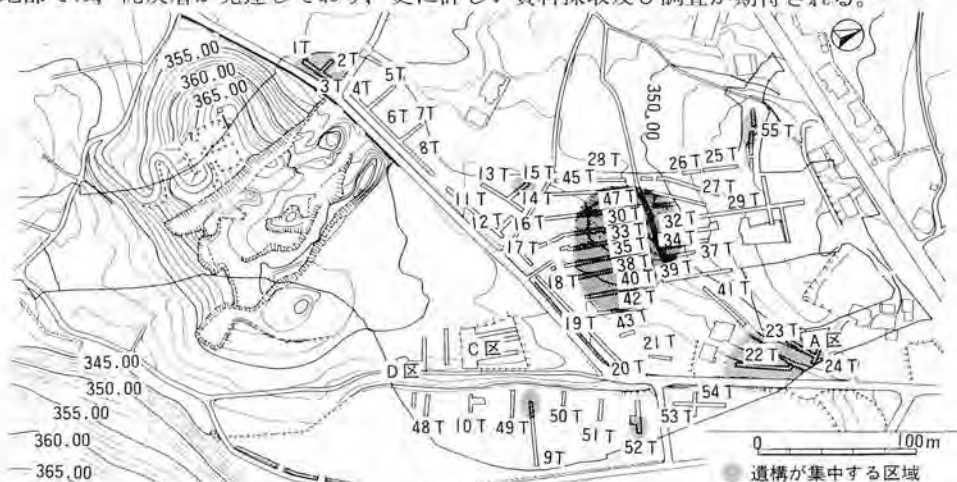
試掘の結果、窯跡と粘土採掘坑と思われる土坑などが検出された。

丘陵上緩斜面では22T・23Tに窯跡2基及び灰原が検出されている。地形及び灰原の範囲から、更に数基の窯跡の存在が予想される。灰原からは、ヘラ切り底の杯などの須恵器、布目瓦（平瓦）が出土している。資料が十分ではないが、沢田鍋土遺跡の窯跡と同様奈良時代のものと考えられる。また30T北側を中心として古墳時代の遺物包含層が広がる。その周辺部の32・33・35・38・42・44・45Tなどで粘土採掘坑と考えられる不定形な落ち込みが確認された。

低地部では、遺構と思われる丸太が立った落ち込みと、炭化物の集中が検出された（9T・52T）が、遺物は出土していない。なお、プラント・オパール分析の結果がまだ報告されていないが、水田跡の可能性もある。

調査結果

試掘を実施できなかった区域についても、地元の研究者の話から窯跡の存在が予想される。遺物、遺構が検出された区域については、土器生産に関連する他の遺構も想定され得る。また、低地部では、泥炭層が発達しており、更に詳しい資料採取及び調査が期待される。



第90図 清水山・池田端古窯跡トレンチ配置図

II 普及・研究活動の概要

1 現地説明会

今年度は6月16日(日)の長野市北平1号墳・榎田遺跡の現地説明会から、11月17日(日)の中野市七瀬遺跡の現地説明会まで、合計8遺跡、日曜日を利用した実質6日間の現地説明会が各調査現場でおこなわれた。

(1) 北平1号墳(長野市松代)

平成3年6月16日(日)、晴天の中、北平1号墳眼下の松原遺跡のプレハブを集合場所におこなわれた。この集合場所より北平1号墳のある山頂までは150mの比高差があり、北平1号墳までの道のりは、工事中道路たる山道を15～25分程度登るもので、安全面をふまえ、皆ヘルメットを着用した。

見学に訪れた450名(午前250名、午後200名)をいくつかのグループにわけ、順を追って見学していただいた。訪れた見学者は、老若男女を問わず汗をかきながら休み休み山頂の現場まで登り、その姿には現地説明会を開催した喜びを感じさせられた。

北平1号墳は、3世紀末葉頃の低墳丘墓と考えられ、山頂に単独で築かれたものである。埋葬施設は木棺を用いたものと考えられている。出土遺物は東海系の土器をはじめ、ガラス小玉などがある。

また、あわせて、集合プレハブには、参考資料として、石川条里遺跡や篠ノ井遺跡出土の資料展示や、発掘調査を理解していただくためのビデオ放映もおこなわれた。

(2) 榎田遺跡(長野市若穂)

平成3年6月16日(日)、晴天の中、北平1号墳の現地説明会と併行しておこなわれた。地元の方々を中心に400名(午前250名、午後150名)の見学者が訪れた。

現地説明会の会場となった発掘現場では、調査状況を見学していただくのみならず、住居跡にカマドを復元し火を焚くなどの実演をはじめ、見学者からは具体的な説明が多く理解しやすかったとの声が非常に多かった。

現地説明会で見学していただいた遺構や遺物は7世紀前半の集落を中心とする内容であった。

(3) 沢田鍋土遺跡(中野市立ヶ花)



第91図 榎田遺跡の現地説明会

平成3年8月4日(日)、地元
住民の方々を中心に120名(午前70
名、午後50名)の見学者があった。

おもな内容は、奈良時代の住居跡
や須恵器の登り窯、古墳時代の粘土
採掘坑などの土器生産にかかわる遺
構を中心とするものであった。

遺跡周辺では、近年まで瓦用の粘
土を採掘していたことから、古代の
粘土採掘の遺構に関心がむけられた
ようである。



第92図 沢田鍋土遺跡の現地説明会

また、プレハブでは出土した縄文
土器・石器・土師器・須恵器などの展示があり、調査研究員が精力的に説明をおこなっていた。

(4) 塩崎城見山砦(長野市篠ノ井塩崎)

平成3年8月11日(日)、天候にやや不安のある中、現地説明会がおこなわれ、420名(午前300名、午後120名)の見学者が訪れた。

当現地説明会会場も小高い山頂で、農道たる山道を15~20分ほど登らねばならなかったが、熱心な見学者が多く、見学していただく砦の曲輪にはあふれんばかりの人となった。見学者の中には、「このような遺跡とわかっていながら、どうして土採りをしてしまうのか」などの声も出され、遺跡や現地説明会への関心の一端がうかがえた。また現場プレハブでは、出土品の展示がおこなわれ、さらにプレハブより現場へ向かう道筋の草木にはそれぞれの植物の名札がつけられ、見学者の関心をひいたようである。

現地説明会の内容については、中世山城の全容のみならず、山城構築以前の遺物の展示もおこなわれた。

(5) 屋代遺跡(更埴市屋代)

平成3年9月1日(日)、隣接する更埴条里遺跡及び更埴市の調査する県立歴史館用地の清



第93図 塩崎城見山砦の現地説明会

水遺跡とあわせて現地説明会がおこなわれた。

晴天の中、現地説明会日和となったが、午前中は“防災の日”にちなんだ催しものがあり、地元の見学者の出足がにぶったが、260名（午前120名、午後140名）ほどの見学者となった。

内容については、中世及び平安時代の集落が中心となり、現場では各遺構担当者による精力的な説明がおこなわれた。

(6) 更埴条里遺跡（更埴市屋代）

平成3年9月1日（日）、晴天の中、屋代遺跡とあわせて現地説明会がおこなわれた。見学者は310名（午前140名、午後170名）ほどが訪れた。やはり屋代遺跡同様、午前中の出足はにぶったようである。

当遺跡は石川条里遺跡・川田条里遺跡とともにたいへん注目されうる水田跡を中心とするものである。居住空間としての屋代遺跡との関係を考える中で、同時に現地説明会が開催されたことはたいへん有意義なものであったと思われる。また調査された水田跡から何がわかるかなどの熱心な説明には、単調な水田遺構ではあるが、見学者をひき込む雰囲気を感じられた。

今回の説明の中心は、平安時代の水田跡や水田耕作に用いられた木製品であり、当時の水田耕作・水田経営の一端を垣間見るものであった。

(7) 栗林遺跡（中野市栗林）

平成3年10月13日（日）、秋雨が降る中、天候に恵まれなかったにもかかわらず、地元の方々を中心に160名（午前120名、午後40名）が訪れ、郷土の歴史に対する関心の高さを痛感させられた。

千曲川によってできた河岸段丘上に位置する栗林遺跡では、縄文時代後期の敷石住居跡をはじめとして、弥生時代中期の土坑・後期の住居跡・古代の住居跡・中世の水田跡など



第94図 栗林遺跡での現地説明会

のほか、地形形成過程を物語る旧河川の氾濫跡などを中心に公開した。

いっぽうプレハブにおいて、各時代の煮炊具・貯蔵具・食器などの土器や石器・鉄器などのほかに、縄文時代の土偶・耳飾りなどの土製品などを展示し、調査研究員が説明にあたった。

(8) 七瀬遺跡（中野市七瀬）

平成3年11月17日（日）、この地域での当センターの調査事業の初年度であり、現地説明会の内容などがよく知られていなかったにもかかわらず、地元の方々を中心に172名（午前76名、午後96名）の見学者を集めた。

長丘丘陵の直下に位置する七瀬遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡、多量の土器を伴出した礫群を中心に公開した。

プレハブでは当該期の土器や石器・鉄製品などを展示した。

今年度の総見学者数は2,300名以上という成果であった。悪天候や山頂での現地説明会もあったが、開催した成果は充分にあったものといえよう。しかし、現地説明会を通して、もっともっと多くの方々に埋蔵文化財や発掘調査を理解していただきたいのが本音のところである。

今年度の現地説明会での“良かったこと”“気がついたこと”をもとに、より一層見学者の方々に理解しやすく、また充実した現地説明会を開催し続けたいものである。



第95図 七瀬遺跡での現地説明会



第96図 今年度現地説明会にてパノラマカメラの使用を試みた（塩崎城見山砦にて）

2 展 示 会

財団法人長野県埋蔵文化財センターは、設立10周年をむかえる運びとなり、10周年記念事業の一環として、特別展示会「いま信濃の歴史はよみがえる」が長野県県民文化会館展示ホールにて、平成4年2月1日（土）から2月16日（日）の実質13日間開催された。2月1日の初日には2年ぶりの大雪となり見学者の出足はにぶったものの期間中4,400名ほどの見学者が足を運び熱心に見学されていた。

準備については6月に分担や係が明確になり、その中心は特別展示係や、その中に設置した展示企画係となった。そして、実質的な展示品リストや展示案を9月以降に作成しはじめたものの、それぞれの担当者が発掘調査や資料整理の仕事と併行する形で準備作業に入ったため、完全に全員が準備作業に加わわれたのは12月中旬以降のこととなった。このような経過をへて、平成4年1月29日（水）から31日（金）の3日間が会場での展示作業となった。

展示会はオープニングに始まり、列島の先人（先土器時代）・土の芸術家たち（縄文時代）・稲作がもたらしたもの（弥生時代）・まつりと墓（古墳時代）・村は語る（奈良時代から室町時代）と続き、最後にエンディングと結ぶ展示をおこなった。

“オープニング”では、これまでの発掘調査を地図や年表、そして写真パネルで紹介し、また遺跡での調査風景を復原した模型が展示された。この模型はたいへん好評であった。

“列島の先人”では、佐久市下茂内遺跡の資料を中心に、イラストをまじえ石器のつくり方や使い方をわかりやすく示した展示がおこなわれた。非常にコンパクトにまとめられていた。

“土の芸術家たち”では、人形やオープニング



第97図 展示会入口



第98図 オープニングコーナーでの見学



第99図 先土器時代コーナーでの見学



第100図 縄文時代コーナーの衣・食・住

同様好評となった模型のみならず、村東山手遺跡の敷石住居が一部復元展示された。またこれらに増して見学者の目をひいたのは北村遺跡出土の人骨展示であった。全体の構成については、単に遺構・遺物とする展示ではなく、北村遺跡をはじめとするこれまでの分析結果をもとに、衣・食・住のテーマ別に資料の展示・説明がなされた点が、たいへん評価を受けるところであった。

“稲作がもたらしたもの”では、石川条里遺跡・川田条里遺跡などの水田跡より出土した木製品類をはじめ、模型による水田区画の変遷や埋葬方法を紹介し、またイラストを多用し、わかりやすい展示構成であった。これらとあわせて篠ノ井遺跡・松原遺跡・春山B遺跡より出土した多くの石器や土器の展示には迫力があつた。

“まつりと墓”では、大星山2号墳の石室復元を中心に、土器に見る西からの影響を示し、またオーソドックスではあるが時期別の遺構・遺物の変遷と、合掌形石室・積石塚古墳による朝鮮半島との関係についてもふれられていた。

“村は語る”では、それぞれの食器や道具の使用方法や変遷を追い、あわせて東アジアの視点からの物々の流通について示されていた。また松本平での調査成果をもとに図面より復原されたイラストによる“ムラ”の景観図はたいへん興味深いものであつたといえよう。

“エンディング”では、重要文化財に指定された吉田川西遺跡出土の緑釉陶器などの展示をはじめ、センターの業務やなすべき役割についての展示がおこなわれた。また付設して当センター製作の発掘調査に係るビデオの放映や、パソコンによるQ and Aコーナーを設けていたが、幅広い年齢層の方々に好評で、足をとめていかれる見学者も多かった。

今回の展示会については、計画的に準備を進めてきたものの、発掘調査や資料整理との併行する



第101図 弥生時代コーナーの墳墓模型



第102図 古墳時代コーナーでの見学



第103図 歴史時代コーナーでの見学



第104図 エンディングコーナーの展示

準備作業であり、その中には展示企画のみならず、ビデオ・模型・Q and Aの製作、そして小展示台の製作もあった。これは一重に展示会を成功させようとの気持ちの上でできたものであろうと思われ、「これらはみな手造りとは思えない」とたいへん好評であった。また、展示会開催中は職員全員が受付や会場係を日がわりで分担し、全員参加の展示会ともなりえた。

あらゆる意味で10周年という節目の展示会は成功に終わらせることができたのではなかろうか。



第105図 Q and Aとビデオコーナー



第106図 オープニングコーナーの発掘現場復原模型



第107図 先土器コーナーの下茂内遺跡復原イラスト



第108図 縄文時代コーナーの北村遺跡復原模型



第109図 縄文時代コーナーの人形による展示



第110図 歴史時代コーナーの南栗遺跡、図面からの復原イラスト

3 指導, 研究会, 学習会

期 日	講 師	指 導 内 容 ほ か
3. 4. 11	名古屋市立博物館学芸員 水谷栄太郎	吉田川西遺跡出土遺物について
4. 24	野尻湖博物館学芸員 中村由克	中野市沢田鍋土遺跡他の地質について
5. 21	奈良県橿原考古学研究所林部均技師	篠ノ井, 石川条里遺跡出土土器について
5. 24	愛知大学 加納俊介講師	北平第1号墳出土土器について
"	(財)愛知県埋蔵文化財センター 赤塚次郎	"
6. 1	筑波大学 岩崎卓也教授	北平第1号墳の調査について
"	東海大学 常木晃講師	"
6. 4	新潟県教育庁 阿部郁男副参事他2名	埋文センターの調査体制について
6. 5	森嶋稔理事	北平第1号墳他調査状況全般について
"	本庄高校 坂本和俊教諭	北平第1号墳の調査について
7. 10	埼玉県入間郡市担当者会	更埴条里, 屋代遺跡群他の調査について
7. 18	福岡市教育委員会 山口譲治	木器の整理状況について
7. 25	昭和女子大学 武田昭子講師	木器等保存処理について
7. 31	山梨県埋蔵文化財センター 保坂他4名	塩崎城見山砦の調査について
8. 2	山梨文化財研究所 萩原三雄研究部長他4名	"
8. 5	考古学を学ぶ会	松原遺跡の調査について
8. 8	(財)茨城県教育財団 沼田文夫整理課長他2名	整理作業及び報告書刊行の状況について
8. 19	群馬県埋蔵文化財センター 大西雅広研究員他2名	木器の整理について
"	京都大学院生 伊藤淳史	松原遺跡出土の土器について
8. 29	奈良太学 西山要一助教授他	保存処理について
9. 2	滋賀県文化財保護協会 中村健二研究員他	木器等の整理状況について

期 日	講 師	指 導 内 容 ほ か
10. 11	気象庁地震観測所 望月英志所長他	篠ノ井遺跡の調査状況について
10. 23	富山県文化振興財団岸本雅敏課長代理他	調査状況全般について
10. 28	奈良大学西山要一助教授	保存処理について
11. 2	兵庫県穴栗郡広域行政事務組合 片山昭悟 調査員	中島B遺跡出土の鏡について
11. 5	富山市教育委員会 藤田富士夫文化財係長	上木戸遺跡の出土遺物について
11. 15	（財）元興寺文化財研究所 川本耕三研究員他 1名	保存処理について
12. 5	（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 石坂俊郎 主任調査員	榎田遺跡他の集落遺跡の調査につ いて
12. 6	神奈川県埋蔵文化財センター 西川修一主 任他1名	松原遺跡他集落遺跡の調査につ いて
12. 9	（財）君津郡市文化財センター 光江章主任調 査研究員	〃
12. 17	名古屋大学 渡辺誠教授	栗林遺跡の調査について
12. 25	金沢大学 鈴木三男助教授	木器の樹種について
〃	（財）森林総合研究所 能城修一研究員	〃
4. 1. 13	奈良女子大学 村田修三教授	城郭調査について
1. 21	神村透理事	弥生時代の石器及び土器の整理に ついて
2. 13	岩手県立博物館 佐藤嘉広学芸員	県内出土の縄文土器について
2. 14	（財）福島県文化センター 香川愼一文化財主 事他	北村遺跡出土の配石遺構について
2. 20	（財）静岡県埋蔵文化財研究所 宮村典雄研究 員他2名	長野県の水田調査の状況について

4. 刊行物

- 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1—佐久市内その1（下茂内遺跡）』
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3—長野市内その1（大室古墳群）』
『長野県埋蔵文化財センター 年報8』（1991年度）
『長野県埋蔵文化財ニュース』32～35
『いま信濃の歴史はよみがえる—10年の成果と歩み 財団法人設立10周年記念誌』

III 機構・事業の概要

1 機構

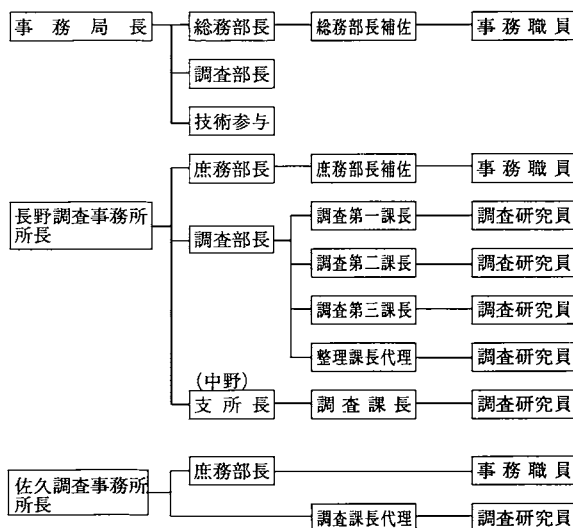
(1) 組織

(4. 3. 31現在)

○理事会

理事長 (県教育長)
副理事長
専務理事 (1名)
理事 (県企画局長)
〃 (県高速道局長)
〃 (県北陸新幹線局長)
〃 (県教委文化課長)
〃 (県考古学会長)
〃 (市町村長代表)
〃 (市町村長教育長代表)
〃 (考古学研究者代表)
監事 (県会計局会計課長)
〃 (県教委総務課長)

○事務局



(2) 事務所所在地

本 部	長野市大字南長野字幅下692-2 長野県教育委員会事務局文化課内
長野調査事務所	長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
〃 中野支所	中野市大字立ヶ花字西原55-1
佐久調査事務所	佐久市大字安原字蛇塚1367

2 事業

(1) 理事会および会計監査

理事会

- 第22回理事会 平成3年5月31日 会場 長野市 山王共済会館
- 第1号議案 平成2年度事業報告書について
- 第2号議案 平成2年度決算報告書について

- 第23回理事会 平成4年3月27日 会場 長野市 ホテル信濃路
 - 第1号議案 平成4年度事業計画書(案)について
 - 第2号議案 平成4年度収支予算書(案)について
 - 第3号議案 平成3年度収支補正予算書(案)について

会計監査

平成3年5月21日実施 平成2年度事業報告書および収支決算書について

(2) 調査事業

長野自動車道および上信越自動車道に係る埋蔵文化財発掘調査—長野県教育委員会および長野市教育委員会からの委託, 志賀中野有料道路にかかる同調査—長野県道路公社等からの委託他

ア 調査遺跡および面積

長野自動車道関係 更埴市・長野市地域内4遺跡 16,800㎡

上信越自動車道関係 佐久市・更埴市・長野市地域内14遺跡 117,950㎡

志賀中野有料道路関係 中野市内2遺跡 27,850㎡

その他

イ 整理事業

長野自動車道関係 明科町・麻積村・坂北村・長野市および更埴市の14遺跡の整理事業

上信越自動車道関係 佐久市・更埴市・長野市・中野市地域14遺跡の整理事業

(3) 事業費

長野自動車道関係 867,680千円

上信越自動車道関係 1,231,246千円

志賀中野有料道路関係 397,100千円

その他

(4) 普及活動 (84ページ参照)

(5) 職員研修

ア 講師招へい及び来所による指導・講習会等 (91ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

期 間	日 数	課 程	参 加 者
平成 3. 5. 28～6. 19	23	環境考古課程	渡 辺 敏 泰
11. 26～12. 7	12	水田遺跡調査課程	川 崎 保
12. 17～12. 20	4	漆器調査課程	白 沢 勝 彦

ウ 海外研修

期 日	内 容	参加者
平成 4 2. 20～ 3. 1	<p>我国古代文化の源流となった中国の古代文化遺跡の研究</p> <p>①遺跡・博物館等の見学 故宮博物院, 中国歴史博物館 甘肅省博物館, 乾陵, 永泰公主墓 兵馬俑坑, 半坡・咸陽市博物館 陝西省歴史博物館, 龍門石窟, 洛陽博物館 上海博物館他</p> <p>②歴史的環境の視察 北京, 蘭州, 西安, 洛陽, 上海各市街および近郊</p> <p>③研究者との懇談会 西安他</p>	土屋 積 小林秀行 寺内隆夫 上田典男

エ その他の学会関係研究会・研修会

期 日	内 容
5. 25～5. 26	第 8 回日本文化財科学会大会 (東京都) (1名)
6. 1～6. 2	第13回古文化財科学研究会 (奈良市) (2名)
8. 3～8. 4	第 8 回全国城郭研究者セミナー「小規模城郭」(奈良市) (1名)
8. 24～8. 25	第30回埋蔵文化財研究会「各地域における米づくりの開始」(福岡市) (3名)
8. 28～8. 29	平成 3 年度分析機器会 (千葉市) (2名)
10. 10～10. 12	第45回日本人類学会, 日本民族学会連合大会 (東京都) (2名)
10. 31～11. 1	関東甲信越埋文担当者共同研修会「火山灰と考古学」(東京都) (2名)
11. 9～11. 10	東海シンポジウム「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」(浜松市) (2名)
11. 16～11. 17	シンポジウム「西相模の3～4世紀」(小田原市) (2名)
12. 7～12. 8	東日本埋文研究会「東日本における稲作の受容」
1. 25～1. 26	長野県考古学会シンポジウム「科野における発生期の古墳」(長野市) (10名) (岡谷市) (9名)
2. 8～2. 9	第 5 回縄文セミナー「縄文時代晩期の諸問題」(群馬県) (4名)
2. 15～2. 16	第31回埋蔵文化財研究大会「弥生時代の石器 その始まりと終わり」(大阪市) (5名)

オ 県外埋蔵文化財施設・遺跡等視察および資料調査

期 日	視 察 ・ 調 査 地	参加者
平成3. 6. 18~20	展示施設および木製品の保存処理施設等の調査（静岡，群馬）	2名
この他，他県埋文センター，博物館・研究施設・調査現場の視察・資料調査を行った。延べ56カ所 41名		

カ 全埋文協などへの参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
平成3. 5. 10	埋文協関東・中部ブロック会議	宇都宮市	伊藤 万寿雄 塚田 次夫 小林 秀夫 小塚 原隆明 百瀬 長秀 栗林 高広 畑 幹雄 小林 秀雄 堀内 規矩雄 土屋 積郎 寺島 俊彦 白沢 勝彦 白峯 村忠司 佐藤 明雄 原 明芳
5. 30	埋文協総会	大宮市	
7. 11~12	関越自動車道関係4県連絡会議	長野市	
9. 19~20	埋文協連絡協議会研修会	奈良市	
10. 14~15	関越自動車道関係群馬長野連絡協議会	伊香保町	
10. 24	埋文協関東・中部ブロック会議	長野市	(事務局)
10. 30~	関東甲信越静埋文担当者共同研修協議会	大島町	白田 武正 土屋 積
11. 1			
11. 7~8	関東甲信越静埋文行政担当者会議	館山市	原 明芳 青島 重子 古川 英治

キ 長野県教育センター・産業教育センター研修

期 日	学校別	分 野	講 座 名	参 加 者
教育センター（※印 企画研修・△印 公開講座）				
平成3. 7. 2-4	小	図工・美術	彫塑表現基礎	出河 裕典
7. 9-10	小	技 術	木材加工基礎	中村 敏生
8. 1-2	小	教育機器	パソコンに挑戦	中村 寛
8. 6-9	小	理 科	臨海	本田 真
9. 4-6	小	教育機器	学習指導に生かすパソコン	宮脇 正実
7. 5	※	教職教養	哲学への道	中村 寛
〃	〃	〃	〃	入沢 昌基
〃	〃	〃	〃	北島 英巳
11. 26	〃	〃	ジャーナリストの視点	稲場 隆
〃	〃	〃	〃	高野 昌英

12. 5	〃	〃	生きるということ	奥原 聡
12. 13	〃	〃	自然の神秘を探る	松岡忠一郎
4. 1. 14	〃	教育相談	相談の心	〃
〃	〃	〃	〃	奥原 聡
1. 17	〃	教職教養	文化と自然	甲田圭吾
〃	〃	〃	〃	川崎 保
3. 6. 12	△	生涯教育	オープンスクールの思想と実践	越 修一
8. 7	〃	国 語	国語教育の課題と展望	伊藤克己
10. 18	〃	生活科	生活科と評価	〃
11. 29	〃	特活・進路	生き方の指導を考える	越 修一
4. 1. 16	〃	技 術	パソコン通信の世界	〃
産業教育センター				
平成4. 1. 17		情報処理	ワープロ入門	町田勝則
		〃	〃	依田謙一

ク 姉妹校制度研修

期 日	訪 問 学 校	研 修 内 容	参 加 者
平成4. 2. 14	中野西高校	授業参観・談話等	入沢昌基・岡村秀雄 奥原 聡・林 正則 赤塩 仁・藤沢高広 阿藤慎治
2. 25	高丘小学校	〃	北島英巳・中村敏生 渡辺敏泰・林 正則 越 修一・藤沢高広 阿藤慎治
2. 21	篠ノ井西小学校	〃	伊藤克己・伴 信夫 清水 弘・中村 寛 大和龍一・松岡昭彦
3. 2	篠ノ井高校	〃	伊藤克己・伴 信夫 馬場信義・白沢勝彦 本田 真

ケ 県内市町村および関係機関への協力・指導等

期 日	市町村等	協 力 ・ 指 導 内 容 等
平成3. 4. 1～4. 3. 31	更埴市	(仮) 県立歴史館建設用地内(更埴条里遺跡)の発掘調査(4名)
7. 8～8. 7	茅野市	茂佐久保遺跡の発掘調査(2名)
8. 1～11. 30	佐久市	中条峯, 寄山遺跡, 寄山古墳の発掘調査(2名)
10. 1～3. 31	長野市	浅川扇状地遺跡群の発掘調査(2名)
	長野市他6市, 5町, 3村他	市町村教育委員会の発掘調査, 整理作業 保存処理, 報告書刊行等 考古学講座

コ 設立10周年記念事業

期 日	事 業	会 場	内 容
平成4. 2. 8 "	記念式典 記念講演	県民文化会館 "	○講師田中 琢 奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長 ○演題「遺跡に歴史を読む」 入場者数 450名
4. 2. 1～ 2. 16	記念特別展	"	昭和57年以来10年間の調査によって得られた成果1,400点を公開展示する。 入場者数4,400名

平成3年度役員及び職員

理 事 会

理 事 長	宮崎 和順 (県教育長)	
副 理 事 長	伊藤万寿雄	
専 務 理 事	塚原 隆明	
理 事	山極 達郎 (県企画局長)	北沢 文教 (県高速道局長)
	山下 四郎 (県教委文化課長)	宮島 和夫 (県北陸新幹線局長)
	宮坂 博敏 (更埴市長)	森嶋 稔 (県考古学会長)
	奥村 秀雄 (長野市教育長)	神村 透 (考古学研究者)
監 事	石井 俊雄 (県会計局会計課長)	深瀬 弘夫 (県教委総務課長)

事 務 局

事務局 長	塚原 隆明 (兼)	
総務部 長	塚田 次夫	
調査部 長	小林 秀夫	
技術参 与	佐藤 今雄	
総務部長補佐	山崎今朝寛	
主 査	三ツ井栄一郎	青島 重子
主 任	栗林 高広	

調査事務所

	長野調査事務所	佐久調査事務所
所 長	峯村忠司 中野支所長堀内規矩雄	塚原隆明 (前 畑 幹雄)
庶務部 長	塚田次夫 (兼)	" (")
庶務部長補佐	山崎今朝寛	
事務職員	青島重子 (兼) 三ツ井栄一郎 (兼) 栗林高広 (〃) 桑原衆三	古川英治
調査部 長	小林秀夫 (兼)	
調査課 長	白田武正 百瀬長秀 土屋積 原明芳 (代理)	寺島俊郎 (代理)
調査研究員	山際 充 岡沢 康夫 伴 信夫 深沢 重夫 松岡忠一郎 伊藤 克己 中村 寛 清水 弘 藤沢袈裟一 大和 龍一 吉沢 信幸 甲田 圭吾 松岡 昭彦 大竹 憲昭 臼居 直之 平林 彰 田中正治郎 宮脇 正実 上田 典男 青木 一男 百瀬 忠幸 宮島 義和 澤谷 昌英 出河 裕典 三上 徹也 広瀬 昭弘 馬場 信義 西嶋 力 寺内 隆夫 西山 克己 夏目 大助 伊藤 友久 綿田 弘実 市川 隆之 藤原 直人 白沢 勝彦 若林 卓 町田 勝則 河西 克造 野村 一寿 黒岩 隆 小林 清人 下島 浩伸 武居 公明 稲場 隆 川崎 保 本田 真 西 香子 水沢 教子 櫻井 秀雄 広田 和穂 上田 真 贅田 明 柳沢 亮 田中 貴美子 長谷川 桂子 谷 和隆 福島 正樹 大久保 邦彦 中沢 道彦 北島 英巳 渡辺 敏泰 越 修一 中村 敏生 林 正則 奥原 聡 岡村 秀雄 鶴田 典昭 入江 昌基 赤塩 仁 阿藤 慎治 ○中野市から派遣 中島 庄一 斉藤 久美 藤沢 高広	木内 英一 小林 秀行 近藤 尚義 宇賀神誠司 依田 謙一 興水 太仲

長野県埋蔵文化財センター年報 8 1991

発行日 平成4年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963の4

TEL 0262-93-5926

印刷 信毎書籍印刷株式会社

長野市西和田470

TEL 0262-43-2105